

敵は云ふまでもなくロシアにあり。されど眞の敵はその人民にあらず、兵士にあらずして、その専制黨、貴族派の徒に侵略を事とし、膨脹を能事とし、この剛欲によりて東洋の天地を攪亂し、我が國の存在に侮辱と侵害を加へたる者にあり。若し君子はその罪を惡みてその人を惡まずの仁心を此間に適用せば我等の敵は正しく、ロシアの貴族等の精神を横領せる剛欲、侵略欲にあり。この敵にして倒れなば、彼れが傀儡となり手足となりて蠢動せる、ツァールや貴族や乃至彼等の爲に驅使せらるゝ無辜の民、その武器、此等に現はれたる敵は魍魎の日光に霧散する如くに消え去らんのみ。若しこの敵を倒さずして徒にその末を追ひなば、一戰勝つも一戰生じ、終局の目的は終に達するに由なけん。戰勝國の指導者、終局の目的を口にする人々、果してこの敵を見極めたりや。

凡そ戰は力と力との戰なり、而して力の根本は人意にあり、武器、兵革はその人意の手足、機械に過ぎず。邪を遂げん意志あり、之に對して正

を主張するの意志ありて、茲に正邪の戰は起る。侵略の意志あり、防衛の意志あり、二國は此が爲に戰ふ。ロシアに膨脹の剛欲あり、日本に東亞自衛の心あり、此に於てか今の戰爭は生じたるにあらずや。今や戰場にありて我等の力は彼等の力に勝てり、彼等の手足は我等の武器に破られたり。戰場の勝利は殆ど決せり。然らば即ち終局の勝利は如何。戰勝國民たる我等が今日特に熟慮すべく企畫すべきは洵に此間の消息とそれに處するの態度とにあらずや。

我等が眞正根本の敵は正しくロシア貴族派の侵略欲にあり、而してその兵力は已に決戰的に破られたり、又彼等の人民も此惡鬼に對して反抗の血を流しつゝあり。彼等は果して此等の打撃によりて其欲を抑へ、我等は戰場の征服によりて眞に彼等を征服したりしや。思ふにロシア貴族の心状態は今や煩悶鬱憤の情に充たされ、この痙攣的反動は必ずや我が國に對しては旺盛なる復讐心となり、彼等の人民に對しては憎嫉の甚だしき加へたるならん。彼等が力足らず、手足破られた

るの今日、一時或は平和の路を取るも、いつかは又其剛欲の復興と復讐の舉動に出てざるを保し難し。彼等の侵略欲が外戦の敗北と内亂の壓抑との爲に全く征服せられ、全く消滅せざる以上は、水があらゆる間隙を通じて卑きに就かんとするが如く、機に乗じ折に觸れて再び東亞の天に横溢し來るべし。果して然らば、韓國の保全、極東の平和、帝國の光榮、永遠の平和は戰場の一勝によりて終局の目的を達したりといふべきか。この目的の爲に我等は先づ彼等の武器を銷かして、平和の保障を作らざるべからず。此が爲には戦争の持続も、又場合によりては彼等が東亞に於ける海陸を扼し、或は滿韓の野にも彼等に備ふる所あるべきなり。此が爲には或は韓國の獨立、清國領土の保全等區々たる名目に拘泥する能はざる場合もあらん。

然れども、宜しきに應じて此等の措處を執るに當りて、我等が一日も念頭に離すべからざるは、此れ等の保障が有形の保障たるに止まる事にあり。兵を以て得たる者は兵に奪はるゝ事あるべし。力を以て作

りたる保障は力に依りて破られ得べし。若し日本國民にして滿韓の野に經營を施し、浦鹽を占領し、樺太を攻略し、乃至領地をシベリアに占め、兵力を以て之を守り、此にてロシアの侵略に對する保障十分に充足し、ロシアの征服はその終局の目的を達したりと思ふ者あらば、是れ甚だしき迷想なり。ロシア貴族の侵略欲が杜絶せられざる限り、若くは其人民の力が根本的に之を肘制し、若くは世界の人道的勢力が自然に彼等の侵略欲を壓抑するの強さに達せざる限り、我等の敵は全く征服せられたりとはいふ可らず、從て戦争の目的は十全に達せられたりといふべからず。兵は征服の器具のみ、その器具を使用し、其力を發展すべき根本の覺悟が國民の中に確立するにあらざるよりは、一時の征服は未だ十分に我等をして枕を高うせしむる能はざるなり。然らば則ち此の如き十全の征服を遂ぐるの方如何。

昔者、印度國內に最初の統一帝政を行ひ、餘威四隣に及びし阿育大王の如きは眞に征服の眞義を知りし者なり。彼れは曾て西南印度の敵

を平げて、數十万の民を捕虜とし、兵威並ぶ者なかりし時に當りて、自ら思へらく、兵は人の手足を得べきも、未だその心を服し得ず、人の心を服し、眞に太平平治を致さんには、人心の根底信仰の源泉に對して、征戰の實を擧げざるべからずと。此に於て彼れは身卒先して佛敎仁慈の敎を奉じ、民心をしてこの慈心の中に悦服結合せしめん事を勉めて、あらゆる方法を用ひたり。その治績尙今日に存して人をしてその餘澤に服せしむるは、一にこの着眼と根本の覺悟とに出でしなり。此の如くにして、彼は國內の民心を統一し、その德敎に四境を靖定したる後、進て遠近四隣の國民を感化せん事を勉め、その德化遠く埃及に及びぬ。大王は此に於て宣して曰く、法敎に依る征服は眞の征服なり。此の如き征服は洵に朕の喜ぶ所なりと。眞正の征服實に是れ永遠の征服にして、何れの征服も勝利も此眞正の征服に伴はるべしにあらざれば、完からず、如何なる平和も、内心悦服の大本を衝くにあらざれば、永遠の平和と稱すべからず。皇祖神天武皇が東方中原を征服して上は、則ち乾靈が

國を授け賜ひし德に答へ、下は則ち皇孫が正を養ひし心を弘め、而して後に六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇となさんと宣し給ひし、その征服亦實に此の如き眞正征服の理想にあらずして何ぞや。

我等は理想的の空論を弄する者にあらず。此の如き征服の理想は今や戰勝の光榮を完うし、終局の目的を達し、永遠なる平和の保障を鞏固にせん爲の最深、最大要契にして、國民が特に此般の覺悟を定め、征服を完うすべき感化の根本に着目するの切要なるを大呼せんとするにあり。我等は進て戰ふと共にその戰の當の敵を、内心より感化し、征服せざるべからず。若しロシヤの貴族にしてその兵戈手足の敗北によりて内に自ら省み、痛悔改悛、その非望野心の終に天理人道に容れられざるを悟らば幸なり。我等の理想は有形の土地を得るよりも、黄金の償金を得るよりも、彼等の改悛によりて、偉大の利を得べし。この戰勝の結果として、普佛戰後に於けるが如き反目嫉視を増長するに終らしめんか、我等は戰には勝つとも、爾後僅に「武裝的平和」によりて、一日の安を

偷まざるを得ざるの不幸を見ん。我等の理想は、有形的に彼等の力を征服して一旦の勝に誇るにあらずして、飽くまで無形的根本的に彼等敵國の精神的武裝を捨てしむるにあらざるべからず。然れどもロシア貴族等の蒙昧にして剛欲なる、或は一旦の戦敗のみによりてはこの痛悔の實を挙げざるべし。此理想が不幸にして今直に達せられず、敵國の精神的武裝が一時に撤去せられざるが如き事あるも、我等は飽くまでこの理想に忠實に根本的に終局の目的に向て、猛奮突進せざるべからず。只その方法としてロシアの侵略欲を滅すの外、間接に種々の手段を執るを得べし。而かも終局の目的はこの根本征服にあるを忘るべからざるなり。

間接の方法として執るべき一は、ロシア人民の感化にあり。先年トルストイ翁が戦争を非難して、根本的に惡に抗するに惡を以てする勿れ、「内に自ら省みよ」と教へたる時、我が同胞の中には、非戰論の名を嫉惡して、其論旨の在る所をも玩味せず、一二日本を非難するの言句ありし

に驚きて、醜惡なる譏誣をこの預言者の上に加へたる者すらありき。此の如きはトルストイが一個の預言的指導者にして、その精神の支配力が如何なる力を呈すべきを知らざると、又一は己れに異なる者を理會するの能力なきことに起因す。試に思へ、ロシア滿廷の貴族がトルストイに聽く事一分にして、その侵略的剛欲の節制を勉めしならんには、今回の戦争は果して必要なりしか。又我等は神武の大詔に明かなる如く、刃に血らずして「東洋平和の目的を達し得ざりしか。又試に思へ、トルストイの勢力民間に及ばず、その預言的教訓がロシア民心の幾分を動かす事なかりしならんには、我等が當の敵なるロシアの貴族は、如何に内に顧るの患なく、安心して我等と戦ひ得たりしならんか。此の如きは今の論旨に對して一の餘談に過ぎずと雖も、我等の同胞の間に、如何に根本的にロシアの民心を感化して此に依りて戦争の終局目的を達するの覺悟なきかを見來れば、この一事亦將來の進運にとりて特に注意すべきにあらず。

預言者トルストイは今回ロシアの内亂改革運動に關して語て曰く、ロシア人民はその政體の革命を行ふ前に先づその心の革命を行はざるべからずと。日本の同胞は能くこの言の眞意義を玩味して我等がその間に執るべき態度を考一考せよ。トルストイの所謂心の革命が行はれ、ロシア二億の人心が一致して能く神意を體し、内在廷野心家の擅横を制し、外は與國隣邦に對してよくその信義を守るに至りしならんには、我等が戰勝の光榮は如何にその光彩を放ち、我等が征服は如何に根本的にその目的を達し、而して東洋の平和、帝國の隆運は如何に永遠の保障を得べきか。これを以て迂愚の思想なりと嘲る者あらば、近くはロシア内部の動搖が如何に我等の行動に利したるかを見ず、遠くは開戰征服の眞目的を思はず、光榮ある平和の眞保障を求めず、宣戰大詔の主旨を奉ぜざる者のみ。若しロシア貴族の野心を撲滅するの理想を直接に行ふ能はずとすれば、我等は間接にその民心を感化し、トルストイの主義をロシア國內に洽からしめ、この人民と我等と内外相

應して、根本的にロシアの野心を制すべし。是れ戰場の勝利を完全に、兵器の征服を鞏固永遠にするの途にあらずや。

我等の言を以て迂なりとする論者は、終局の目的、征服の鞏固、永遠の平和が單に武力のみにて得らるゝと思惟するか。若し此の如き思想によりてこの戰の始終を貫かんとする者あらば、是れ實に武力侵略の外に能事なく、外交詐僞の外に戰爭を助け、戰勝を完うするを知らざるロシア貴族の亞流のみ。武力にて彼れに勝つとも、精神的に彼等に降りたる者のみ。我等が毎に反復して世に警告したるが如く、我等とロシアの人民と而して又世界の人道とは、ロシア主戰派の貴族に於て共同の敵を有せり。之を征服し、その野心を絶たんが爲めに、一方にては人道的勢力と共同すると共に、又ロシアの人心を感化し、誘導して、この共同の敵を永遠に征服せんとするは果して迂愚の舉なるか。この理想を根本にして、敵國に對する態度を定むるにあらずんば、或は恐る、今の戰勝もその結果を鞏固にし、永遠にする能はざらん事を。

○ロシア民心の感化と共に、近く直接に注意すべきは、○滿韓人心の感化、○眞征服にあり。○戦勝の結果、我等は恐くは滿韓の野に幾多の經營を施し、その人民に接觸し、彼等を包容すべきの職務を執らざるを得ざるべし。この時に際しては、有、形、の、施、設、制、度、兵、備、が、必、要、な、る、は、云、ふ、ま、で、も、な、か、る、べ、き、も、此、と、平、行、し、て、否、此、等、一、切、經、營、の、根、本、と、し、て、そ、の、人、心、を、悅、服、せ、し、め、そ、の、境、そ、の、人、を、眞、心、根、底、よ、り、征、服、せ、ざ、れ、ば、戰、勝、の、光、榮、經、營、の、美、果、は、容、易、に、覆、沒、せ、ら、る、べ、し。言を換えて云へば、彼等と我等との間に精神の會通あらしめざるべからず。その征服をして兵力によりての征服ならずして、精神的道德的征服たらしめざるべからず。この征服、會通は或は同文の民、或は黄色の民といふが如き斷片の事實のみを根據とするにあらずして、深く人心の奥に入り、同一の理想、同一の信仰に基きたる終局の本原に着目して始めて完かるべし。即ち近くは東亞の平和、東亞與國の興隆の爲めには、我等諸國民の協同一致を要すると、遠くは、又世界文明の大勢が偏狹なる保守的回顧を許さずして

我等の眼を宇内大にし、その文明の大勢に乗せざるべからざる事を彼等に知らしめ、共同してその途に上らしめざるべからず。而してこの協同精神の根本としては、信仰の道に指導し、提携して、茲に印度、支那幾千年の信仰を復活すると共に、又此を世界的にするの覺悟なかるべからず。支那の改革者康梁諸氏の大同の教の如き、已にこの點に着目せるを思へば、戦勝の民たる我等は物質有形の施設を全うする爲にも、又終局根本の理想の爲にも此間の消息機微を會得せずして可なんや。團匪の亂、東學黨の變の如きは、畢竟東亞の文明を世界的に嚮導し、發達せしむべき我等日本人が三思してその禍源を絶つべき必要を示さずや。○滿韓の經營といふも、教育の普及といふも、この根本、着眼を失せば、その根底を失ひ、その征服は爲めに鞏固を失ひ、而して東亞の平和文明は終に歸する所を失はん。

古よりその文明理想によりて征服の實を完うせし者、或は之れに近き者一二に止らず。而して此の如き征服者はその氣宇濶大にして能

く、彼、征服の民を、鑄治し、兵力以外に人心を悦服して、此に依りて世界の文明に一大勢力を作り出だせし者に外ならず。アレキサンダー大王の兵馬はインダス河を度りしに過ぎず、されど彼れと彼れの繼續者は能く希臘的精神によりてその民心を收容するの道を知り、有形無形の文明をその精神界に植え付けたり。この故に地上に樹てられたるアレキサンダーの帝國はその死と共に散滅に歸せしも、人心に銘せられし希臘文明の大王國は形を換え風を變じながらも、佛教の中に入り、基督教の中に沃て東西に傳播したり。天平の古に希臘美術の精神感化を受け、之を自己の文明に發達し來りたる我等日本人は、今や西洋の文學、美術、宗教によりて再び新に希臘的精神を呼吸しつゝあり。アレキサンダーの帝國がこの極東にも無形の而かも活きたる生命を有せるは何ぞや。アレキサンダーの征戰が、啻に兵馬の征戰のみにあらざりし事、是れ我等戰勝の民に對する好箇の教訓にあらずや。

羅馬の帝國は瓦解したり、されどその法律と文字と教育とは殆ど世

界を統一したり。この史家の明言は我等如何に之を讀むべきか。『この皇女世を知らし召さん時……誠の神は世に知られ……人は信義の道を知り、この道によりて世は榮えん。この榮えは血にて得し者ならず』。シキスピアがその女王の徳を頌して歌ひしこの理想は、我等の現當に執るべき方針に對して明白なる指導にあらずや。アングロサクソン民族の止住する處には自由榮え文運興り、敬神博愛の文明を理想とする米國となり、濠洲を現ぜしは果して武力經營のみの力なるか。天業を恢弘して天下に光宅せんとの大詔に開かれたる帝國が二十世紀の劈頭に、命維れ新なる戰勝の民として隣國に臨むに當りて、その經營を兵馬や物質の末にのみ限らんとするが如きは、祖先を辱しむるの甚しき者、過去現在の他國民の對して、將た又子孫後昏に對して、何の言を以てその譏りを解くべきか。

我等にして戰勝の祝福を全うし、この覺悟を定め、この理想に向て勇往せんには、天下何物の恐るべき者あらんや。假令世界の列國尙未だ

兵馬競争の迷夢を脱せず、侵略攻伐の蠻態を演ずる者ありとも、又帝國主義の美名が此の如き氣運に利用せらるゝとも、我等が正義の行動は忽にして世界の人心を動かし、彼等虎視眈々の帝王宰相をして内心惴爾の情に堪えざらしめ、又萬邦人民が眞心、世界平和を希求し、人道の發揚を渴望するの情は、我が日本に歸向して、列國の同情、世界の尊敬は、期せずして我が帝國の威武と徳風とを仰ぐに至るべし。勢此の如くなれば、敵國ロシアの主戰派乃至他邦剛欲の徒が如何に躍起となりて、東亞の天地を攪亂せんとするも、帝國の言動に反せんとするも、世界の道義的中心、精神的盟主たる我等に向て何等の禍害をも加ふる能はざるべし。永遠の平和、此に至りて初めて實あり、終局の目的、此に依りて眞に達するを得べし。

世の自ら卑うし、自ら頼まざる者、一國の理想が如何の力を有するかを知らず、只僅に兵力の勝利に帝國建國の能事終り名譽全しとする輩は、我れ等の理想を以て誇大の空論となさん。而かも開戰以來、我が軍

の武勇なる行動が世界の注目を惹き、武士道の事亦漸く其言議に上るを見てすら、世人は日本民族の榮譽として喜ぶにあらずや。又米國が平和會議の議を提出するや、萬邦は響の如く之に應じて、世界は何物か其間より生じ来るべきを期待するにあらずや。一武士道の名譽此の如く、一平和會議の力此の如しとすれば、戰勝光榮の國民が世界列國に先じて人道の理想を發揮し、實行し、眞正征服の實を示し、汝等の理想此にありと呼ばんに、その力豈一分世界を動かす事なくして已まんや。又况や、千年以來東洋の文物を吸収し消化し、又大に西洋の文明に依りて、茲に世界の新文明に一大原動力たり得べき國民が、積慶重暉の皇徳を奉戴して東西の中心にその徳を貯へ、その力を發揮し來らんには、何物の暴が能く之に敵し得んや。此の如くにして戰勝の光榮は始めて世界を光被し、征服の根本は此によりて立つべし。

世人は皆終局の目的を云々するにあらずや。終局とは即ち根本的の謂にして、戰勝征服の目的は、一國建國の理想、能く世界文明の原動力と

して世界の人心を我が國に歸向せしむるに外ならざるを思へ。僅に大砲の捕獲、軍艦の轟沈のみを以て戦争の目的となすが如きは、自ら卑うし自ら賤むの徒のみ。

戦勝の終りを完うし、建國の意義を實ならしめんが爲めに、日本國民は大に覺醒せざるべからず。覺醒なき光榮、武力のみの勝利は却て國運を阻害するに終らんのみ。

(廿八年三月)

氣宇を潤達にせよ

今の時は十年前戦役の時と異なり。彼の時往々にして愛國の名の下に排外思想を鼓舞したる者、戦役終局の結果に悲歌慷慨したる者已に見るべからず。然れども戦勝光榮の今日我が武茲に揚れるに乗じて膨脹の欲を増長し、只管有形國土の占領、實質利益の獲取を以て戦勝の光榮を全うせんとする者あるに至りては一なり。膨脹といひ實

利といふ、一見すれば進取活動の氣象に似たるも、他の一方よりも見れば、又排外小膽の之に伴ふ者なきにあらず。我國は弘大の領地を大陸に獲取するにあらざれば、將來の國運を維持し難く、隣國に占領的に利益壟斷を早くせざれば他國の乗ずる所とならん。此の如き門戸封鎖、清韓に對して門戸開放を絶叫したる日本國民が、開戦一年の後に却て門戸封鎖論に傾かんとするは何の兆ぞや。

劍に依りて得たる者は劍に依りて奪はるべし。我等は戦勝の美果を外に收めん爲に施設を施すべきは云ふを要せざるも、その施設が此の如き排斥的實利的思想に出づるに至りては國家前途の爲め大に憂へざるべからず。この際我等が要する所は、外に向ての施設と同時に、それよりも一層切實に内にありて、その文明の理想、建國の精神に對して大に自覺を發揮し、大に氣宇を潤大にして、眞に開國進取の國是を遂行せざるべからず。蓋し一個人にありてもその一大奮起、一大自覺は

平生平和の生活に現はれ来るよりは、何か一の危機奮激によりて發揮せらるゝ者多きに居る。個人平素の修養が危機に際してその力を發露し、その自覺決心に現はれ来るが如く、多年幾世紀の間養ひ來りし國民の特性と理想とは革命戦争の如き大動搖に際して始めてその自覺の中に實効を呈し、この自覺によりて國運の將來を指導し決定す。その基く所は國性と修養とにあるも、その發揚し趣向する所は、一に危機に際して國民が自覺的に自ら處する態度と覺悟とによりて決せらる。米國獨立戦争の始めに當りて誰れかその母國の王家と離れ獨立に無君主の政體を創始せん事を期せしや。新英國の市民はその自由と權利との爲めに故國の議會に於ける議政權を要求して、故國の同胞と戦ひ始めたるも、その自由が終に自治獨立にあらずんば得られざるを悟るに及びて、彼等の自由なる精神、自主の理想は母國と離るゝの已むを得ざるに至り、彼等は理想の爲に七年の苦戦を續けてその光榮ある獨立を得たり。恰もルーテルが始めて懺悔滅罪の事に反對するに當り

ては、敢て法王の聖權に容喙するを期せざりしも、元來の信仰精神と事の成行きとによりてその滅罪反對は根本的に法王の神權を否定する主義なるを悟るに及びては終に意を決して斷然反抗分離の態度を取り、新教の大精神を發揮したるは此に同じ。平素の主義理想が危機厄運によりてその自覺の大本原動力を發揚し、此に依りて將來の運命を定むる事此の如き者あり。個人にとりても一國としても變革動搖の危機に際する覺悟の重大なる結果を生ずる事實に此の如し。千古の國運を負擔し將來の進運に對して深大の責任を負て今やこの大戦を經營しつゝある我等が此の際に於ける覺醒と反省と奮發と勇猛との特に重んずべく又謹むべきは、明かならずや。

古より東西の國民にしてその國運を賭したる戦争の結果、儼然としてその文運を勃興したる者、その例甚だ多く、又その戦争が國民の自覺に力を與へてその興隆の大轉機を促せし事、恰も我が邦の現時に等しき者、その數二三にして止らず。希臘人の波斯戦争に於ける、羅馬人の

ブニコ戦争に於ける、又は英國の斯巴ニアに對する大勝、ドイツの佛國と戰ての後の統一、近くは米國の斯巴ニアを敗りて後の大勢の如き、皆我等に戰勝國民として好模範を與ふる者なり。彼等の中には戰勝後只管その國勢を外に延ばさんと勉め、或は外征に或は侵略に手を延ばせし者なきにあらざりき。されど彼等の隆運は多くは戰勝によりて國民の自覺を固め、内にありては信仰文運の大本を養ひ氣宇を濶大にして内外の文明を吸収し、國民に自由の活動を與へ、この基礎によりて中外に活動せしに因る。希臘のペリクレースは其自由の民を導きて、個人としての技能を發揚せしめんが爲めに特に神聖演劇を獎勵して、古宗教と新文運とを結合し、此を以て人心の歸向を指導したり。英國の戰勝後所謂るエリサベス朝の文明が特に宗教と文學を内部活動の根據として、此に依つて世界的活動の端緒を開きしは人の能く知る所なり。ドイツの統一が如何に其文學の興隆、言語の統一と之に加ふるにドイツ精神の鼓吹に負ふ所あるは、今更言ふ迄もなし。而して我が

東隣の米國はその國民的統一の運に向ひつゝ、外に向て活潑の運動を試ると共に、中には學術文運の振興に全力を注ぎ、歐洲の美術學術を回顧し吸入すると共に、亞細亞の宗教に對しても心胸を開いてその滋養を吸収せんとせり。その意氣の旺盛なるは獨り外交や工業の端に現はるゝのみに非ずして、實に其精神的、文化の大規模なるに見るべし。戦争は一國の大事なり、勝利は戦争の目的なる事云ふ迄もなし。然れども戦争の爲に戦争を好むは蠻人の事なり、勝利によりてその國民的團結と覺醒とに進むる事を勉めず、只管に戦場の勝利のみを以て國民の光榮となす者あらば、是れその國を侵略の外能事なき匈奴に近からしむる者なり。戦勝の民たる我等は今この大轉機に乗じて進んで大に取ると共にこの危機に際して深く内に警めざるべからず。今や國民は自らその力を悟り始めて二千年の古國、その命維れ新なるを信じ、その一部には國民の精神を武士道に求むる者あり、或は舉國一致の根底を無比の國體に求むるものあり、十年前の戦役に比して覺醒の速に

して大なる事、殆ど同日の談にあらず。されど武士道の唱道は過去の精神を道破する者としては一分の真理あり、又た現在戦争の活動に對しては好箇の適劑なりと雖も、世の所謂武士道は、今後文明の開展に對して如何に應用せらるべきか。この一事あらゆる文明の源泉として果して滾々不盡の妙用を呈すべきか。此くの如き問題は未だ十分に解決せられたりといふべからず。况や又た武士道が戦時に際して特に國民并に世界の注目を惹きつゝあるも、その他方には新時代文明の餘弊として、物質的欲求、私利的動機が陰に陽にその勢を逞しうして、商業の社會のみならず、官吏、軍人、學者すら、その潮流に押されつゝあるに於てをや。一方には嚴格なる武士道を以てあらゆる文明を律せんとし、その極或は往々にして形式の末にも走らんとし、他方には物質的勢力は廉耻をも正義をも滅没蹂躪せんとして、二者互ひに兩極に走らんとす。戦勝國民の武士道はその外敵を破り得たるが如く、その内にある物質主義の敵を破るを得べきか。將た又物質的欲求は欲求その

物の排斥すべきにあらずして、その欲求を支配する根本精神に左右せられて、結果に美醜天壤の差を來す者にはあらざるか。我れ等が將來の文明は潤達なる基本に立ちて、この物質的勢力をも包容し之れを支配し利導する力を有すべきにあらざるか。戦争は大事なり、されど一時の事なり、要は戦争の危機に乗じて、如何に又た如何の方向に國民の自覺を導くべきかにあり。此れが爲めには武士道の精神をも繼承し發達せしめざるべからざると共に、又新時代の新要求をも攝容し、支配し得る大本を探らざるべからず。

戦勝と共に來るべき必至の運命は、我が國運と文明との從來に比して、一層世界的たるべきにあり。開國進取の宏謀の益す潤達自在なるべきにあり。東洋の東端に位して東亞幾千年の文明の唯一繼承者たる我等は、今やこの戦争を大轉機として、世界的活動の中に闖入せざるべからず。その活動は今日世界の氣勢に乗ずるのみならず、又實に將來世界の文明に對して、一大寄與をなさざるべからず。

東隣の強國は今や一方海軍の擴張をなすと共に他方世界平和の路に對して大に盡す所あらんとし、その民は將來世界文明の擔任者たる自覺を發揮して東西の文明にその精神的要素を吸収し發揚せんとす。日本人たる者一時の利害に彷徨する事なく、一時の光榮に眩惑せらるゝ事なく、大に建國の大精神と將來の大目的とに基き、氣宇を濶大にして、内に文明の精神的基礎を養ひ、外に向ては徒に膨脹の空夢に魔せらるゝ事を已め、世界と共に相協同し、相刺激して將來の文明に活動せざるべからず。

一二與國の向背に驚き、二三領地の獲否に痛心し、終に自利排外の迷想到に驅らるゝが如きは新進進取の國民のなすべき所にあらず。

戰勝の國民は氣宇を濶大にせざるべからず、自らの信仰と理想と、力量とを顧みて、利害の外に超越して適往勇進するの覺悟なかるべからず。

(卅八年四月)

現在「は常に矢の如く過ぎ行きて、歳は去り歳は來る。吾等今方に舊歳を送り新歳を迎へて靜に往を懷ひ來を想へば感慨更に深し。况や又祖國未曾有の大事に遭遇し幾多の光榮と又幾何の恨事とを經驗したる一年を過ごして、茲に恐らくはこの大事の最後の解決をなすべきこの年を迎へし吾等にとりては、永劫なる時の一廻轉も亦是れ至深の沈思と至大の覺悟を要すべき時なるに於てをや。

顧れば、人類歴史ありてより已に幾千年、その間幾多の國民は榮えては又衰へ行きぬ。而かも一榮一枯決して偶然に又無意義の變遷にあらずして、彼等は興るべきの力ありて興り、亡ぶべきの業因によりて衰亡の果を招きしのみ。且つや一旦の興亡存敗は車の轍の如く、彼の國民、此の民族の運命の上に展轉して、亡びし者は煙の如く、去る者は水の如かりしも、而かもその何れの國民民族か眞に無意義の生存をなせし

回顧と前進

(卅八年の年頭に際して)

者あるべき。時なる永遠の裁判官は彼等が皆何物かを人類の運命なり理想なりに寄與して、各その天職を成し遂げ、或は何かの教訓を與へて來りては往きしを宣告せり。希臘の小國が何物をも具象的に、形象の中に調和を發揮して、人類の精神が如何にその小宇宙によりて大宇宙を調整案排し得るかを示せし、或は又印度幾千年の史蹟が、人間智慧の要求が如何に尊嚴にしてあらゆる社會、道德の有形的生命を支配する力を有するかの一例を吾等に示せし如き著大の事實はいふまでもなし。之を小にして匈奴等の運命は武力のみの一時の強盛が自ら亡ぼすの外何等の力をなさざるを教へ、西班牙帝國の瓦解は理想なき膨脹の如何に無意義なるかを示さずや。又之を近くしては近代ドイツ帝國の統一勃興が、その統御者たる明君賢相の力多きと共に、その國民が自ら信じ自ら盡したる結果なる事。戰敗後の佛國が能くその國力を發展し、統一を維持し得しは、一にその人民各自の獨立心と祖國過去の光榮に基く團結力とに出てし事。此等ば皆世界の歴史、人類の運命

の大なる光明にして、又現に一國の大事に空前の大業を成しつゝある吾等に對する好鑑にあらずや。

否々、遠く外國他民族の歴史に鑑る迄もなし。之を邇きに求めよ、吾等が祖國の過去は吾等に幾多の教訓を與へ、吾等が祖先の努力は今も尙之を追懐し之を體得する者にとりての大なる力に非ずや。往古邈たりと雖も、而も國常立の靈は儼然として、吾等國民の信仰の根底に存し、普天遍照の理想は赫として、今尙吾等の生命に力を與へずや。之を以て一片の神話となす者は未だ此靈と理想との力を味はざる者のみ。神話にしても、空想にしても、その永遠の意義を發揮し、その遠大必然の力を己れに體得する者にとりては、それは眼前の力なり、事證の光なり。太祖神武の聖詔に「正を養ひ暉を重ねて多く年所を歴たり」と宣し、維新の御誓文に「天地の公道に基き」と勅し、賜ひしも、その永遠の力が時に觸れ機に應じて、吾等が精神の中に發表喚起せられし者にあらずや。然れどもこの永遠太古の理想靈光は決して空に架して存する者にあら

ず、開國の太詔、維新の綸言も單に過去の聖勅として見るべきにあらず。之を現實にし、大は國民の歴史にその理想を實現して萬邦の主宰指導となし、小は個人心靈の中にこの信仰を體現し來つて、世界人類の光明となすは、一に吾等が各その覺悟と自信と勇猛とを發揚すると否とに存す。歴史はそれのみにては何等の光明をも與へず、回顧は回顧のみにて力とはならず。過去の歴史を今の生命に現はし、回顧の中に前進の力を得る人民にとりて始めて光りなり、力なり。

見よ、六千年の歴史を有し、三王五帝の古を語り、孔孟の仁政に則るべき支那帝國の現状如何。彼等は尙他國を見るに夷狄を以てし、自ら居るに中華を以てするも、その歴史は巖石の如く固き過去のみ。その回顧は古を想ふの回顧のみにして、民に信なく、國に力なし。又見よ、吾等の敵國たるロシアの現状如何を。彼の農民はツァールを尊びて神の使徒となすを知る。彼の有司はロシア帝國の天職は、政治と信仰とに依りて世界を統一するにありと揚言せり。而も、彼等の理想は武力侵略

の外に達するの略なく、彼等の思想信仰も努力精勵も皆な一に少數貴族の我意に支配せられ、有司專横によりて僅に外形の統御を全うす。此の如き國民の運命はその内に潜める民族の大精神が自由に發露するの路を得ざる限りは、到底その揚言せる理想に副ふべくもあらず。理想は言説の上に事實とならず、回顧は眞摯の信仰努力によりて始めて力となり得べし。

尙又之を他國の事例に見んか。世界の歴史に世界統一の理想を發したる國民三あり。一は印度の轉輪聖王、二は猶太のメシアス、三は羅馬のカエサル是れなり。彼等は各その特質と境遇とに應じて世界統一の希望を發表し、又幾分かは之を事實にせんと努めたり。而かもその結果と彼等の現状とに稽へ見よ、彼等の理想は寧ろ彼等の豫期せざりし天來の光明靈力によりて實現せられんとせり。而かもこの光明を認むる能はざりし彼等は、却てこの實現せられたる理想を咒咀し、而して今はその過去の空望骸骨を擁して、殆ど滅亡の域に沈淪せるに

あらずや。印度に於ける轉輪聖王の理想はその根底洵に深大なる者なりき。太古の印度人はこの世界が總て義によりて支配せらるゝを信じたり。世界に不義の沿る時即ち聖人立法者の出現あるを信じたり。此に於て此の如き聖王がその十善の徳を備へて世に出現する時には聖王の七寶之に伴ひ、中にも神輪常に聖王の處在に現はれ、この輪東に轉ぜば東夷服し、西に到れば西國その徳化に服し、此の如くにして世界は同一善法、同一聖王の統治に歸すべしとは彼等の豫言的希望にして又國民的理想なりき。されどこの理想を理想としたる民は之が實現に努めざりき。努めざりしのみならず、寧ろ之に反對の方向を執りて、その社會を少數者の專制に委し、四隣外邦は愚か、同胞をすら精神的に團結し救済するの路を絶たんとしたり。聖王徳化の大本たるべき教法は形式となり、思想信仰は束縛せられ、社會は利害感情を異にして一點同情なき階級に分たれ、聖王の神輪は固定して動かさざりぬ。その間一度

は佛陀が出現して普遍の救済を傳へ、その福音天下に布きしも、外邦の民却てその徳化に浴し、本土の民は漸くその教の己れに利あらざるを知りて之を排斥するに至れり。佛陀に次ぎて阿育王は殆ど轉輪聖王の實を全うし、法教の勝利を以て衷心の歡喜となし、その感化歐洲に及びしも、國內は却て王の徳教に反して、王侯相闘ぎ、私利我欲の中にその徳教の光を味まじ了れり。此に於て彼等の後昆は侵略の王者に壓服せられ、外邦の君國土の蠶食者に却て轉輪聖王の稱號を奉るの已むなきに至り、茫乎として聖人の出現を空に望み、徒に國民の現狀に憤るのみ。國民の祖先が感得したる大理想は彼等にとりて何等の力ともなり得ず。一度はその同胞の中に現はれし形而上の聖王も、終に彼等の認むる所とならざりし結果、彼等は理想あるも力なく、その理想の形骸のみを止め、回願は茫として何等の光明をも與へざるなり。猶太のメシアスは印度の轉輪王に比して劣るなき強大の靈火なりき。マビデの裔なる聖王彼等に君臨して、その國は萬邦を支配し、民族

の神ヤフズは萬世を光被せんとは彼等の希望又理想なりき。この光によりて彼等は紅海を渡りたり。この希望を抱きしが故に、彼等は全族幽囚の辛苦をも甘受したり。この力によりて艱難も彼等には喜びと爲り、失望も忍耐を生み、彼等の心常に神と共にありて彼等をして堅く自己の運命と天職とを信じて動かざらしめたり。バビロンの俘囚たりし彼等、エルサレム再興當時の彼等は實にこの理想に忠實に、希求に向て精進猛進するの民なりき。然れども彼等の奉じたる神命は印度に於けると同じく形式化し始めたり。彼等は自己精神の力によりてその理想を實現せんとは勉めず、過去の形式を固守して終に自らメシアスと信じ、その使命を果さんとしたるキリストを刑に處するに至れり。その經歷の如何に印度人の佛陀に對し、又阿育の徳化を顛覆したるに同じきや。此に於て彼等は單に回顧の民となりたり。理想を抱きながらも、之に忠實なる能はずして、黄金の神を拜して海外離散の中にも尙高利貸を業としてその日／＼の榮華快樂を追ふの民となれり。

り。而してメシアスの理想は却て彼等が迫害したるキリストの徒によりて幾分か實現せられ、無形なる神の御國はキリストの福音によりて世界を光被しつゝあるも、彼等は與り知らざるなり。

羅馬は一度は地中海を池としたる世界的統一を實行して諸民族を糾合したり。此に於て彼等がバラテネ丘上の小部落より起りて四隣を風靡したる旺盛の意氣は、一層統一的集中的なる帝國主義、即ちカエザルを中心としたる世界統一の理想となりて發表したり。然れども彼等がこの理想の意識を明白にしたる時、彼等がその過去の光榮を一層發揚して當にその理想の十全なる實現に努力すべかりし時、彼等は已に私慾の民となりき。帝國の園池なる地中海の沿岸より輸せられたるあらゆる財寶は、只管帝都の裝飾、傲奢の具に供せられ、弘大なる帝國の中央權は門閥私闘の争點となりて、其門閥の威權も亦漸次軍隊に移り行きて、國は國民の爲に立たず、政は私門の利害によりて行はるに至れり。彼等には過去の光榮を回顧するの情ありき、又その光榮の

續きとして帝國統一の理想を有せざりしにあらず。されどその回顧は惰眠の中に反復せらるゝのみにて何等の力とならずその理想は已に精神の根底を離れてその形骸を古帝都の榮華に止むるに過ぎざりき。後世羅馬は法制と文字と教會によりて世界を統一せりと稱せらる。而かも此は恰もキリスト教の世界席捲が猶太人の事業にあらずりし如く帝政後期の羅馬人は到底彼等が祖先の光榮を回復しその理想を實にするの力なき人民なりき。

理想なき民はその形而下の繁榮隆盛如何に關せず滅亡の民なり旨目なる運命の餌食として人類の歴史に消極的教訓を残すのみに終るべし。然り國民の運命はその理想によりて存在の意義を決せらるべし。而かも理想のみありて自覺なく努力なき民は是れ亦永遠なる時の判庭には消滅の宣告を受けんのみ。印度猶太羅馬三國民の運命はこの事實を證して餘りあり。而して他方彼等の理想が如何に彼等努力なき人民の豫期せざりし方面に於て或は宗教の上より世界の人心

を支配し或は法制の力にて萬邦の社會生活に實力となりしかを見來れば吾等は運命と理想との關係の紛糾して端倪すべからず而かも自信と前進とある處には理想の事證を現じ得べきを信ぜずんばあらず。思ふに我が國の建國その基本洵に幽遠にして宏大なり。その國體國性の由て立つ所以の根底は決して偶然の結果にあらず。所謂る天壤と共に無窮なるの宏圖天地の公道に基き之を古今に通じて謬らず之を中外に施して悖らざるの徳教は實に我が國民が茲に東西の文明を融合し世界に永遠の平和精神的歸趣の統合を現はすべき大理想の宣告にあらずして何ぞや。政に於ては君臣一體歴史に於ては萬世一貫位置に於ては東西兩洋の中位而して維新以來吾等が頭上に懸かり來れる天職は皆吾等が偶然に一國を形成せるに非ず徒爾にして外邦の文明を輸入せるに非ざるを示せり。現下吾等が至力を傾けて從事せる戦争の如きもその破裂の表面的近因は利害の衝突に起れる者の如くなるもその深旨を考へ來れば此の如き一時的の運命に支配せら

れし瀆武の擧にあらず。吾等の國家が茲に東洋に國して、東西文明の接觸點、融合地となるべく、而して一方にては世界は白人の世界なりとして、經濟及武力の侵略を是れ事としたる歐洲十九世紀の偽文明に對して一大警醒を與ふべき必然の使命が、吾等の上に降りし結果に外ならず。吾等はこの天職とこの理想の爲めには、和戰の兩面に必死の戮力を盡し、物質精神の兩界に宏遠の覺悟を定めざるべからず。又この目的の爲めに、吾等は頭燃の急なる今の戰爭に關しても、一時の利害得失に迷はず、徐に又深くこの一大事をして、始めも完きが如く終りも完からしめざるべからず。而して之を完からしむるは一に建國の理想に忠實に、國民の天職の爲めに死力を出だすの一事あるのみ。

されど吾等は茲に反復して斷言し、又同胞に警告す。理想は空に架して現はれ來らず、國民の光榮は回顧の中に得來る前進の努力によりて始めて實にし得べし。國常立、天御中主、その名已に炳乎として、民族の本源を明かにし、正義重暉の聖勅は明かに國民の覺悟を命じ賜へり。

されどこの本源、久遠の理想を實にし、建國本來の徳性を、現在并に將來に證明し、體現するは誰の力に依るべきや。

往を願れば、國祖は永遠の理想を發揮し、賜へり、吾等の祖先は光榮の歴史を遺したり。されど世に汚隆あり、時には榮枯なきにあらず。内に北狄西戎を征し、外は三韓を服したる祖先は、只武威兵戈の成功に満足せずして、直に外邦の文物にして取るべき者は之を取り、以て四海萬民の幸福を増進し、人心の靈光を發揮するに怠らざりき。此に於て、養正重暉の素質は發して、聖徳の治となり、奈良朝の文化を煥發したり。然れども内已に滿ち、世漸く榮えたる平安の朝以後、人心は果して惰勞を呈せざりしか。門閥の榮華に國民の大本は犠牲に供せられざりしか。降つて世は源平の代となり、閥族と閥族と相闘ぎ、私黨家門の利害の爲めに皇室の尊嚴はその光りを晦まし、國民の理想はその力を失ひぬ。而かも天佑は未だこの國を去らざりき。藤氏の衰運、武門の興敗が深く人心に沈痛の感動を與へしとき、民族の徳本、人心の靈光はその

裏面に發揚し來れり。一方に三世の一大事を無量光の佛徳に托して、人性本來の力を發揮せんとする聖者あれば、他方にはこの國が妙法發展の中心たるべきを信じて、生死を賭して自ら日本國の柱たるを期せし勝者あり。國と人と相待て日本國が世界の歴史に存在するの大意は重ねて發揮せられぬ。世は再び降りて武門の舞臺となり、國民の統一すら甚だしく毀害せられし世にも、建國の中心と信仰の靈光とはその命脈を維持したり。文祿の遠征の如き、一時支離滅裂の國運に統一の呼吸を與へ國民自覺の上に一天啓を現はせしも、その裏にありて之が永遠の意義を發揮すべき精神的後援を缺き、一時の盛世は桃山の榮華醜酬の春の花と共に過ぎ逝きぬ。

位置の不利と幕府の自衛退守とは相合して、一時國民の抱負を蟄伏せしむるの外觀を呈したるも、久遠の力は内にその精華を發して一方にては武士道の大成、任俠風の發達を現はし、他方にては古學の復興に依りて建國の理想も漸く國民自覺の力となるに至れり。維新以來不

利の地は一轉して東西兩洋の中心となり、國は天地無窮の宏基に定められし統一を得、熾に内外の活動を始め、萬機公道に決するの實を擧ぐる運に向ひしも、考へ來れば皆是れ。皇祖、皇宗、并に吾等の祖先が養正重暉の徳、茲に開發せし者のみ。

此の如きの追懷は實に吾等の力なり、信念なり。而かも吾等は重ねて云はん、この宏圖この徳性を體現するは、回顧のみの能くする所にあらずして、回顧の中に前進の勇猛を發揚するに非ずんば、祖先の理想は終に子孫の生命となる能はず。内にありては文明危機外に對して戰爭の大事に際して吾等が行動努力の始終をして、建國以來の光榮と理想とに隨順せしむるは、一に吾等が現在と將來とに於ける覺悟如何によりて決せらる。若し夫れこの國運の大危機に際し、一時の幸運に目眩して養正重暉の徳本を忘れ、一念我欲に支配せられ正義の師を轉じて侵略の兵となすが如き事あらんか、是れ吾等が根本の滅亡なり。若し又徒に過去の光榮を追懷するのみにして、その精神その理想の大本

を忽諸に附し、形式外面の保守に傾かば、近くは開國進取の勇氣を沮喪し、遠くは普照光明の自在を失墜するの始めにして、國家の運命に關する大事此に過ぎたるはなし。

我が國が東西の中央に位するは天與の好位置、この國に據りこの民を率ひて、天御中主の實を擧げ、此に依りて世界の文明を統一し、世界の永遠の平和に犯すべからざる保障を作るは吾等國民が天より命ぜられたる使命にあらずや。吾等は建國の理想の追憶によりて、この天職に向て進むべき信念と力とを發揮せざるべからず。

天地を貫き人心の奥に徹して、滌はざる信と力とに依りて、遠くは聖徳の三教一貫の徳本を體し、近くは士道信義の美風を發揮し、而かも名に拘はらず形に泥まらずして、濶達自在、應容不迫、古今東西を貫徹すべき國風を増進し、發揚するは、吾等が今後の大覺悟ならざるべからず。而して、此の如き大覺悟は、又それに應ずる寛容の態度と、遠大の努力とによりて、始めて、現前の事證となり得べし。

歳は去り、歳は來る。沈思冥想し來れば、古今時に隆替の運命あり、現時亦必しも恨事なきにあらず。而かも隆替の展轉は吾等をして益々、天命、徳本の徒爾ならず、又ならしむべからざるを教へ、現在の恨事は却て吾等をして理想に向て猛進するの精進力を増進發揮せしむ。吾等の回顧は直進前往の光を與へ、吾等の艱難は總て是れ煉達戮力の力なり。國民の大本の理想と過去の光榮とは、今や吾等の生命たらざるべからず、將來の光明たらざるべからず。

文明の過渡、戦争の大事、人心の煩悶、經濟の難關、何物も、この理想の光明に照らし、この勇猛の熱火に鎔鑄し來れば、總て是れ圓融久遠の靈光に融け去らんのみ。

(廿七年十二月)

開國進取と精神的文明

開國進取は維新の國是にして、東亞の平和の爲に一度は清國と戦ひ

今や歐亞に跨れる大國と戦ふも一にこの國是理想を遂行せんが爲なる事は、朝野の共に認めて努力する所なり。然れども開國進取の理想も、その見方によりては、或は偏に兵を張り國土を擴大にするの慾望となるべく、或は又偏に歐米の文明を摸倣して外國の歡心を買ふの政策ともなるべし。今やロシアを敗りて愈東洋に於ける先進國たる實を擧ぐるに及びては、我國の世界に於ける位置が眞に世界的となるは火を看るよりも明かなり。然らば我が國民が今後如何に開國進取の意義を解釋し又之を實行するかは、内自國の運命に關する大問題なるのみならず、又實に世界の形勢に痛切の關係を有する大疑問たり。英米二國の民は維新以來最も親切に日本の文明を誘導したるの民にして、民情の交通最も密接なれば、此際我が國に對して猜疑或は忌嫌の情を抱く事あらざるも、歐大陸諸國特に獨佛二國が今後日本の活動と進運とに對して何となしに疑心を抱懐せるは、蓋し自然の勢なり。先に吾等が戦争及外交に伴ふ人種及宗教問題として、我國民が此等列國に對

しては敵國ロシアよりも不利益の位置にあるを論じたるも、此にありき。時には黃禍を唱へ、或は又異教國に對する基督教國の十字軍的連合を夢想する者ある歐洲諸國に對して、此等の邪推を排して、我が國が眞に平和の爲めに戦へる者なるを知らしめ、又内にありては眞に文明平和の國是を進めん爲めに吾等は如何なる覺悟を以てこの開國進取を遂行すべきか。是れ今の問題にして、又將來の問題たり。開國進取とは國を世界的國家とするにあり。國土は東亞の海上に僻在すとも、既に世界交通の大道に立ちてその一方の平和の爲には戦ひをも辭せざる吾等は、又眞に東西文明の潮流を此處に合一して一轉進の機に遭遇せる世界の文明に有力なる活動を呈してこそ、我が國は眞に世界的國民となりしにあらずや。國力の充實も、軍備の擴張もこの理想この天職の爲の努力にあらざれば、終に敵國ロシアの如く侵略蠶食の外能事なき國たるに終らんのみ。

已に國家を世界的にし此の國土此の民衆の文明に東西の潮勢を合

一せんとするには、吾等は云ふまでもなく、一方に於ては國民生活の基
本たる經濟物質の富を増進する爲にあらゆる努力をなすべきと共に、
又その根底に於ては常に自家の國民精神の統一鞏固を期するのみな
らず、能く西洋の精神的文明の粹を咀嚼し消化して之を吸収するの力
を發揮せざる可らず。明治開國後西洋の文物に接し、その華麗に目眩
したる國民は一時に物質主義に傾き歐化の皮相に流れんとしたり。此
に於てか國粹保存の保守的反應起り、神佛復興の呼號となり、又は日本
主義の自覺を喚起したり。我が國民文學の聲も、東洋的美術、日本音樂
の推獎も此と共に起りぬ。此に於て國民は不十分ながら自家精神的
文明の貴重なるを知るに及べり、然れども一利一弊、この自覺は往々に
して外國文明の排斥或は冷笑となり、西洋の文明を容れんとしなから、
その精神に入らず、歐洲文學を好まんとはしながら、その基本たるキリ
スト教をすら顧みざるの奇觀を呈して今日に至れり。或は恐る、日露
戦争の結果、終に物質的には西洋の文物を利用すべきも、精神にありて

は飽くまで日本魂を固守せざるべからずといふが如き思潮世に力を
得、物質的の開國進取と精神的鎖國と相併ぶが如き不幸に至らんこと
を。

吾等固より日本魂の精髓が、この國民の精神を統一するを熟知し、そ
の重寶の決して培養を怠るべからざるを見る。然れども我等の日本
魂は飽くまで進取的に包容的ならざるべからず、我等の武士精神は十
分に濶達に發展せざるべからず。自家の重寶を重ずるを知りて徒に
之を固守し、外邦の美なる又大なる精神と相容るべき者をも排斥せん
とするが如きは、守錢奴が徒に紙幣を庫中に貯藏して腐敗せしむるに同
じ。精神的文明は日に新に日々に成長し發展するを要す。新民は明
徳の方にして、明德は決して鎖國的保守によりて開發し得べき者にあら
ず。吾等の日本魂が化石し、腐敗せざらん爲に、吾等は精神的開國を實
行し、濶達の氣象を以て、文學、美術、哲學、宗教等の源泉より西洋の精神を
吸取し包容するを要す。此の如くにして開國進取は物質有形のみな

らず精神生活の上にも實行せらるべし。

思ふに歐洲人等が黃禍論を唱へ、日本人を文明の猿猴と罵り去るが如きは、多くは爲にする所ある者、或は自家の虚榮心に出づる偏見等に出づべしとも雖も、抑亦日本人自ら此の如き譏を買ふ者あらざるか。語を換へて云へば、日本人は物質上西洋の文明を利用するを知る程に、その精神的文明の内容に接せんとせざるなり。歐洲に留學する者にても物質實用の學に従事する者其大數を占め、文學や宗教の事に従事する者は同胞よりも無用の長物、閑人の閑事業の如くに待遇せらるゝなり。外交官其他の日本人が歐洲人と交際しても、其の語る所文學美術に亘りて、交遊の間に彼我精神上の同情を生じ得る者、晨星も管ならざるなり。會々文學を語るも歐洲人が精神的滋養とする古典を味へる者なく、宗教を談ずればキリスト教の一節一片にも通ぜず、甚しきは歐洲人のキリスト教を指して迷信なりと公言する者すらあり。特に甚しきは日本人にして自國の文學宗教につきて彼の國の人に趣味を覺へしむる如

き會話をなし得ざる者すら少しとせず。勢ひ此の如きが故に中流以上苟も精神的文明に興味を有する者、即ち社會輿論の中堅をなせる者は、日本人に對して同情なり尊敬なりを發する能はず、終に日本人を目して猿真似の民、物質文明を利用するのみの民となし、その極嫌忌と畏怖を生じ、終に黃禍説の如き惡見に力を得せしむるに至る。その罪、必しも歐洲人の偏見のみに歸すべからざる者あらん。

吾等は吾等固有の精神的重寶を保守するのみならず、又大に之を發展し、此に依て世界的文明を作り出ださるべからず。即ち開國進取の大理想を遠大にし、濶達にし、此に依て國運轉進の大方針原動力となさるべからず。精神的開國の要は固有の國民的精神を發達し、その中に歐洲の精神的文明を鑄冶し、此に依りて歐洲の民と活潑なる精神的交通を開き、相互の同情尊敬によりて、平和人道の爲めに、盡し、且進ては歐洲人も夢想する能はざる包括的なる宏大なる世界的文明を作り出だすにあり。是れ眞の開國進取なり、永遠なる國運の隆盛、民族の

日米の同情と將來の世界的文明

「與國の同情」この一語はこの一年以來特に我等の懸念を要求し、我等の念頭を支配する警語となれり。戰局の進行と終局が我等海陸戰場と外交壇裡との手腕成功に係つて存する事は云ふまでもなければ、若し世界列國の同情が我等を去りたる日には、折角の戰功や外交も水泡に歸して、却て耻を萬國に曝らすに至るべきは、殆ど明白なり。我が同胞が一方には戰場の成敗に留意すると共に、與國の同情に對して大に懸念し、又すべきは當然の事なり。世に往々此の如く他國の同情に喜憂するが如きは自ら頼むの力少きに出て、他人の同情助力に依りて功を收めんとする依頼心に外ならずとして、與國の同情を冷笑し、攻撃する論者なきにあらず。我等も亦徒に他人の同情を求め、之を望みとし

理 想 と 信 仰

て、終には徒に他國の一顰一笑に喜憂し、歐米の人心に阿附追従してまでも、與國の同情を求むるの甚だ男らしからず、甚自信自立の力を缺ける者なる事を熟知す。此を以て、與國の同情を買はんが爲めに特に強辨附會、我が國の行動を辯護し、虚飾餽餌を以て我が國の仁義を發表せんとするが如き卑屈なる偽善に對しては、十分之に痛棒を食はしむべきを主張せんのみ。然れども、與國の同情なる一警語は決して此の如き偽善にあらず、又その要求は必ずしも自信を缺くの結果にもあらず。凡そ人自ら信ずる者は又人を信じ得べく、自ら頼む者にして始めて眞に心情の與より人を頼み得べし。若し我等にして眞に深く自ら信ずる所あり、自ら頼む所あり、而してこの信と頼みとによりて、東洋、延ては世界の平和の爲めに戰ふの意氣あらんには、この平和の天職に對して偏見を抱ける徒輩が、或は黃禍説或は異教徒なりとの感情に據りて我等に反對するも、恐るゝに足らず。同時に又我等の精神を理會し、我等の勇武に同情する者に對して大に感謝の意を表し、又益相互の間に深

厚の同情、理會を増進せんと勉むべきなり。

「與國の同情を要求し歡迎する事は、それ自らにては何等の意義をも有せず。要はその動機が自信に基きてその自信に同情する者を求むるや、若くは單に外面を粉飾して一時の助力と便利とを求むるや、の差異によりて、その當不當と價值の高下とを判斷すべきのみ。又與國の同情その者も我等に同情する他國民が果して能く我等の志氣と理想とを理會して内心我等に同情するや、若くは單に一時政略の便宜或は行かゝりの私情によりて、外面の同情を寄するやとによりて、その眞價値を定むべきなり。同情を喜ぶにも將た又た之れを排斥するにも、彼我相互の内心動機に入りて深くその眞正の意義と價值とを定むべし。他國が同情したりとて直に之を喜ぶも、恐なり、他國の同情を歡迎すとて直に之を排斥するも非なり。

我等はこの見地よりして、今現に我が國に同情を寄せつゝある米國國民の態度とその動機とにつきて趣味ある事實を發見せずんばあら

ず。米國人の我等に對する同情は過去にありて開導の教師としての同情なりき。今の同情はその開導に依りて國際の舞臺に現はれたる壯年の新日本が、北強の暴を挫き、平和と正義とを東亞の畔、太平洋の岸に確立せんとする勇と力とに對する同情なり。固より過去并に現在、米國の日本に對する同情が、或る程度までは自家の利便を打算し自家の利害を本位として、その利害を同じうする日本に對する同情なる事は明かなり。然かも米國と我が國とは單に利害によりて比、周し、相追従する者にあらず。又二者の同情は過去と現在とのみに限るべき者にあらず、必や將來に對する理想的關係の二者の間を結べるものありて、茲にその同情をして深く精神的に、又た永遠にすべき者あるべし。二者同情の内面永遠の關係を明かにし、將來我等が相結び相助けて世界文明の上に至大の活動をなすべきは我等の天職とする所ならざるべからず。一時便宜の同情或は同盟は一時の利害と共に消ゆべく精神内奥の同盟は必ずや精神的の根底と意義とを有せざるべからず。

此の如くにして精神的同盟の根底が、二者の間に意識せらるゝに及びては、その過去現在の関係も單に歴史的過去とならずしてその將來の運命に必然の關係を明かにし來らん。

日米二國が太平洋の兩岸に國し、東洋文明の東端と西洋文明の西端と相對せることは世界文明にとりて單に偶然の事として看過すべきか。米國々民の中堅たるアングロサクソン民族は世にも知られたる包容の量大なる人民なり。彼れはロマの文明を容れ、大陸の文學を攝し、而かも自ら守り自ら貫く所あり、而して坤輿の隅々に蔓延しても常に能く自ら守ると共に他を容れ來りしは殆んど他民族に見るべからざる特性なり。而してアングロサクソンの一大支派たる米國民は今や世界のあらゆる人民を自國に收容して之れを同化しつゝあると共に、又その文明、信仰、思想に於ても、元來の基督教を中心主義としつゝ、狭量に陥らず、偏僻に傾かず、能く印度并に一般東洋の思想、信仰をも探求し、收容せんとしつゝあり。彼等の或る者が米國人は舊世界の人民に

存せざる第六感覺を發達しつゝありといへるも必しも誇張の言にあらず。今までは歐洲大陸の中古以來の文明に接する事少なかりし彼等は、今や盛にイタリヤ美術を入れ、ドイツ哲學を味ひ、歐洲文明西流の先鋒たる氣尚を成熟せり。然り、歐洲即ち希臘、小亞細亞を源泉としたる西洋文明は、今や西に移り、移りて米國はその西流の先鋒となれり。而してこの人民は實に又勉めて好んで東洋の文明、信仰を同化し、攝容せんとしつゝあるなり。

他方日本國の過去と現在とを熟慮せよ。日本民族は蓋し亞細亞に於ける最も濶達なる人民にして、その文明は東洋のあらゆる種類の思想、信仰、文物、制度を消化、收容し、而して之を貫くにその特有の國性を以てして今日に及べり。美術に於ても、宗教に於ても、二千年一貫の歴史を有し、而してその中に亞細亞文明の粹を總合、包容したるは實に日本の文明なり。若し印度、波斯を源泉として東に向ひたる文明がその途上に遭遇したる他邦の文物を收容し來て、今日尙生氣を有する者を求

めなば、支那非なり、暹羅當らず、只我が日本あるのみ。而して、亞細亞、文明、東漸の尖兵として、東太平洋を望て立てる日本は、今や盛に西洋の文物を輸入し、活用せんとして、その活動、その生氣大に、この英氣によりて勃興せり。固より日本が西洋文明を容れてより日尙ほ淺く、其文明の真相精神に至りては未だ十分に日本人の心界に洽からざるも、西洋有形の文物と共にその無形精神の文明が終に日本人の精神に理會せられ、味識せられ、同化せらるべきは必然の勢なり。若し日本人にしてその有形的開國に反して精神的鎖國を固守せんには、その一時の英氣は決して永續し得べからず。日本は、東洋文明の先鋒隊として、今や西洋文明と握手結婚を遂げんとし、つゝあり、又之を將來の目的とすべき位置にあるなり。

此く觀じ來れば、西洋文明の先鋒たる米國と東洋文明の尖兵たる日本とが、將來東西文明の融合渾化に對して、大なる天職を有し、共同の理想を抱持して立てるは、明白の事なり。昔は埃及と希臘と相對して地

中海の文明を造り出だしたるが如く、又前世紀には歐洲大陸諸國と英米のアングロサクソンと相共に大西洋を中心としたる文明を發達したるにも似て、而かも此等よりも非常の大規模と一層久遠の過去將來とを有して、茲に二十世紀以後に、東西兩洋幾千年の文明を融合し、太平洋を庭中の池となす、世界的新文明を形成すべき任は我等日本人と彼等米國人との共同の理想とならざるべからず。この理想の爲めには、皮膚の黄白、宗教の異同は問ふ所にあらず。あらざるのみならず、この異同差違あるによりて二者の融合は始めて能し得べきのみ。

此に於て日米の同情は實に將來の世界文明に對して偉大なる天職を有する精神的大同盟なり。我等二國の同盟は一時の政策、利害の比周にあらずして、世界の進運と人道の發揮の上に永遠の意義を有する眞の同情たらんとす。然らば則ち我等は茲に一大覺悟を定めて、大にこの精神的同盟の眞意義を發揮するに勉めざるべからず。

「我等は今後……日本が東西文明の融合に努力せる精神に十分の

同情を寄せしめざるべからず。……我等は浮誇に流れず、自負に陥らず、此等の同情をして真正兄弟の愛の同情、日本は人道の爲めに一大、貢献を爲しつゝありとの尊敬に至らしむべき重大の責務ある事を自覺すべきなり。

一年前に我等が一世に警告したるこの言は、今復之を反復して、茲に日米同情の理想に適用せざるべからず。

二十世紀、太平洋の文明は東西兩洋の先端たる日米二國の任務なり、又特權なり。二者の同情とは即ちこの任務特權の自覺に外ならざるなり。

(卅八年二月)

日本基督教の位置

日本基督教徒が年來辛慘の經營に成れる、慈善事業は一視同仁なる皇室の認むる所となれり。頑冥者流往々にして基督教を外教とし、そ

の信徒を國賊視する者は、我が皇室の公明なる博愛仁政に對して幾分か悔悟の情を萌せしやも知るべからず。然れども若し基督教徒にしてこの一事を以て日本基督教の成功として安んずる事あらんには、彼等にとりては敗滅の徵候のみ。

回顧するに、基督教が我が國に入り來りてより、その遭遇の變遷推移の跡甚だ平坦ならず。三百年來の偏見邪推の中に投じて幾多熱誠の信徒を得し始めより、一時歐化熱の流行に乗じて外形の盛大を得、その虚榮の後には保守思想の反抗に遭ひて忽ち自家立脚地の空虚を示したる時、終には世の科學熱と物質文明とに壓迫せられて不振萎靡の状にありし、昨今迄喜ぶべき事も笑ふべき事も將た又悲むべき事も少なからざりき。その波瀾の中にありても、基督教が或は教育に或は慈善事業に成し得たる功業成績必ずしも少なからざるも、而かも基督教の信仰その物が社會に感化を及ぼし、基督教的思想が日本の思想界を感化したるの跡に至りては、甚だ憐むに堪えたる者あり。孤兒院、免囚保

護の事業は固より基督教的信仰の熱誠に出でし結果なりとはいへ、その事業の成績を以て直に基督教信仰の勝利と稱すべからず。青年會の事業甚だ小なりとはなすべからざるも、團體その物に幾何の勢力ありとも見えず、基督教徒の教育事業多からざるにあらざるも、その教育に幾何か基督教の特色ありや。

基督教者中其勢力の不振、を辨解するの言を聞くに、往々日本の國情甚だ基督教に利あらず、舊宗教の惰力的勢力尙強きに過ぐるを擧ぐる者あり。基督教の批評家、反對者亦往々にしてこの事由を以て、日本と基督教との相容るべからざるを説く者あり。或は曰く、忠孝爲本の日本道徳は基督教の唯一神信仰と相容れず、或は曰く、日本の國體、日本教育の國家主義は、基督教の博愛主義と相衝突すと。その他、或は祖先崇拜或は武士道或は儒佛、此等の勢力を以て基督教の傳播を妨ぐる原因となす者、その教の内外に少なからず。我等は此等の言論批評を耳にする毎に、基督教自身の信仰の薄弱なると、及びその反對家の近眼淺見

なるに驚かずんばあらず。

百歩を譲りて假りに日本の國情が基督教の普及に不利なる者ありとせん、而かも他方現在の國情が又甚だその傳播に利する者あるの事實を如何にせんや。西洋の文學藝術の嗜好は淺きながら滔々として日本の精神界に瀰漫せんとするは確實なる事實なり。西洋の文藝必ずしも悉く基督教的にあらず、その哲學科學は時として反基督教的產物として日本に紹介せらるゝ者なきにあらず。然れども少くともその幾分が特に基督教的產物にして、その感化は即ち基督教の勢力を扶植する者なる事は、誰か之を否定し得んや。假令ケンピスの書が直接に讀まれざるも、ウヰヰスやテニソンの愛讀者一人にてもある處には即ち基督教的空氣の吹くを見、假令ヒットやリッピの作が日本の公衆に賞翫せられざるも、ラファエルが美しや園守や、システナ聖母像の模寫は今や陀摩家の佛畫よりも多く人に知られ、又た愛せらるゝなり。近くは日本の人をして始めて歐洲畫の力此の如き者あるかとの

威を抱かしめし者は、ルuterを題目とせしにあらずや。近年教育倫理の學都鄙の學徒に弄ばれ、第三第四流思想家の著作のみ多く讀まれて、原造的なる思想家は多く知れらざるも、而も中世紀の思想を代表せるダンテの名、近世の神祕家シリングの名だけにても畏敬の念を以て迎へらるゝ事、是れ基督教の種子を蒔くべき土壤の皆無ならざる徴候にあらずや。サントヤ、パウルゼンが獨逸思想家の代表なるが如く思はるゝの時は行く末長かるべき理なく、グリーンやマルテノの書が單に倫理の教科書視せられて已むべきは時勢の許さざる處なり。然らば日本の基督教徒が自ら口説を以つて争ひ、直接露骨にその宗義信條によりて人を改宗せしむるを要せざる分野にありて、基督教的思想風尚の種子は天上の鳥によりて四方に蒔かれつゝあるなり。

然るに日本の基督教徒はこの種子を培養する事をせず、之を荆棘に蔽はしめ人に踏まるゝに一任して顧みず。天國の種子が生長せざるは、日本の土壤の罪にあらずして、培養者たる傳道の人々の怠慢罪のみ。

今日傳道者信者の多數が此等の種子を培養し得ざるは、單に注意の足らざるが爲めのみにあらず、實に彼等自ら蒔く種子に對する趣味なきに因る。今日基督教傳道者の中はつぎて能くダンテの味を解し、ダンテの風趣に基きて、又その名によりて基督教を日本に扶植し得る人を求めよ。若くは又スエキンの美論と十五世紀のイタリア美術とを日本に紹介して、之によりて基督教美術の深遠なる趣味、不朽の生命を發揮するに足るの人を求めよ。我等の寡聞なる未だその一人にも接せざるなり。宗義の解釋はあり、されど活きたる信仰の活標本を示す人は多からず。信仰はあらん、されど思想と構想と藝術との活きたる人物、産物の力によりて間接に浸潤の感化を與ふる人はあらず。山上の訓誡は説教壇にて聞かを得るも、山上の訓誡、教祖の胸より流れ出でたる生命の泉に養はれたる花は、文壇にも講壇にも紹介せられず。此の如くにして西洋の文明趣味に對する國民の好尚、或ほ景慕は全無、宗教感化の用をなさず、哲學は學究先生の教科書に一任、文學は俗文

學の跋扈に壓せられ、藝術は輕薄なる新流行に洗はれて、西洋文明の華は終にその實を日本に結ぶ能はざらんとす。土壤と種子とありて、而して培養の任に當るべき基督教者は、少しも與からず。嘗に日本に於ける基督教の不幸のみならず、又實に西洋文明の薄命を嘆ぜしむるのみ。

西洋文明輸入の外、日本の國情が基督教に不利なる者ありと許して、我等の見る所正に此の如し。然れども翻て熟考すれば日本の國情は果して爾く基督教に不利なるか。基督教が日本にて遭遇すべき困難障害は果して古今の他の諸國にて遭遇したる者よりも大なるか。蓋し基督教が遭遇したる最初の又た最大の難關は、そのロマに於ける布教なりき。ロマには雄大なる帝王の專制政ありき。帝王の一命令は直に幾千の基督教信者を虐殺し得たりき。得たりしのみならず、ネロ以下幾多の帝王は反復又反復して異教徒虐殺を實行したり。然れども基督教徒は之に屈せず、屈せざるのみならず、一殉教者の血は又

幾百の新信徒を贏ち得たり。迫害、壓迫、虐殺は却て彼等の信仰を増進したり。日本の基督教は此の如きの迫害なきが故に却て振はずといふ者あれば、彼等果して辭すべきの言ありや。否、日本布教の困難を訴ふる基督教こそ眞に困難にも喜びをなし、困難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を増すべきにあらずや、而してその事なきは如何。或は云はん日本には政府の迫害なきも、教育の方面、社會の方面には尙ほ排基督教的勢力の盤まれるありと。然り是れ事實なり、而かもロマ當時の學術、社會兩面の反基督教的勢力に比し來れば、日本の社會的障害の如きは驚くにも足らず。當時ロマの學術教育は希臘以來の傳承とロマの法律思想と相合して、學智才能を頼むの風は嚴として基督教の「迷信」「凡見」を壓迫し、社會の制度、家族の確定は猶太人種の輕蔑憎疾と相合して、新宗教に對する不可抗的勢力と見えたり。日本教育界の學智は當時ロマの鍛練したる勢力に比すべくもあらず、家族郷黨の壓制將た彼れに比して、輕微淡泊なるに係らず、今の日本基督教徒がこの困

難を野蠻と以てその教勢の不振を辨解し、自ら安んじ自ら逸するは何の故を。基督教が新興微弱の勢力を以て當時の世界的大帝國の心臓に入り、帝王貴族の虐殺に屈せず、世の學智と戦ひ、社會の偏見を排し、制度、法律の根底を動かして、一世の信仰と道德とを自家理想の中に收め、了らし、その勇健偉大の成功を見來つて、日本の基督教徒たる者、何の顔色ありや。

且、佛敎が千餘年の根底を日本に有する事は、布教難の嘆聲を發する人々に對しては、一困難大障害たらんも、この困難は終に基督教の大利益なるを觀取せざるべからず。之をロマに比するに、ロマ宗教の信仰は、隨時轉換の福德祈願を主とする事は、日本の眞言に等しくして、それよりも幼稚に、英魂崇拜の行はれし事は、恰かも日本の神道に同じ。日本下層社會の宗教は、此等の點にて、ロマに似たる者あるも、その外に尚ほ佛敎の極めて敬虔なる信仰感化の存するありて、宗教眞信の經驗は日本人の已に多く親炙し渴仰する處なり。特に淨土門眞宗

の信仰の如きは宛然是れ佛敎中の基督教なり。他力救濟の信仰、願力の廻向と光明攝取の宗教は、基督教の方面より觀れば、その信仰の種子を下だすべき最好良田にして、佛敎は印度支那を経て日本に來り、茲に基督教と抱合すべき準備を整へたるの觀なくんばあらず。若し日本の基督教徒にして佛敎の存在を以て自家布教の障害と思惟する者あれば、それは自らをも他をも知るの明なきのみならず、又實に名と形とを異にしてその實質を同じうせる同信の同胞を一層自己に接近せしむるの熱誠なき者と云はざるべからず。佛敎特に淨土門には宗教的信仰の核實の貴重すべき者あるは、云ふを待たず、而かもその核實は幾多の弊害、惡習、偏見に蔽はれて、今や萎靡退縮の悲運に直轉下向しつゝあり。苟くも基督教徒にして自家信仰の確實熱烈なる者あり、而してこの信と誠とを以て今の佛敎に臨まんには、年來耕耘の良田が眞信の種子を繁茂せしむべく、幼稚なる迷信偏見のロマに入りし初期基督教の事業に比して難易殆んど比するにも足らざるなり。此の如き佛敎の存在

を以て自家不振の辨解に供する基督教徒は即ち自家信仰の未だ他を化するに足らざるのみならず、自ら立つの地にだも到達せざるを證する者なり。目を擧げて見よ、野は色づけり、收穫の期方に近づけり、而して收穫の勞を執る者、何處にかある。

一 祖先崇拜、英雄崇拜は往々にして基督教の敵の如く見做さるゝも、それは日本の保存的思想家が思惟する如く確乎不動の宗教にあらず。又一二外國觀察者の見るが如く血族家族の關係のみに成りて他の信仰崇拜を排斥する者にもあらず。物部氏の氏神は武徳の表象たる石劍に非ざりしか。源氏は血族上の關係を離れて一族をなし、而して武徳の神として八幡宮を崇拜したるに非ずや。上宮太子の崇拜は血肉の祖先としてにあらずしてその聖徳の渴仰、天滿宮は萬人が文徳を崇拜する發表なり。日本人は血肉の祖先を敬す、而かも此と同時に心靈の祖先、先徳を崇拜し、信仰するに吝ならず。國神、蕃神、國教、外教の差別の如きは千年の古より今日に至る迄、時として排外思想に濫用せらるゝ事

なきにあらざるも、一般の民心は正直に潤達に心靈上に祖先を拜じ、信仰上の同胞と親和するを好むはその日常の言動の中にも明かなり。藝術の開拓者として聖徳太子を崇拜する民は、又ラファエルを敬慕崇信するを憚らず、信仰の先驅たる曇鸞、善導を追慕する人心は、又眞信道行の模範として聖フランシスを容るゝを躊躇せず。天にいます父の御意を行ふ者を總て我が兄弟、我が姉妹、我が父母となし、而してその精神的祖先、信念の同胞の中にポーロ、アウグステン以下幾多の聖者偉人、學匠、徳僧を有する基督教が日本人の精神的祖先を抱擁し、その祖先崇拜の眞信心髓の中に自家の祖先を注入する能はずとすれば、それは基督教徒が祖先崇拜を狭く偏して解釋し、未だ祖先崇拜の宏大雄偉なる眞味を知らざる、近眼狹量なる日本の保守的思想家と共に、祖先崇拜の眞義を解せざるに因るのみ。

「神は誠めて云へり、汝の父又母を敬ふべし、父又母を罵る者は殺さるべしと。然るに汝等は教ふらく、供物を供ふれば足れりと。此

の如くにして凡人は父又は母を敬はず汝等は傳承の爲に神の誠を
 「空想せよ」との父又は母を敬ふべしと父又は母を敬ふべしと
 キリストが人の人に答へしこの言を今の日本基督教徒は如
 何に見るや。神意を行ふ者は總て我が父母祖先同胞兄弟なるを思は
 ずして徒に信條の崇拜と祖先崇拜との容れ難きを嘆ずる者は即ち根
 本に於て頑冥なる狹義祖先崇拜の主張者に降り盲者と盲者と相携ふ
 或は相排して共に溝壑に陥る者のみ。此の如き基督教徒は他は信を
 傳へんよりも先づ自家の信念その物を検査しその内容を吟味すべき
 なり。

若し夫れ忠孝の大義に至りては古今に通じて謬らず中外に施して
 悖らざる人生の大道人性の至情にして如何なる宗教如何なる道徳か
 その大旨に背戻する者あらんや。只この大義も時に隨て廣狹の別あ
 り人に應じて深淺の差なき能はず。戰國の武士にとりては忠君の義
 甚だ狭く厚養暖飽の孝心は必しも諫止苦言の大孝と相背かずとする

も二十四孝の孝子は必しも重盛の大孝を包括せず。大忠と小忠と時
 に相背き永遠の孝心と一時の孝養と或は相容れざるの嘆あるは人生
 多く見る所の事實にして忠孝兩全は又幾多仁人の心を悩ましたる問
 題にあらずや。忠孝の大義それ自身は炳として日月の如きもその眞
 正の意義と永遠の根底と而してこの意義根底に従ての應用とには自
 ら活きたる信仰の之を活用し徳教の光明の之を淨化し之を照明する
 者なくんばあらず。

基督教徒は此の如き忠孝の大義に對して何の覺悟をか有せる。そ
 の或る者は世人が往々にして忠孝を以て基督教に肉薄するを憎みて、
 忠孝その者を罵りたり。或は又他の人々は一時的方便的に忠孝の道
 徳をそが一般教育者或は思想家に用ひらるゝが如き一時的意義にて、
 方便的に逢迎したり。世人が如何に忠孝の大義とその根底とを解せ
 るかは今暫く問はず基督教徒が人生の大道たる忠孝に對する至誠の
 信仰に乏しき事實は即ち基督教その者の信仰の未だ教主の大意に透

徹せざる者あるを證するに足らん。キリストの信は、天地大能の主を我等の父と仰ぎ、その愛に接し、愛に依りて父に合するとともに、その大能の意志を地上なる天國に現はして天國の主を奉戴する一事に歸す。キリストの宗教は天地人生の大忠孝の最深き根底に立つ。彼れが天父を愛したる愛が人類同胞に及び、親戚朋友に發し、郷黨一國に及ぶが如く、彼れの大忠孝は、國にありては君に忠、家にありては父母に孝、夫婦は神意によりて一體となり、心靈の友はキリストの體となりてその血肉を融合す。此くの如き道德は即ち大本の信仰最上の着眼によりて、忠孝を淨化し、照明する所以の活力なり。真正永遠の大忠孝は悠久なる大信仰の盡きざる活力によりて始めて、眞正の活用妙用を呈すべし。

現今日本基督教徒の信仰に果して此の如く忠孝の大義眞諦を明かにして、一國道德の歸趣を指示し支配するの力ありや。未だ自家眼上の梁を拂はざる者が如何にして他人頭上の塵を淨むるの力を得んや。

我等はキリストの宗教を見來て今の日本基督教徒の意氣を觀すれば、實に恨なき能はず。僅々の障害に沮喪し、大に利用すべき機會を利用せず、大に培養すべき種子を棄て、顧みず、而して祖先崇拜の眞義、忠孝の大道に至りては與り知らざる者の如し。此の如くにして道を傳へ教を布くといふ、その事が外形一時の事に終らずば、是れ人生社會の一大奇跡なり。

我等は基督教が從來我が邦に成したる事業の鮮少ならざるを認む、此故に彼等の事業が至仁なる皇室の認むる所となりしを慶賀す。然れども、心の王國を支配し、靈の光を世に光被するに於て、日本基督教の現状が頗るはかなき状態にあるを弔せずんばあらざるなり。

(卅八年五月)

預言の信仰

預言の信仰は實力である。懸記は明哲の命令である。當るも八卦當らぬも八卦といふ如きは、その預言をする者にも信仰なく、預言を受領した者にも之を實現しやうといふ勇氣熱情を缺いてある、私利我欲を根にした卜筮の事で、眞の預言なる者は此の如き薄弱な者ではない。孔子が易を信じたのも決して此の如き一時の未來記として易を利用したのでなく、天地神靈の感應に信を置いたからである。況や幾千年の歴史の中に養ひ來つた理想信仰に基いて、過去の精神を自己の一心に收め、萬世を貫く心靈の力を自身に呼吸して、茲に將來人類の運命を命令し、支配しやうとした預言に於てをや。又況やこの預言神識に應じてその信の力を自分に現はさうとした應識の大聖人に於てをや。預言の信仰に對して、先づ我等の心に銘し、身に味ふべきは、此の如き預言の意義と勢力とが何に基くかの消息奧秘である。

理 想 と 信 仰

預 言 の 信 仰 (461)

日本人として、天祖天照大神が天孫に賜はつた征途出發の詔を知らぬ者はなからう、曰く、皇祚の昌なるは天壤と共に窮りなかるべし。此の如きは預言ではないか。然し、此の大預言を以て單に八卦卜筮の未來記と見做す人があるか、若くは此を以て一片の空言と見る人があらず。或は此詔は眞に天祖の御言葉でなくて、古紀の記者が支那風の修辭で祝福を述べたに過ぎないとする人もあるかも知れぬ。然し思ふても見よ、其言葉つきは、修辭の上からのみ云へば支那風であるにしても、此の如き思想觀念が支那の何れの時代に存してあつたか。已に支那には此の如き天壤無窮の皇祚といふ考へがないとすれば、その思想は日本のものでなければならぬ。その形は支那文字でも、その内容は日本人の精神である。その言が果して天祖の御言葉をその儘に傳へた者でなしに、古史の記者が附會した者と許したところ、我等は少くとも、古史編成の時代にはこの理想が存してあつて、それを支那文字で表はした者である事を許さなければならぬ。且つ此の如き遠大な

る理想は決して一朝一夕で養ひ得る者でなく。此の如く、遠く天祖の過去に遡り、永へに皇祚の將來を祝した大預言は、その基く所の深遠なる者があるのみならず、又之を言語に表明して堂々國史の先頭においた記者即ち預言者の信仰は堅く又深き者があつたに違いない。一片の修辭や一旦の御世辭に此の如き大預言大信仰が發表し得られる者でない。されば、この預言は古史で始めて現はれた者としても、その基く所は決して數代、少數の人の觀念に湧き出る者でなく、遠く天祖以來の理想を茲に表明攝容し、而してこの信仰理想によつて永く未來後昆を支配しやうとした大なる信仰、大なる力である。此を以て一片の未來記と心得るが如きは、實に心靈の力の何たるを味識しない人の考へである。この預言の如きは形は僅少の字に現はれてゐるにしても、その内容は過去と未來とを一呼吸に攝した大なる力、我等日本民族の三世を支配する大なる原動力である。

我等同胞の大理想はこの一預言で表はされてゐるが、事實この預言

は今我等の中に活きてゐる力、又我等の將來にも大なる生命を與ふる活ける泉ではないか。太平の時には人が之を念頭に留めないにしても、又時の汚隆に従てその發揚に浮沈はあつたにしても、國民の危機に際しては、必ずこの預言がその力を表はして來る。所謂神道の宗教は足利時代から甚だしき汚辱の状態で、祈禱師、陰陽師の玩弄物に過ぎないかの如くなり、徳川の始めには支那思想の跋扈にあつてその頭を擡げなかつたが見よ、一陽來復して古學の復古と共にこの預言は天下を席捲するの力を呈し來つたではないか。天地に唯一の神靈が在ます。その力は天にあつて天祖の靈として照鑑あり、地にあつては大八洲瑞穂の國の皇祚に表はれてゐる。而して維新の大業は天地の公道に基くとの信仰は、磅礴として天下の大勢力となつた事は、つい眼前の事實。此れは即ち天壤無窮の大理想、大預言が天壤無窮の生命活氣を有して、脈々として人心の奥に横はり、時に觸れ機に應じて、その大活動を發露する爲めではないか。

預言は決して單に未來記でない、過去の心靈を總括攝容してその力で將來を支配する信仰の力である。單に過去の經驗に基いて利害を打算して將來の得失を論ずる教訓警戒でなく、又過去の事歴に徴して、その類推で將來を揣摩して、將來はかくなるであらうかと斷ずる如き蓋然的臆測では尙ほ更ない。天地を支配する大道が過去にも現今にも未來にも變動はなく、人生を活かす心靈が處と時とて相隔たり相感し得ない」と云ふが如き薄弱な者でないと思ひ得た以上は、この大道の一端に觸れ得た人心は即ち過去をも未來をも自分の中に直接に經驗する事が出來、この心靈の源を探り得た精神は又三世十方の大精神と呼應交通し得て、茲にその大道を預言し、それによつて心靈の力を支配し得るのである。近くは教育勅語に、皇祖皇宗建國の大道が中外に施して悖らず古今を一貫して謬らない道であることを宣せられたのも、この天壤無窮の永遠なる靈の力を表せられたのでないか。日蓮が現在法華經の行者であると信じ、未來は決定として當詣道場であるとの確信

確信を抱いて、然らば知らぬ過去では又釋佛に親接した地涌の眷屬であるかと推し、三世各別あるべからず遺文九六一頁と斷じたのは即ちこの消息である。

近い例を物質界に取つて見やうなら、ニュートンの重力の發見の如きは物質界の大預言である。何故となれば、重力の事實は時と處とて變動差違なしに働いてゐる。ニュートンが之を重力と名け、その働き工合の關係を法則として表示した前にもその事實は存してゐつたのであるし、又それより後にも永年に働らく。即ちニュートンの發見は過去永遠の事實を發揮し明言したのみならず、又將來永劫にも有効であるとの信仰を伴つた法則なのである。天然物質界の事は人力なしにても動くからして、人生の事實の預言と天然の法則の發見と甚だしく異なつた者とも見えやうが、心靈の事柄でも根本的に此に異なつた者ではない。人心の中に遍流してゐる力、人心を普く支配する理想は決して個々別々でなく、つまり人々の精神は一つの久遠なる生命の川の一面

に淀むてある心である。その根本の力は一つのつゞきで、その水は互に相應じ相動かし居るのである。恰も大洋の中の島々が水面では別々の島と見えても、その根は洋底の大陸で續き、その中には同じ地層の續きもあり、同じ火山脈の影響もあり、過去でも連絡し、未來にも相互に關係を有つが如く、人々の心は時て隔り處を換えてもその根は一つ、その生命は一貫である。此の理を沈思してその勢力を味識經驗するのが即ち等流三昧である。只人心には色々の動機が外面から來て之を刺激する爲めに、一方の刺激に動かされてその方に氣を取られてある間には、他の方には感じを持たぬ事がある。眼あれども見ず、耳はあつても聽かないのは人心の常で、特に眼前感覺の事は誰も之れに注意し易いが、無形の事、三世に亘つた大消息は之を把持し難い。然し此の交通の困難は全くの絶縁の爲めてはなくて、一時の障害の爲めである。それ故に一方に大なる勢力があり、他方には之に應ずる眞摯の態度、之を容れやうとする欲望熱情があれば、心靈の窓は開けて、光明は忽に入り

來り、信仰は他の力を攝受して、茲に又新なる自分の活動を始め得る。恰かも無線電信の受信と發信機とを兼ねて發信もすれば受信もし得るのが人心で、その機械に故障なく、又その中に妨害のない以上は互に感應する。預言者は即ちこの電信器の大なる者で過去の人々が未だ十分に意識しなかつた理想を收容し整理して之を發表する。それ故その發表に應じ得る他の精神を動かし、一時の妨害はあつても、何時か何人かを動かしてそれに大なる活動をなさしめる。人の心靈が外物の誘惑に動かされ、一時の利害に惑はされる事を止めて、いつかはその奥に入て内に深く省み、心靈の感化に接しやうと求むる時には、預言は即ち此の精神を感化して茲に新しい生命を得る。つまり物質で天然力といはるゝのが、心靈界では理想であり、天然力の働き工合を云ひ表はせば天然の法則が人に知れる如く、理想が人間の中にその發言者を得て茲に預言となるのである。

預言の勢力感化に關するこの消息を明かにする爲めに少し古來の預言者、預言信受者の精神を觀察して見やう。古今東西の諸國民中、イスラエル民族ほど預言の信仰を貫徹した者はなからう。モセスからキリストまで千五百餘年の間、彼等は唯一の神ヤフエの光榮が自分等の肩にかゝりて存し、神法正義は世の唯一の神力である事を信じて、時勢の隆替國運の盛衰の爲めにその信仰を變ぜず、どこ迄も神の正義が世を蔽ふ時が必ず來るといふ信仰即ち預言に固着して終にキリストの出現に至つたのは、彼等の預言信仰の驚くべき事跡である。彼等を埃及の困厄から救ひ出だした火の柱は、常に彼等の中の預言者に光明を與へて、其預言は民族の理想として始終彼等の運命を支配した。彼等の預言とは、即ち彼等が信じてゐる全能の神靈の力で、この力は即ち又彼等の信仰の生命であつたのである。「天はヤフエの御言葉にて成り、天の萬軍はヤフエの呼氣に作られたり。ヤフエは海の水を集めて、うずだかくせり。全地はヤフエを恐れ、世に住める諸の人はヤフエを

恐れ畏こむべし。ヤフエ言ひ賜へば成り、仰せ賜へば立つ。」(詩三三) 彼等は神の御意は即ち天地の大道で、生々化々皆その大能の御意から出、その意は古今を貫いて常住で、末の事は始めから定まり、過去の中には既に未來を收め、その預言には久遠の生命のある事を信じたのである。それ故にバビロンで幽囚の中に居つた神の奴「エサイア」はこの神の言を録していつた。

「我れは終りの事を始めより告げ、未だ成らざる事を昔より告げ、我が計畫は必ず立つといひ、我が喜ぶ事は必ず之れを成さんといへり」

(エキイア四 十六の九)

預言と云ふのは此の如き久遠不朽の神意の發表で、預言者とは即ち其の信の力で、神の御意を直觀し、神の御聲に接し之を同胞に傳へた人である。彼等の預言は打算や計數で、將來は此くもなり成らうかと云ふ未來記を表明したのでなく、永久不變な神意の取り次ぎをしたに過ぎない。彼等の聲は神から聞いた儘の聲で、云はざるべからずして始て云

ふたのである。一時の政略や利害の爲めに發した聲ではなかつた。羊を牧して居つた卑賤のアモスもその神に聞いては預言せずには居られなかつた。

「夫れ主ヤフェはその隠れたる事をその僕たる預言者に傳へずには何事をも爲し賜はざるなり。師子吼ゆ誰れか懼れざらんや。」
(アモス八三)

主ヤフェもの言ひ賜ふ誰れか預言せざらんや」
彼等の意氣込みは此の如き者で、彼等の預言には神の力が表はれてゐる、この力は過去久遠の力で又從て未來を支配する力である。科學者が天則を發見して久遠の常則を發揮し、今まで人に知られなかつた世界の新相を示してくれる如く、又た藝術家が天のインスピレーションで天然人事の美を發揚して、美茲にありと示してくれる如く、イスラエルの預言者は神意此の如しと宣して盲者の眼を開き、曲れる者を直らし、跛者に歩む足を與へたのである。「ヤフェを渴仰する者は新なる力を得、又鷲の如く翼を張りて上らん。走れども疲れず、歩めども倦まざる

べし(エサイ三十一)といふのは彼等の現前の經驗である。科學者は其發見て新天然を示し、藝術家はその作て一つの創造力を實に現はすが如くに、預言者はその信仰に基いた預言に依て、神の造化、天地の化育、人生の照鑑に參與する。悲哀の預言者エレミアがこの力の吹き込みを感じて云つた言を聞け、

「ヤフェ遂に手をのべて我が口につけ、我れに云ひ賜ひけるは、視よ我が言を口に入れたり。視よ今日我れ汝を萬民の上と萬國の上とに立て、汝をして或は抜き、或は毀ち、或は覆へし、或は建て、或は植えしめん。」
(エレミヤ一)

後にキリストが信だにあれば山を移す事も出来るといつたのも、此の消息で、預言者は即ち造化參與の力があり、神の力の一部を代表してゐる。先に預言は力であるといつたのも、懸記は命令であるといつたのも此が爲めてある。

千五百年の間一貫して理想を鼓吹したイスラエル民族の預言の内

容が何であつたか、又その結果は何事を生み來つたかは別に詳論すべき問題であるか、此の如き意氣込みの預言が此の如く一貫し、民族の非運にも各人の災厄にも屈せず、飽くまでその信仰を固守して、段々その深奥の意義を發揚したのは驚くべき事實ではないか。固よりイスラエルの預言者は盡くその同胞に歓迎せられた人でなく、その預言は總ての人を支配したのではない。却つて預言者の多くはその當時に容れられず、人民に歓迎せられなかつた人で、特にエレミヤの如き悲惨の最後を遂げた人すらある。又彼等は當時の智者學者でなく、執權の王者判官でもなく、信仰を生命とし、預言を天職としてその榮耀のない一生を送つた人のみである。

王侯等は吼ゆる師子の如く、判官は明旦までに何をも遺さざる夜あさりする狼の如し。其の預言者は傲り且つ詐る人なり、その司祭は神の物を瀆し、法律を破れり。

多くの民は偽りの教導者に迷はされ、多くの智者は現代に謳歌して

(セハニ四ア)

濃酒に酔ふておるその中に立つて彼等は其眞信の預言神命を宣揚したのである。彼等の眼中には當時世にもてはやされてある勇者、戰士、判官、預言者、卜筮者、長老、閭長、貴族、議員、藝能の人、辨論に巧なる者(エサイ三)もなく、世の榮華政策外交の得失利害を超越して(エサイ三十一ア)永遠なる神意を求めて、それに依てその同胞を警め、國民を導かうとしたのである。即ち彼等は現代を超越する事によつて、過去をも、未來をも、達觀して、萬世に呼吸し、この呼吸で不變の理想を發揮したのである。彼等の預言が一片の未來記でない事は明白の事實ではないか、而して未來記でない預言は我等の特に味ふべき者でなからうか。

藝術の作者が天然人生の美に感應してその作を感得するが如く、その作品の美を味つてその感得に合體會心し得る人も亦、その作を通じて宇宙の美に接し、その靈に感應した人である。ニュートンの重力發見は天然物體の間の關係の奧秘を發揮した者であるが、奧秘を信じて、ニュートンの立てた天則は時と處との變を受けない事を會心したからケ

ブラーはそれに基づいて天體の間に存在してある未知の關係を發見し組織して、その限りではニートンと共に造化の奧秘に會體したのである。天祖の天孫に下だし賜ふた大詔を信じたから、書紀の編者は天壤無窮の理想を發揮し得、この預言の奧義を會得し、その實力生命を信じたから、復古派の神道はその預言理想の勢力を復活して維新の大業に精神的久遠の意義と活力とを與へたてはないか。

宗教の信仰といふも決して此と種類を異にした者でなく、預言が造化に參與して神意實現の機關となるのも此れが爲めである。無線電信の發電はあつても、受信器がなければ波動は空中に遍滿してあつても、電信は事實とならず。太陽の光線は七色を含んであつても、他の色を吸収して緑のみを反射する木の葉がなければ世に緑の色は見えない。此と同じく預言はあつても又その預言を信じ、之を味識し、色讀して躬ら之に當らうとする偉人がなければ、預言は人生に力を呈しない。而して此の如き預言の色讀者、實現者は實に又心靈の奥で預言者とそ

の根本の神靈とに感應し合體した人で、預言の命令に服従し、それで發せられた靈の力に動かされ、久遠の神意を一人の人格で實現し證明する人である。

キリストは即ちイスラエル民族千五百年來の預言を身に體し、信仰と實行との力で、その預言の空でない事、その預言をさせた神の活きたる事を證明開示したのである。この事の詳説は別に譲て、我等の先祖同胞の中にも、預言の實現者、信仰の生命を發揮した眞の宗教家ある事を忘れてはならぬ。その人は即ち日蓮上人である。如何なる意味で日蓮上人が一個の預言を信仰した宗教家であつたか、同時に預言を實現した人であるかといふ點は、故高山樗牛が遺憾なく之れを發揮したが(樗牛全集第四卷八頁以下参照)この一例は皇祖の大詔と相併で我々の間に預言に關する信仰の力、從て又之を實現する力の全く缺けて居ない事を示して居る。我等は此より進て尙我等の中に生きて表はれた預言の力を味はなければならぬが、今は樗牛のを録して、信仰の一例を示す事を以

て此の一篇を終らう。彼れは日蓮の覺醒を叙して云つた。上行菩薩てふ日蓮の自信は畢竟釋尊の預言に對する絶對の信仰と妙經色讀の行者としての一身の證悟とに本づく。日蓮にとりて佐渡は即ち末法の壽量品なりき。鎌倉の反對者が彼れを北海の孤島に放逐したる間に法華折伏の使命を付屬せられたる末法の大導師は更に此の謗法の國士に大法雨を雨らすべく出現しぬ。未法の大導師とは言ふまでもなく本化地涌の上首上行菩薩にして而して是の一大使命を自覺したる者は即ち日蓮其人に外ならざりき。(略中)

彼れは末法の導師の爲に預言せられたる勸持品廿行の偈を讀みて、あらゆる迫害を忍受すべき一大決心を固め、危害の身に及ぶ毎に佛識の空しからざるを喜べり。是の如くにして折伏逆化の事業に當ること二十餘年。今や僅に龍の口の斬首を免れて遠く北海の流人となりぬ。あゝ惡世惡國並び存して法華經の行者身を容るゝに處なし、而も上行菩薩は遂に出現せざるべき乎。彼れは疑ひもなく

是の幽深なる疑惑を抱いて北海の配處に向ひし也。然れども是の疑惑の解決せらるべき日は漸く近づきぬ。大醒覺將に近きにあらむとす。

塞外十月北地風荒く波高し。彼は暫く越の寺泊に泊して天候の回復を待ちぬ。匆劇の境を離れて忽ち幽靜の地に客たり、感懷果して如何。嗚呼彼は遂に目覺めたり、永遠に目覺めたり。二十年來の疑惑は霧の如く散じたり、法華經の預言は是の醒覺によりて更に新しき生命を得ぬ。東海の佛子日蓮の生涯は俄に寂光寶土の光明に照らされて直に佛識の現證となりぬ。彼れの過去は久遠の過去と切りぬ。彼れの未來も久遠の未來となりぬ。彼れの接觸したる一切の衆生と國土と凡て彼れの一身に關聯して、妙經預言の註脚となりぬ。彌勒天台妙樂傳教等は彼れによりて初めて妄語の罪を免れたるのみならず、一代佛敎の歸着は彼れによりて初めて現前の事證となりぬ。是の大自然の喚起せられたる時、鎌倉の流人安房東條の旂陀羅

の子日蓮は、一躍して本化地涌の上首上行菩薩となりぬ。……(略中)
 日蓮は果して上行菩薩の化身なりや。彼れは佛家の所謂る前生
 に於て靈山會上に釋尊の付屬を受けたりしや。是の如きは吾人の
 知る所に非ず、又知るを要する所にもあらず。吾人は唯日蓮が釋尊
 に對する無限の歸依によりて吾は上行菩薩也てふ金剛不壞の確信
 に到達したるを見るを以て足れりとせむ。(略中)見よ、是の確信を
 得てより彼れの性格の偉大は殆ど人界の規矩を超越しぬ。彼は是
 によりて天地人生の上に無限の威力を得ぬ。其意志と情熱と共に天
 來の靈氣によりて鼓吹せられぬ。(略中)彼は是の確信の力によりて天
 下萬國の一切衆生に向つて無上の權威を有するもの、如く教訓し、
 告知し且つ命令せり。(略中)三世十方の世界を貫通して久遠實成の無
 上道妙法蓮華經の現證たる是の確信の前には、日月も其光を失ひ、天
 地も其大を失ひ、一切人天の衆生は帝王も乞食も悉く皆一小兒とな
 りぬ。事茲に到りては言の記すべきなく文の述ぶべき無し。吾人

は唯歸命讚歎して唵々の一語を反覆するの外無き也。(廿八年四月)

自由と教權服從

(羅馬法王使節の歡迎に際して)

羅馬法王の聖座より遣はされたる使節を我が國に歡迎するに當り
 て余に一言を許されたるは余の甚だ榮譽とする所なり。古より羅馬
 は永遠の都といふ。一時世界の帝都としてカイザルの都たりし羅馬
 は政治の上にては夙に其實權を失ひしも、精神的王國の中心として平
 和の君の繼承者たる法王は歷代その地にありて世界億兆の人心を支
 配せんとす。今や戰によりて平和を得、武力に依りて侵掠の惡鬼を防
 止し得たる我が日本が、この永遠の都より平和の君の使節を迎へ得る
 は我等の最も喜びとすべき所なり。此より後我々は正義と平和と
 を宣揚する上に於て、弘く世界の公共的精神を發揮し、人道と人文との

爲に盡さるべからず。我等が宗派の異同に係らず、茲に法王の使節を歓迎するは、人道の上にて精神と望みとを一にする者は皆一體ならざるべからざればなり。此に於て我等は羅馬教會の聖教主義に對する見解を明かにせざるべからず。羅馬教會その物の性質、并にその教會の基本たる聖教主義が日本國體に對して如何の意義を呈すべきかは、將來我國にとりて重要問題の一たるべければなり。

世の羅馬教會に對する見解は、第一にそが自由を壓抑するとの一點にあり。世人多くは思へらく、羅馬の教會は傳承の教權に依りて立つが故に個人の自由を許さず、羅馬法王は暴君の如く自由の敵なりと。此の如くにして羅馬教會が各國々家の公敵なるが如きと共に、その代表する聖教主義は絶對に自由思想の敵なるが如く思惟せらる。此の如き愚見が多く我國に行はるゝは、羅馬教會に對する誤解なる事は別として、我國思想界の風潮が輕率にして薄淺なるを示すものにはあらずや。

人は多く自由を唱へて教權に反對するも、抑も自由と教權とは果して此の如く相容れざる兩極なりや。

自由とは讀て字の如く、人々各その獨立の意志に依りて思考し又は行動するの謂なり。然れどもこの獨立の意志とは決して個人孤立して相關せず、各その放埒を遂行するの謂にあらず。眞の自由は、人々各その本然の本務に従ひ、本然の我を本位として行動するの謂なり。中庸の言を用ふれば、人々各その性に從ふは眞の自由にして、その他の物欲に支配せられ、我意に行動するは、自由にあらずして却て物欲の奴隸となるなり。眞の自由は性に從ふにあり、而して性に從ふは即ち人々が各その天より享けたる本來の道を歩むにありとすれば、此の如き自由は教權服従の聖教主義と如何の關係を生ずべきか。

余は茲に一々宗教の必要を説き、又は神の存在を證明するの煩を執る能はず。只一事の特に諸君の承諾を要求すべき事あり。此の一事は自由の性質と教權の意義とを明かにする根底なればなり。一事と

は何ぞや。天地萬物皆その歸を一にするの眞理是れなり。我等人類は社會の一員として生まれその一生の始より終りまで全く獨立孤存の生をなさざると同じく、人類并に宇宙の生活がその根底に於て何か一貫せる一つの主力或は主義に歸するといふ事なり。或は之を科學的に「天然の齊一」と稱し得べく、或は佛教風に之を「萬法一如」といふべく、又は我道一以貫之といひ、或は萬の物一として父の御意に依らずば動く事なしといひしも皆此の一事に歸す。而して宗教の信仰より云へばこの一貫の根底は即ち萬人存在の根本、智徳の源泉にして即ち信仰の歸着する所、神といふも天父といふも慈母といふも可なり。この一事なくては、宗教の信仰が總て無意義に歸するのみならず、人生の大半は實に危険の中に浮動し、偏に偶然によりて支配せらるゝ者とならざるべからず。此の如くなればこの一事を容れざる事は宗教の信仰の喪失なると共に、又同時に道德の基礎、科學の根底を失はしむる者なり。知識も道德も信仰もその最終の點に至りては、この萬有一貫の信仰に

歸着し、又此に基かざるべからず。諸君にして一度びこの根本眞理を容れんには、自由なる觀念は茲に一轉化を経ざるべからず。人々の自由は個人自身の私有にあらずして、實にその一如の力たる天父の御意が各の人に現はれたる靈の賜なり。恰かも仁君が民の心を以て心とすると同時に、堯舜の民は堯舜の心を以て心とするが如く、此の覺醒を経れば一如の法、一乘の道は即ち我等人類の熱き望みと溫き愛とを集めて之を心とする大能の親たり又君たり。而して此の君父の心を以て心とし、天の命に従ひ、性を盡し法に順ふ我等人類はその孝子たり又忠臣たり。父子一體、君臣一心、忠孝の道茲に擧がるが如く、この信仰の中にありて人々各その本性に従ひ、天の父、天の君の意を奉體して此れより與へられたる本然の自由に從て行動せば、萬人の自由は即ち萬人共同の團結親和となるべし。我が天皇の教育勅語にも、皇祖皇宗建國の大道が中外に施して悖らず、古今に通じて謬らざるを宣し、我等は皆この道によりて、各皆その徳

を、一にせざるべからざるを命じ賜ひしも、即各人の自由は終に歸一に歸着するの理を明かにせり。堯の民が期せずして帝の道を歩みしといふ理想も即ち自由の本然の結果なり。

されば自由とは人々をして放埒ならしめ孤立ならしめて、人と人とをして狼と狼との如く相争はしむる者にあらず。自由の極は人々の間に眞正の團結を生ぜしめ、同じ君父の下に同愛の臣民兄弟たらしむる者、即ち眞の自由なり。その茲に至らずして我意相衝突し、小異により小黨を樹て、相争ふが如きは眞の自由にあらず。眞正の舉國一致は億兆心を一にする事によりて成るべく、而して億兆一心は眞正の自由によりて始めて實となるべし。使徒ポロはその弟子等に對する希望を述べて曰く、

父の光榮の富に従ひ、その靈に依りて汝等の内なる人の力を強め、又信に依りてキリストが汝等が心の内に住みて、その結果、汝等が愛に根ざし愛に基きて一切の聖者と共に、廣さ、長さ、高さ、深さを知

り、かくて智慮も及ばざるキリストの愛を知り、かくて汝等が神の充滿に充たされん事を。

然り、自由の結果は神の充滿、キリストの愛に現はれたり。即ち眞正の自由より生ずる團結は愛の團結にして、その團結は同じく父の御意に従ふ一切聖者の團體なり、三世十萬の諸佛の僧伽なり。此に於て眞正の自由は大なる團體に自己を投じ去る事にして、即ち同時に絶對の服従となり、眞正教權の承認となる。何となれば自己の自由に依りて終に一貫の道に達し、神に充たさるゝに至れば、その我は元の區別名利を争ひし我にあらずして總ての聖者と共に愛に依りて融和し、望に於て結合せる我なり。然れば我は即ちこの團體の我にして絶對にその愛の團結に服従する我なり。この服従は奴隸的服従にあらずして武士的服従なり。眞正の獨立自由とこの絶對服従は同一事實の兩面に外ならず。ポロは人々に愛を以て團結すべきを説きて『平和の繋ぎの中にて、靈の一なるを保つ事を勉むべし、斯かれば汝等が召されて望

にで一なるが如く體は一、靈は一なるべし』といひしは即ち是れ絶対自由の靈の一致が絶対服従の體の一致となれるをいへるなり。靈あれば體あるべく、體あれば靈あるべし。一つの信仰に依りてそれに服従する事によりてその中に自由を得るは眞正の自由にして國家の團結も教會の團體も此の自由に依りて始めて成立するを得。而して此の如き自由は團結服従によりて完全となるを得。此の如き團結の普遍なる力、萬人に及び萬世に亘り、中外古今に施して謬らざる力を實現して國家なり教會なりに中央の聖權を具現する者即ち聖教主義なり。ポロの云ひし如く、教會は彼れ(キリスト)の靈の身體なり、萬物を以て萬物に充たしむる充滿なり。此充滿は即ち愛なり、自由なり。家にありては孝となり、君に對して忠となり、兄弟に友に、朋友相信じ、夫妻相和し、而して正當の教權、聖權に服従して、人々各その則に従はしむる者は即ちこの愛の充滿の力、絶対自由の結果なり。此に於て自由と教權とは相撞着せざるのみならず、實に互に相助け相養ふべき者、眞の自由は

教權服従の中に實となり、眞の教權は自由の愛によりて成立すべし。而して自由と教權との眞實の合一は聖教主義に依りて始めて實となるべし。一言にして蔽へば、自由は靈の賜にして、靈の力あれば愛あり、信あり、愛あり、信あれば、茲に靈の團結、聖者の結合、生じ、この結合はその體を作り、中心を作りて、人生の活力となるべし。この活力即ち聖教主義にして、ポロの所謂「平和の繫」も此によりて人生の事實となる。此に於て吾等の家族も國家も又教會も單に「羈寓」にあらずして吾等は「聖者」と同じ邦、又神の家に居住せる者となるを得べし。

萬系一統、君と臣とは親と子の如く、建國の理想昭として一國の徳教を示し、億兆心を一にしてその美を濟せる國は實に此の如き自由と聖權との合一したる聖教主義の國にあらずや。ダンテが理想としたる國家亦此の如き國家にして、而して此の如き團結の國家的理想を信仰の上に移し來れば、即ち宗教上の聖教會となるべし。日本と羅馬との關係は蓋し將來の大問題ならずや。

意長く言盡さずと雖も、今平和方に克復して國運の前途を祝福すべき時に當り、世界公教の法王より、我が皇室に遣はされたる大使を迎へて茲に聖教主義の爲に一言するは事蓋し偶然にあらずと信ず。

(卅八年十一月)

戦勝と國民的自覺と日本文明の將來

未曾有の國運、千古の大事。現在の滿洲戦争は我が日本にとつて三韓征伐、文祿の役も、之には比するに足らぬ大戦であるのみならず、又我が日本の國運と文明とにとつて至大の意義を有してあるのみならず、實に世界の大事である。希臘の波斯戦争や、羅馬のブニコ戦争は當時の世界には大事であつた。唐太宗の東征西伐、英佛の印度戦争、此等も東西兩洋の關係上至大の事實であつた。然し其勢力消長の範圍の及ぶ弘さから見ても、長年月の發達を経て東西にその特質を發達し來つた歐亞二大陸の文明人心に及ぼすべき影響の上から見ても、今回の戦争は世界の大事たること、今までの大戦に比して勝るとも劣ることはない。

千古の國難、未曾有の大事。我が同胞は開戦以來口癖の様に此事を口にすが、その最も永遠の意義は果して國民に意識せられてあるか。

この戦争が直接には東洋の平和の爲め、日本國の存立開展の爲め、重大の事であるはいふまでもない。然し何れの戦争でも、それが大國民の運命を決する決戦である場合には、その結果の文明に大なる影響を生ずるのは、古來の歴史上争ふべからざる事。マラトンの一戦は希臘の文明にとつて、從てそれから流出した歐洲の文明にとつての決戦であつた。プニコ戦争の經過は羅馬の國民に忍耐と自信との力を與へ、その結果は羅馬とその後の世界文明に大結果を齎らした。その外トルコ人のコンスタンテノポリ攻城、チャレイレスマーテルの勝利、三十年戦争の結末近くは二十七八年役の結果、皆單に戦争の勝敗と一國の隆替とのみでなく、弘く人類の運命に關係を及ぼし、一文明と他文明との死活を制した。而して特に注意を要する事は、戦敗國、滅亡民族の文明精神は決してその戦敗と共に滅びないで、恰かも大な丘山の壞れてその震動を四方に與へる様に、又大な池の堤防が潰えてその水が原野に氾濫するが如く、その影響勢力が四方に氾濫し波及する事である。この

場合に戦勝國民が大氾濫を制し、制するのみならず能く之を利用吸収して、その文明の勢力を包容し、咀嚼する場合には、その戦勝は兵馬の勝ばかりでなく、勝者は又文明の勝者として大に興隆し得る。若しさもなく兵馬の勝利に次いで精神上の包容攝受力が十分に活動しない時には、その國民は傲慢と固陋とに陥つて、却てその一時の幸運の爲めに化石し或は壊亂し終るが必定の運命である。羅馬は希臘を征服してその文明を吸収し同化し、小亞細亞の獲得と共にその新宗教の新生命を得た。大唐の隆盛は中央亞細亞や印度の文明に接觸した事によつて多大の燦爛を加へ、英國は印度を得て其富と哲學とを併せ得た。之に反してトルコ人は東羅馬帝國を顛覆してもその文明を逃がしてしまつて、終に保守固陋の民となつて終つた。匈奴は東伐西攻、一時その恐るべき勢力を示したが、憐むべし、その文明を消化する力もなく、終に消滅してしまつた。此等の消息を考へ來ると我等は今回の大戦争に關して、その戦役の勝敗や、外交、財政の得失以上更に偉大で永遠なる

重大事が我等の前途に横はつてゐるのに驚き又喜ばざるを得ない。我が同胞は戦争の大事を説くと共に、この將來文明の大事について深く考へ又覺悟を定めた事があるか。

開戦以來、日本が毎に戦に勝つ、随分今まで兵家の無理と考へた方法や又は豫想しなかつた策と力とて毎に勝を制する。此に於て日本戦勝の原因は何れにあるかといふ事は、外國人のみならず日本人自身にも疑問となつて、近頃はその原因を武士道に歸するといふ意見が多く、武士道の回顧又唱道も漸く盛ならんとしてゐる。我等はこの點について今意見を述べるの必要を見ない。何となれば我等は戦勝の原因に關してよりも一層知りたい否な考ふべきのは戦勝の行末である。戦勝つて國運の行末如何といふ事と共に、この光榮ある國民が戦勝に一層の自信と勇氣とを得て、此れから以後如何なる覺悟と理想とを以て世界の文明の中に活動し進取しやうかといふのが我等の最大問題である。

云ふまでもなく、戦争は國民の自覺の上に大勢力を及ぼす者で、その影響が一國の國運と文明とに深い關係を有する。固より國民の自覺はその基く所祖先以來養つて來た傳來精神の結果であるから、國運の將來を考へる爲めには、その過去をも顧みなければならぬ。戦勝の原因を武士道に尋ねて、武士道を推奨するも、この意味では悪い事でない。然し我等の要求する所はそれより一層深く遠く、將來に對してこの戦勝國民の理想を何に求むべきであるか、又過去を顧みては我等の祖先傳來の精神とこの理想とが如何の關係を有するかにある。即ち國運と文明とにとつての大事である戦争の最中に、茲に特に同胞の注意を惹起したいと思ふ點は、回顧と共に大に前進の方針を定め、戦勝を機として深く一國文明の歸趣を求めてほしいのである。又た武士道が果して戦勝の原因で、その戦勝が國民の自覺の大原動力であれば、この自覺々醒の機運に乗じて、上は武士道を國民歴史の過去に發揚せしめ、又た今日に至らしめたその國民精神の淵源源流を探り、下は之れを將來

の進運に活達自在の發達を與へて、上下一貫古今透徹の大理想を發揮しなればならぬ。この悠久の光明に觸れ、この永遠の生命の流れを汲ひて之によりて戰勝の結果を永劫に及ぼし、又武士道なり、日本魂なりを靈化し活用しなれば、或は恐る、戰勝は一時の騒ぎに止まり、武士道の聲も單に、保守的の回顧思想となつて終る事を。

人には自ら信じ自ら立つ所がなくてはならぬ如く、國民は又一國民としての自ら頼む立ち場がなければならぬ。然し、自ら立つといつて決して孤立の義でなく、自ら頼むのは他を排斥するの義ではない。人に自ら信ずる所があり、その自信が天地に俯仰して耻ぢざる公道に合するなれば、その人は必ずや能く人を信じ、人道の公道の上で能く人と協同し人を容れ人と和し得る。自ら信ずる所があるといつて自ら孤立し、自ら尊ぶといつて人を容れないなどは、畢竟その自信が未だ天地の至誠と感應せず、その自尊には正道の根據のない證據で、此の如き自信は偏執我慢の私情に過ぎない。一國民といへども此と同じで、已に

自ら立つ覺悟があり、自ら執る理想があつて、それが天下の公道、人心の至情に背反した者でない以上は、その覺悟の中に能く他國民を攝し、その理想の中に、宇内の文明を吞吐するの度量がなければならぬ。固より一國の發達には各その歴史上の特色もあり、國性は各その特別の聯絡關係で出來上つてあるが、而かもその特色といふ者も決して一般人性と隔離した者でなく、その國性といつても他國の文明と全く相容れない筈の者でない。各國の文明國性が各その特別の發達を遂げた後にも、それ等が深く人性の必要に應じ、天地の公道の一部として發達し來り、又今後も發達すべき者である以上は、それ等の間には活潑自由なる融通關係が生じ得らるべきである。已に自ら立ち自ら頼む所がある以上は、あだかも強健なる腸胃の人が盛んに諸種の滋養を消化吸収する様に、安んじて大にあらゆる國民文明に接觸し、その精髓を入れその精神を吸収すべきである。此は自分の特性と異つて居る、彼れは自分の本色を破る恐れがある、外國の文明や思想は危険だといつてその

接觸吸入を恐怖するのは、胃弱の國民であつて、要するにその自ら頼む所が偏狹な基礎に立つてあるからである。自ら立つ立場と之を守る力とが十分にあるなれば、その立場を中心にして、盛に諸種の文化を容れ、その力て之を自分の者に消化するがよし。そうなれば自ら頼む所としてその過去を思ひ、祖先傳來の精神文明を尊重しても、それが保守的の回顧思想とならず、又盛に他邦の文物や思想を吸収しても、之が單に外面の模倣、一時方便の利用として終らない。此の如くにして回顧すると共に前進し、外物を容れると共にそれを自分の者根から自分の者に化して行く。此が真正に自ら頼む所のある大國民、文明の華役者たる文明國である。自ら守ると稱して徒に過去を追ひ、外物を嫌ひ、偏狭の量を抱く人民は會々世界的文明の利器に接して之を利用しても、僅にその外面を模倣し一時の利用に供するに過ぎずして終る小國民、胃弱國民である。

二千年の歴史と開國數十年の命維れ新なる運命とを過去にして、今

やその國運の爲の大事に踏み入つて居る我等日本人は茲に大に自己の立場について覺悟を定めなければならぬ。特に戦争、強國と強國との決戦は、その國々と世界全體の國際關係のみならず、その國々の文明又世界文明の行末に大なる關係を生ずる大事件であるから、この場合國民の自覺は永遠の光明に接觸して、遠い過去以來の精神を發揮すると同時に、將來に對する豫言的理想の覺悟を定めなければならぬ。今まで歐米の諸國民は往々我等日本人の文明を稱して外面模倣の文明と貶した事がある。又我等の同胞の間には只管過去の追懷、尊崇許りが國民の自覺であるが如く見て、外邦の事柄を頭から排斥する思潮も随分少くない。歐米人の批評は只事相を知らない門外評として一笑に附すべきであるか。又同胞の中に行はるゝ保守的回顧は果して眞の國民的自覺の聲であるか。我等は二千年の歴史を過去に脊にし、その結果一つ國民的大覺醒を経て、この戦争を機會にして將來の進路を定むべき大切の時期に遭遇してゐる。此に於て我等は特に世界文明

の將來に大關係のある問題を提出する。何故なれば、日本國はそれ自身
の立場を守ると同時に、已に世界的舞臺に上つてその文明の一部に
活動すべき必至の運命に際會してゐるので、若し日本がこの運命の大
潮流に乘じ得ないといふなれば、それきり、若し之に乘じその運動の中
に加はらうといふなれば、日本の立場に基いて、世界と同伴し、協同し、又
終には世界を嚮導し、指揮するの度量と力量とを發揮しなければなら
ぬ。而して世界文明の行く末に關しては、一時の國際問題や經濟問題
よりも深遠の根據から出、古今を貫き、東西に亘つてゐる大原動力が存
在するとすれば、我國が將來如何にこの大原動力に對して活動すべき
かを考へるは目下の急務、又永遠の必要である。

凡そ文明といふのは決して厚生利用の途のみでなく、又機械物質の
利用のみでなく、その法制や文物思想の總體を包括し、思想信仰の源泉
から流れ出た、一民族開化の全體である。而して此等總ての文明の發
表は決して偶然に相集まり相接して開發するのでなく、その第一の

根底が人民の理想に根ざして、その理想が信仰を生み、知慧を支配し、道
徳や美術や産業政治の行動云爲を左右して茲に諸種の文明となるの
である。此の如き根底の理想を同じうしてゐる民は、或は一國民とし
て國民の特色と歴史とに固有の文明を作るもあれば、又或は國民とし
ては各その歴史や特色を保ちながらも、尙その上に共通の理想と文明
とを有する所謂る文明團體を造るもある。何れにしても共通の根底
理想ある處には、その根底と離すことの出来ない、それから流れ出た文
明を作り出だして世界の文明に燦爛たる光彩を放ち得る。

我が日本國民は東亞の洋中に特立してその政治上の獨立に數千年
の團結を作り上げて來たのみならず、又血族の關係精神の傾向、道徳の
特色に依て特有の國民性を維持し開發して來つて、茲に日本文明の華
實を具へて居る事は明かなる事實である。我等は飽くまで祖先傳來
の精神を繼承して、その文明を將來に發達しなければならぬ事は、是れ
又云ふまでもない。此點に於て日本國民の立場は徹頭徹尾國民的で

國家本位である。然しながら此特有の國民的立場に忠實であると共に我等の忘れてならぬ事は、我等が祖先以來の理想信仰は洋中孤立の島國的特色を保守したのでなく、我が國の過去の文明は濶達に自在に印度や支那などの我等に接觸し來つたあらゆる文明を消化し吸入し來つて、茲に東亞の文明團に屬してある事である。特立と共に包容があり、包容の中に特色を發揮し來つた事、是れが日本文明の肝要なる性質である。

凡そ何れの國の文明でも、その開發進歩の途上に外邦の文物に接觸し又之を包容しなかつた者はない。希臘の文明が埃及と東洋との感化を受けた事は云ふまでもなく、支那の如き自尊孤負の國民すら、その有形無形の文物は中々多量に印度や中央亞細亞の文明を容れてその華を開き來つた。然し我が日本が位置から云へば孤立の島國で、血族から云つても統一と特色とを保ちながら、その文明が飽くまで包容的であつた事は最も注意すべき點であらう。此等の細説は別にして、兎

に角、日本の文明は日本の特色と共に印度、支那、朝鮮の所謂三國傳來の根底を有し、東洋文明の總括と見るべきである。現今の歐洲の文明が希臘、羅馬、中世を経て來た文明團を作つて、西洋文明の一系統をなしてある如く、日本は東洋文明の總括的代表者である。何となれば東洋文明の本國印度は尙その古來の文明を保存してあるが、極めて保守的に偏狹な印度風を維持してあるのみであり、支那も亦同様偏狹であるのみならず、將來に對する活力を有するや否やも疑問である。獨り日本のみは此等の文明を總括してその千餘年の經過をなし來つたのみならず、又將來に對する旺盛なる活力、發達力を有して、茲に東洋文明の最大、又最後の代表者となつてある。今後若し東洋文明が世界全體の文明に何等かの勢力を有する者、又有すべき者とすれば、其勢力活氣の根となるのは我が日本でなければならぬ。それ故に日本は日本的に消化し發達して來た東洋文明を世界に發表し活動せしむべき唯一の代表者である。東洋文明の勇者、茲にありとの大自覺、大抱負は我等の

隣人、古來の恩人に代はり、又我等の祖先の意氣を繼承して、今後益す大に發揚すべき所である。

加之、將來に向て「世界文明の進路に對して我等が重大な職務を帯びて居る事も、新興戰勝の國民として特に心に銘すべき事」でなからうか。人も知る如く、十九世紀の世界文明は、歐洲人の獨占の舞臺であつて、彼等の商工外交上の膨脹につれて、その有形の文物のみならず、無形の知識や信仰も世界統一的勢力となつて來た。又今後と雖も西洋文明が世界を支配すべき力となる事は明かだ、この大勢に反抗する事は決して願はしい事ではなく、又出來る事でない。凡そ古來の文明は何れの方面でも常に接觸融合の傾向を持つて、古今東西の國民は各その國民的特色を發揮すると共に、統一調攝の方面に向て進み、複雑と共に一致を一致の中に複雑を進めて來た。この大勢力に適應し進取する事の出來ない人民は即ち倒れ亡びる。自己の特色や自覺のない國民が亡國である事は勿論であるが、又統一の大勢に調和し、この大潮流に乗じ得

ない者は必ず保守頑冥の化石國として倒れてしまふ。この事實の歴史的證明は別として、之を譬喩て云つて見れば、音樂の大合奏で、各の樂器はその獨得の音色と調子とでその任務を盡すが、その特性は又た合奏全體の大調和に應じなければならぬ。國民的文明と世界的文明とは少しも此に異なる事はない。近い一例が北清事件は支那國民が世界の大勢に適應しなかつた爲めの擾亂で、日本はその場合に世界の大合奏に加入し調攝した爲めに今日の大戦争をも成し遂げる準備をなし得た。此は單に一事件の成り行に過ぎないが、文明の大勢は此と同じである。

今や二十世紀の世界文明は萬國共通の要素、世界的調和の必要に向て駸々として進てをる。この大勢に後れる者は即ち今後の亡國である。この際に處して我が日本——東洋の文明の代表者たる日本——がその國民的自覺の上に又その世界的發展の上に至大なる意味を生ずべき大戦争をなして、又大勝を得たといふ事は、世界將來の文明に何

等の影響を及ぼさぬであらうか、又日本文明の將來に對して何等の預言的覺醒を要しないであらうか。東洋文明の代表者が西洋文明の世界に對して活動し、その大勢に乘じ、又終にはその大勢を支配するには如何なる覺悟を要するか。又今後世界の文明が東洋西洋幾千年の要素を渾一して進むべき時に際して、世界文明の指導者、茲にありと號令すべきは誰の任であるか。故高山樗牛が曾て日本の美術に關して我等に大なる預言的教訓を與へた。曰く、

今日一千年以上の儼然たる歴史を有し、尙有望なる進路を將來に有するもの、渾圓球上實に我日本と歐洲とあるのみ。風土別れ好尚同じからざるも、是の二者は世界に於ける美術發達の二大潮流を代表するものと謂ふべき也。

今の世、アリアン民族以外に國するもの少からずと雖も、儼然として獨立國の體面と實力とを保有し、世界の一大勢力として二十世紀以後の競争場裡に馳聘し得るの望あるものは、獨り我日本あ

るのみ。是を人種競争の歴史上より觀察すれば、近世の大事は主としてアリアン、チユリアン二民族の勢力の消長に外ならず。而して是の競争史上の敗者たるチユリアン民族の漸く支へざるや、競争の部位次第に西より東に移り、今や世界の勢力は極東の分野に奔注し來りたり。是の時に當りてチユリアン民族の文明を代表して是の競争場裏に立てるものは言ふまでもなく我が日本也。凡そ權力競争の裏面には必ず文明の競争あらざるを得ず。見れば、印度以東南洋以北の東半球の文明を二千年の歴史中に綜合し來りたるチユリアン民族の最後の代表者は、實に人類の史上に於て最も重大なる地位を保てりと謂ふべき也。

予は日本の美術が是の間にありて實に稀有なる位置を有するを見る也。印度以西の凡ての邦國の美術が歐洲美術史の中に流注したるが如く、印度以東の凡ての邦國の美術は間接又は直接に日本美術史を構成する勢力たらざるは無き也。希臘佛教式の健

陀羅美術は、佛法の東歸と共に支那、朝鮮を経て早く既に我邦に入
 來れり。大唐の藝術が天平、平安の二朝を風靡せしは言ふ迄もな
 し。鎌倉より足利の時代に及びては、宋元の影響より遠く成唐の
 餘波を復活せり。……德川時代に到りては、近くは明清の勢力あ
 り、遠くは西洋の感化あり。下て明治維新の開國と共に、西歐の風
 尚は痛く本邦の藝苑を動かし、本邦美術の將來に向つて最も重大
 に且つ最も有望なる影響を與へたるは吾人の親しく目撃しつゝ、
 ある所也。是の如く見來れば、日本の美術史は取も直さずチニ
 アン民族の具體的文明史なり。而して政治史上の日本がチニ
 アン民族最後の勢力を代表するが如く、日本の美術史は歐洲美術
 史と對峙して、人類の美的活動の二大發展を表示するものと謂ふ
 べし。……予は信ず、世界に於ける各個の民族は其の到達すべき文明に關
 して、各々の特異の理想を有すべし。……予は又信ず、若しこの

世界に人道の理想なるもの存せりとせば、そは何れの國民、又は何
 れの民族にも偏倚せず、あらゆる人類のあらゆる特質を包括し、調
 和し、玉成したる所に存すべき也。……日本美術史の研究は是の點より見て、更に重大なる意義を有し
 來れるを見る。世界の文明を二分して、其の一を保てる、日本國民
 が將來、人道に寄與する所のもの、素より一にして、足らざらむも、而
 かも、美術は如何なる場合に於ても、其の最も貴重なるもの、一た
 るを失はざるべし。是の如きは予が日本美術に對して有する抱
 負也、信念也。

(櫻牛全集第二卷八
 五〇—八五四頁)

此は獨り美術に關してのみ云ふべき事てなく、文明全體國民の理想
 努力の總體を支配すべき大消息で、戰勝で發揮せられた國民の自覺も
 此に至らなければ無益である。軍事や外交や財政やあらゆる經營は
 一國文明の手足で、その心髓は深く一國理想の奥に徹到した大勢力に
 存する。この大勢力を把へ得ない國民なれば、その軍事は如何に發達

しても、商工業は繁榮しても、その國運は浮萍に等しくその文明は皮相に止まる。

我等は東亞の海上に國して茲に東西文明の管鑰となるべき運命を
持てゐる。又今度の戦争で内は國民の自覺を發揮し、外は世界の尊敬
を受くるに至つた以上は、茲に一つ大覺悟を起さすべきでないか。將
來の世界文明に一大原動力となり、精神的に世界を統一し、無形的に世
界の中心となるの責任と幸運とは我等の肩の上に懸つてゐるのではな
いか。

然らば則ち我等が東洋文明の代表者として、又西洋文明の發展者と
して如何にして世界を統一すべきか。この問題は尙ほ一層詳しく社
會と信仰との二面から次に詳論しやうが、兎に角戦争の事は單に戰場
の勝敗で終る者でなく、又一國の文明はその根本の精神に着目して、自
家の特色を發達しつゝ、又世界統一の方面に飛躍をしなければならぬ
事の覺悟を、くれぐれも同胞に警告する。戦争の月桂冠を轉じて二十

世紀以後世界文明の大立物たらしむる事は、我等の夢寐忘るべからざる理想ではないか。

(廿八年四月)

文明の新紀元

一 日本と新文明

目を舉げて祖國の雄大なる隆運を見よ、汝等の心その愛に充たさるるまで之を凝視せよ。汝等の心この光榮を見て深く感ずる所あらば、又翻てその雄偉なる國運の偶然にあらざるを沈思せよ。この國を建てたる汝等の父兄はその本務を知り、之を盡すの勇を貯へ、恥を知り、節義に進み、若し又企てて成らざる事あらんも、空しく退かず、進て身命を祖國に捧げ、此を以て彼等が捧げ得る最上の犠牲なりと信じたり。

(チニキアス二卷)

ペリクレスが其の祖國の爲に戰死した同胞を追懷して、アテナイの市民に告げたこの言は、丁度又今日の我々に對して發せられた如くに聞こえる。この光榮ある時世、有望の時代に生存してある我々には又

自ら進てこの光榮に負かず前途に光明を齎すべき任務を興へられ
てある。その偉大なる天職を喜ぶならば、それと共に我々は戰場に聘
馳して國運動興の先驅をしてくれた同胞に感謝しなければならず。
又我々の將來の大業が如何にも重擔なるを見て悚然として驚く時に
は、海に陸にその身命を祖國に捧げて、可惜身命の實例を示してくれ
た聖徒を思念して、その中に勇猛不退轉の力を養はなければならぬ。
過去二年に亘つた大戰の結果が重大な事實關係を起すといふ事は
云ふまでもないが、然しその結果を眞に重大にし、又永遠にするのは、生
き残つてある我々の力に依る外ない。戦争はいくら重大でもその結
果が如何に深く又遠くとも、その深遠の勢力を事實に現はし、その効果
を收めるのは、即ち我々國民の努力に待たざるを得ない。世人は之を
稱して戰後經營といふが、所謂る戰後經營は、經濟や軍備の案排整理ば
かりの謂ひでなく、此等の設備その外一切國運の進歩、國民の進取活動
の根本に横はつてある大覺悟、大理想を一切經營の原動力とするにあ

る。さもなければ、總ての經營は離れくとなり、社會の階級と階級と利害と利害とが相衝突するの不幸を戰後經營の中から生み出す事は多くの先例で明白である。されば今日以後の我々の任務は戰後の跡しまいの經營でなく、それも必要ではあるが永遠の事業にかゝるに存する。戦争といふ大機會で與へられた刺激に應じて、その中に得た覺醒と自信の力とに基づいて、茲に日本文明、それから引き及ぼして世界文明の上に一大運動を起す覺悟を固めるのが即ち我々の勉めてはなにか。

思ふに、文明の轉機に際してゐるのは獨り日本ばかりでなく、世界の文明は十九世紀末からして已に一大刷新の時機に迫りつゝある。社會や經濟問題が或は勞働組合、トラストなどの形で其變革の大潮流を示してゐるのみならず、思想なり道德なりの方面で同様の運動の起りつゝある事は今日では公認の事實である。思辨冥想の哲學に反對して起つた科學主義も自ら思想統一の力を缺いてゐる事を自覺して、一

方ではハックスレー等の不可知説、他方ではヘッセル等の細胞靈魂の空想で、その破産を明かにしかしてゐる。宗教では新教の正統派がその信條の根本を聖書批評の爲めに動かされて周章の態にあるのみならず、又殆ど一千年來(即ち回教侵入以後)他の宗教道德に接せず又之に接しやうともせず、自尊自滿の状態に居つた歐洲の道德生活も何か一つの刷新を要求し始めてゐる。米國で種々の新宗教や新傳道の起つてゐる事はいふまでもなく、英國の如きすら大に目を覺まして、今日の教會は有効の感化を與へてゐるかといふ問題に苦悶し始めてゐるではないか。藝術や文學の方面で動搖と變革の機が熟してゐる事は殆ど列擧するまでもない。ベクソンの如きは畫を畫く技術や色合や題目ばかりでなく、實に畫の心持ちその者を全く革めてしまつたので、その影響は年と共に擴がりつゝある。英國のラファエル前派、佛國の印象派など亦同じである。文學でも十九世紀初の莊重派クラシックに代つたロマンチックの朦朧思想も、又その反對の寫實派も十九世紀の末期には

漸次云はゞ人格派ともいふべき風潮に地歩を譲らざるを得ない様になつて今日に至てある。要するに社會組織の上でも思想感情の上でも又宗教的・道徳的・生活の上でも我々の世界は新紀元の幕開に際會してある。

この新紀元が特に我が日本の文明にとつて顯著の、又激烈の震動を以て始まりつゝある事は、恐くは萬人の認むる所であらう。封建分裂の状態が統一帝政に歸したも復古と共に維新であり階級の打破・特權の撤去、個人の自由、此等の社會的刷新と共に道徳・思想・感情の總てが維新以來激烈な變化の潮勢で流れてある。今迄の道徳・觀念を根本から覆して、道徳を總て利益勘定で處理しやうといふ學說と實行とが一方に盛になれば、他方にはどこまでも義の一點で義理と傳承の威權を道徳の基本にする人々も少くない。放埒な個人主義と、偏屈一方の家族單位主義、我儘な空想家と利巧な實務家。此の如き對照混戦があると共に、又今迄の文物や思想が新來の文物と一緒になつて益すその特色

を發揮しやうとしてある。佛教から吹き込まれた現實以上の觀念世界はプラトーン以下の哲學や文學と相照應し、淨土門の信仰はキリスト教の信仰に影響せられて今や餘程その特徴を明かにし始めてある。元祿以下の小説が西洋文學の溫氣で復活し、萬葉の長歌が新體詩と化現して西洋詩人の跡を追ふ様になり、近くは坪内氏の新樂劇などが起つて來、又は日本畫の新派が新趣工で歴史畫なり佛畫なりを試みて西洋畫に對立し様とする如き、恐くは一々數へ立てる必要はなからう。現今の日本の文明は、永い積雪の後に野邊の草木が、新しい水と鮮かな光とを享けて各その新裝を競はうとするのに比べる事が出来る。此時に當て、戰爭が恰かも俄かに吹き來つた南の暖風の如く、非常の力で國民に自信の力を與へ、その活動があらゆる方面を刺激する事は、是れ亦云ふまでもなし。即ち積年蓄へ來た英氣と、今迄鬱勃として發生しかゝつてある發達力とがこゝで一大轉進をなさうといふ時であるから、我々はその發生の間に帯を切り、蟲を除き、而して一定の方面の

方向にその健全の發達をなさしむべき重大の時に遭遇してゐる。今の日本の文明は、建國の大本と國民の性質とに基いた永遠の基本に加へて、あらゆる新來の事物、勢力、思想を包容しつゝある。而して戰爭の結果、一方では自尊と自負の情が増してゐると同時に、又戰爭をして此く好結果を得しめた物質文明、西洋文明の物質的方面を崇拜する風も加はつてゐる有様故、この撰擇取捨には最も確乎たる主義がなければならぬ、主義といふのは即ち今後發達の方向である、文明嚮導の理想である。この主義方向については、世界の文明も餘程迷ふてゐるが、この複雑な文明の間で特に東西の文明の中間に立ち、小年限に劇變を経來つた日本は、恐くは彼れよりも一層の困難に遭遇しなければならぬ。困難といつても恐れる要はない。困難に打ち勝つのは自分の力一つ、理想一つである。艱難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を與へてくれる。この點で我々はペロポネソス戰爭後のアテナイ人民に劣てはならぬ、國民舉てベリクレウスとなつてこの新紀元の

美を成さなければならぬ。

この事業、戦後の經營、又新紀元の文明の理想方向を定める爲めに二つの觀察點がある。一つは社會的團結の力、一つは人々の信仰の力。

文明はどうしても社會的產物である。即ち團結の結果で、その團結の方法や團體の種類は異なつても、團結の中に一致と複雑とがあつて、經緯參差色々の文明を生ずる。それ故に一國文明の運命或は針路を考へる場合には、是非その國の社會團結の成行きと、その團結力の中心とを根本にして、而してそれが變化する事情境遇に適應し或は反應し、又外來の文明に接觸して之れを容れ或は之を拒む根本主義に着目しなければならぬ。

社會は文明がその中に培養せられる土壤であるが、その團結の根本には土壤を作り上げてゐる個人があつて、その性質、又信仰が社會の生活力となる。個人の力を主張すると、人は直に個人主義と思ふかも知れぬが、個人主義の是非は別として、國家の進運は個人の自覺信仰をそ

の源泉としなければならぬ。個人、の心、靈は社會團結の根本で、その力は即ち文明の華となつて現はれる。(以上三〇〇頁)

此く二方面から見來つて、日本文明の新紀元は今どういふ状態に居り、又如何なる望みを持つてあるか。我々の見る所では、經濟問題は暫く別として、社會團結力その者に關しては、一貫の道、不動の精神で貫徹するを要する。即ち傳來の威權と親和の愛情とが皇室に集中し、又皇室で代表せられて社會の中軸となつておるのであるから、總てこの大本に基いて動かなければならぬ。只日本の社會は上下の關係はあつても、對等の關係が圓滿に發達して居ない故、此の點は今後特に着目しなければならぬ。即ち人格の尊重、責任の觀念を盛にして、茲に社交なり政治なり商業なりの間に單に服従から生ずるのでない徳義を發揮して、獨立して而かも能く協同し得る個人を要する。蓋しこの點では我々は多く歐洲キリスト教國、特に英國の社會を範とすべきでなからうか。

次に道德の上から見て、日本人は古から服従の美德に富むて居つて、衝動的に我意に従つて行かず、中々自制、抑遜、忍辱、柔和の徳に富んでゐる(少くとも今までの美德は此處にある)。之れに加へて佛教の寂靜て而かも信念堅固の諦觀、柔軟て而かも不退勇猛の慈悲が不知の間に國民道德の特色を作つて、それが武士の道にもまた日常の生活にも餘程現はれてゐる。此の美風が活動主義とか奮闘主義とかいふ美名で世を眩惑する西洋の restless な、mensy な而して終には我利一片の高擧的な惡風に染まり汚されなことを努めるのは、蓋し我々の第一の務めであらう。それと同時に、日本人の信仰に、我道一以貫之的の勇邁な風が今後益す必要になることを知らなければならぬ。而してその道は、永遠の天道、所謂る中外に施して悖らず、古今に通じて謬らない大道であつて、この大道に對する敬虔なる信仰に、養はれる覺悟が國民の道徳を活かす力にならなければならぬ。此の如き信仰は云ふまでもなく、佛教の根本信仰であり、又實に教育勸語の大精神も此の道に在ると

信ずるが、この精神を特に明かに又宏大に發揮する者がどこかに存在しないか。我々はキリスト教の信仰が少くともその一つ、その大なる刺激滋養の一つであると思ふ。文明の新紀元に進み新光明に接しつつある我々にとつて此事は研究の肝要なる問題であらう。

一 社會の方面

社會の團結力から言へば、日本は實に最も強い團結の中心を有してゐる。皇室を萬古千秋變らぬ國民の宗家として、民が皆之を國家の中心と仰てゐる事は、いふまでもなく、之れと共に家門の觀念、親族閭里の觀念が普く社會生活を支配してゐる事は我が國の大きな強味である。二千年の歴史を云々するまでもなく、近く維新の大變革があつた様に直に成し就げられたのはこの團結力、即ち一つの中心に對する服從、忠愛の情が社會を支配してあつた賜である。此の事は日本人の間では左程印象を深く感じないでもあらうが、外國の觀察者から見れば、特に驚

くべき勢力として感ぜらるる。西洋の例で云へば、シルレルが描いたワレシタインは、ハップスブルヒ家の傳承的勢力、カイゼルが帝國の中軸となつてゐるその力に對して自分の力のみで戰つて終に敗れた一例である。彼の戯曲を見ると色々個人的關係や勢力の外に王家の力の如何に大なるかを想はしむるのがあるが、日本の場合は、ハップスブルヒ家どころの勢力でない。その起原ではどうであつたにしても、奈良朝以後國家のこの中軸は盤石の上に立つた勢力として出來上つて、色々の危機を過ぎ、又種々の難關をも通り越して來た大勢力である。皇室が社會全體の中心としてその團結の根本であるから、他の社會的團結も自ら模範と感化とをそれに得て服從、合同の團結が出来る。日本の社會は祖先崇拜で出來上つてゐるといふ説明もこの事實の一つの解釋で、日本人は傳承の勢力を認め、之を尊重し之に服從する精神に富んでゐる。歴史の尊重、先人の追慕、長者に服從、此が佛教の信仰、彼岸と心靈の觀念に合して深い感じに基いた道交と團結とを生じた。然し

祖先といつても必ずしも肉體血脈の關係ある祖先を崇拜するのみが日本の祖先崇拜でなく、或は家門の關係でも、或は藩族或は學派、或は職業その他何事に係らず、肉體なり精神なり何等かの關係上一つの團結、社團があれば、その社團の人々は同朋で、その傳承は同朋の共同の祖先となり、教權となつて、茲に綿々たる聯絡を保つ。それ故日本人の祖先崇拜といふ者は廣濶な内容を有してある社團的勢力であつて、決して一家一門の血族祖先の死靈を崇拜するのみでない。この點では日本人と羅馬人との社會的宗教が甚だ相近いのであり、又其團結力が種々の方面に適應發達し得る望みも茲にあると思はれる。例へば軍隊の團體としての傳承尊重の精神の如きは、古代の物部等八十諸氏の武門の習風を直接に受けた者ではないが、今日では郷黨と聯隊との連合關係が親密なる爲めに自ら古の武門で見た如き社團的精神を生じてゐる。又市町村の自治でも地方によつては團結的精神の甚だ缺けてゐる處もあるが、多くは古からの郷黨團結の風を承継いて、新たな範圍と

新たな方法との自治團結を作りつつある。要するに此等の新方面の活動が能く其秩序を保つて發達し得るのは、一方では歴史上の素養と一方では適應の精神が充足してゐる故であることは明かであらう。

凡そ團體の勢力となるには一定の組織と一系の歴史關係とを要するので、此なしには理想のみで現實有力の團體を作り出だし難い。團結の中心がその團體を支配する力を有するに一定の權力がなければならず、一定の權力と一定の組織がその歴史的傳來の勢力で命令し支配する權力を固定する時には、其思想、趣味はどうしても保守的に傾く。保守は團結に必要であるが、其れが偏屈になれば外形の固定に比例して精神の活力が減少し進取の氣象も適應發達の力も消磨し易い。是れ古今の通勢で今更喋々すべき事でもない。が然し、此點は社會の團結力を觀察する上で最も肝要の點で、理想の方面に着目する人は歴史を尊び、教權を尊長するの必要を忘れる様に、現實の社會的勢力を重んじ、その團結の由來に重きを置く人はどうしても此の如き保守に傾き易

い。嘗に思想の上げかりてなく、社會が漸次その組織を固め、一定の秩序で動くのみで新進活動の必要も少なく刺激も少くなる時代には、人心は既定の社會體制に對して尊敬と服従との情に富むだけそれだけ歴史に拘泥して改進を喜ばない風を生ずる。之に反して變革の時代、革新の世には、歴史を尊重する風が乏しい代りに、新たな方面の團結力が現はれ来る。之を日本にしては徳川時代の如きは前者、米國は後者である。年は後者の適例であり、他の國でいへば、英國は前者、米國は後者である。一國の基礎を固め、社會の結合を永遠にする爲めに、歴史的關係を重んじ、傳承と教權とに對する服従心を養はなければならぬ事は勿論であるが、然し此と同時にこの歴史的感情が徒に回顧古を重んずるのみ、習氣となつてはならず、傳承と教權も形式に流れず、精神をとつて潤達に自由の進取を許す者でなくてはならぬ。然らざれば社會の事が總て型に從て行はれて緩取りのきかない風になり、服従は屈従となり、卑屈因循となり、社會は化石の様になる。此の如くになれば、之を改革す

るなどいふ望は絶え、打破と革命とで新方面に血路を開かなければ仕方のない様な不幸を見るに至る。嘗に社會組織のみならず、此の如き形式固定の社會では思想も道德も信仰も何事も皆同然で、つまり社會は秩序整然たる墓地に同じ事になる。人は服従を知つて責任を思はない、秩序は重んずるがその精神を忘れて之を殺して使ふ。假令それまでにならないにしても、社會の事物は機械的に風習傳承で夢幻の中に進む様になつて、終にその單調を亂る聲に驚かされるに至る。

日本の社會はその大本では極めて古い中軸を中心としてその勢力は万古不易、その權威は天壤無窮、それ故若しこの社會團結を偏屈に解釋し應用しやうならば、その勢力は總ての變革の正反對であるのみならず、又極めて自守の想に富むだ排外思想となり易い。然るに歴史上の事實は全く之に反して、社會の事物制度の上にも又その運用の思想の上にも自由な潤達な態度を執て古今を貫き、その結果古來東洋の文化をこの國に包容し盡したのみならず、今又大に西洋の人文を攝受

しつゝある。大化の新政は畢竟聖德太子以後支那の文物と佛教の信仰を容れ來つた結果を制度の上に現はして、民族同居の國に國家的脈絡を興へんとした者ではないか。王朝の社會文化は即ち此の適應進取の賜である。それから以後の變化は暫く措いて、明治維新の社會改造は實に總ての點て根から葉までの刷新を興へたが、その改造刷新をなさしめた精神は實に堂々たるものであつた。神道家は單に國史の中に皇室の古の尊嚴を尋ね出してその古に復しやうとしたばかりでなく、彼等は此の中に千古の道があると信じた。千古の道とは即ち宇宙の中心に在ます唯一最上の神の道で、この道が即ち皇國の道、皇室の德である眞理を發揮しやうとしたのである。それ故維新の革命を擔任した人々の精神にはその言ひ現はし方は儒教風で、その中には陽明風や朱學風もあつたにしても、嚴として動かぬ大道、從て如何なる事情にも適應して進み得る勢力を此の國の社會に實現しやうといふ意氣が充滿してあつた。即ち彼等の復古維新は、根本の精神は大保守で、

その方法は、大進取であつたのである。「天地の公道に基いて」といふ御誓文の語は即ちこの信を總括したものではないか。此を武士道と名付ける人があれば、その人の隨意であるが、この意氣込の中に燃え立つて居つた大精神の道は武士のみ道でなく、又武家時代の精神ではなかつた。「萬機公論に決し」云々の御誓文の中には已にこの大道に基いて、後には立憲の政、自治の社會にまで進まうといふ預言的信仰を表明せられてある。此が即ち新日本の新紀元を開いた曙光で、爾來日本の社會が、その大本の團結、皇室を中心として親和を益す明かに自覺し發達すると共に、この大本に立つた社會の組織制度を如何に新時代の必要に適應せしむるに努力し來つたか、今一一之れを述べる必要はない。が一二を云つて見れば、司法制度の刷新を手初にして、地方の自治、代議政體、法典の制定など、その成行と現状との缺陷如何は別として、兎に角日本國民がその社會的發達の上に濶達に包容的に西歐の社會制度を調攝しやうと勉めつつある、又其の調攝が成功しつゝあるしるしてあ

る。我が國の政治には希臘民政以來の空氣も幾分か吹いておれば、羅馬人の家族關係を規定した風習も吾々を支配し、又中古ドイツ人の市民生活の一部も我々のものとなりつゝある。而してその中心觀念は即ち自由に伴ふ責任で、自由と責任との團結、今迄の服従の團結に、人格の自重、自信を融和した團結、此が我々の前途を照らす燈明である。固より司法の完美、立憲政體の完成、その他自治や教育の事などまだ大に改良し施設して進まなければならず、それが爲めには今後尙ほ色々の健闘も努力も經なければならぬが、兎に角日本國民の進路は此の方面では針路だけは十分に定まつてあり、且つその大本には盤石不動の基礎が永遠の生命を支配してあるのであるから、我等の前途は坦々たる大道とは行かずとも、決して亡羊の嘆を發する必要はない。只此の間に立つて最も警戒を要する事は、歴史の尊重からして甚だしき保守の風を増長して、大本と枝葉と實質と方法との區別なしに排外思想が起り、此が爲に、社會團結の大本をも生氣の衰へた化石に化せしむる

事である。

例へば家族制度の如き、之れは日本の社會組織の大本である。が若しこの制度を飽くまで古の形のまゝに保守しなければ日本の社會は破壊せられるといふ様な保守見が勢を占めたなればどうであらう。家族の中心は父なる家長で、家長の代理はその長男であるから、嚴密に家族制度を守つてその古の通りにしなければならぬとすれば、長男以下の子は如何にして活潑に社會に活動し得やうか。獨立も出來ず、移住もならず、嚴密な家族制度から云へば、父母の國を去る事は、大罪である。明治の社會はその活氣の大半を奪はれてしまつてあらう。此は固より一つの假想で、今の世に此の如き保守思想の人がありはしないが、實質と方法、形式と内容との區別なしに適應を嫌い、保守を喜ぶ思想の極端な結果は此の如きものに陥ることを知らなければならぬ。それ故に今日并に今後の必要は一方では社會團結の中軸勢力である建國の體制を貫徹して、忠君と愛國とが益す明かに一つになると共に、こ

の精神の基本を大に有効にして、新時代の社會を健全にする爲めには、總ての新制度新觀念を容れて個人として、團體として、その自由の活動を許すに躊躇せず、已にその培養扶植の緒に就いた立憲政治以外の諸制度を完成するに勉めるのみである。而して此の目的の爲めには形式に拘泥した保守思想、偏狹な官僚思想を打破して行かなければならぬ。家族制度とか祖先崇拜といふ事も亦此様な形式的保守思想の爲めに化石せられない様に、その間に現はれてゐる、掬すべき人情の心髓を汲み取つて、人性の至極愛情の結合に基いた、開濶な家族結合、清新な又廣濶な祖先崇拜を發達するに努力しなければならぬ。

此く見て來れば社會組織の上では、日本の新紀元は既にそ發達の道程に上つてゐる。今回の戦争は一國民の自覺の上になな刺激を與へ、又其結果新領土若くは勢力範圍に對する施政の上で新方面の事業も始めなければならぬが、此等の事は社會發達の上では必ずしも新紀元を始めさするものでなく、又今迄進取し來つた方針を續けて一層大國

民の資格を作らしむる刺激となるのみである。その勢力刺激は大であつても、それは必しも新勢力ではなからう。

然るに日本の新社會とその戰捷の效果とが合體して一つの新刺激を與へつつある面白い事實が日本以外に現はれて來てゐる。それは我が同盟國である英國の社會に對する新日本の刺激である。

英國の社會は人も知る如く、エリサベス朝に王朝の基本が固まり、國教會が立つてから、今日に至つて殆ど完成の状態、太平の有様にちつてゐる。人民には進取敢爲の氣象はあり、社會の活動も中々に盛てはあるが、その諸般の事物は總て定まつた軌道を歩むて中々變革を許さない。階級職業の事でも殆どカースト的に判別が出来、商業でも法律でも兵制でも又教育でも殆ど傳承の力のみ支配せられて行はれてゐる。その社會的物には總て威嚴はあるが融通が少く、落ちつきはあるが流動を缺く恐れがある。それ故に或は威嚴と品格との爲めに英國の社會が適應發達を忘れる恐れがある位で、又事實その弱點は

近年色々の方面(兵事や教育を主として)に現はれ始めた。此に於て英國にとつての靚面の問題は如何なる方面で此保守不適應を脱しやうかといふにあると見らるる。安靜不變の單調を破つて社會を内部から活動させ流通させるに如何なる刺激劑が必要であるか。此が數年來英國社會の問題で、かのキッピングの文筆が世を動かしたのも彼れがその帝國的聯合の思想を興へて社會的生活に一脈の鮮血を注いだ爲である。然し帝國聯合の理想や政策は經濟事情には勢力を及ぼしたが、未だ大に社會内部の刷新的刺激を興ふるまでには至り得ない、又將來にもその望みはないらしい。そこで英國の社會はやはり社會制度の刷新を問題としてその解決を望む。固よりその間には社會主義といふ新勢力もあるが、英國人の氣受けには又それほどの新主義をも望まない。又尙ほ一つ羅馬教會の復興といふ一つの勢力も此の間に加はつて侮るべからざる形勢を呈しつつある。此の勢力が終には或は國教を動かし教育を左右する様になるかも知れぬが、今日にはまだ

中々全社會に行き亘る勢力とならず、英國人一般の此教會に對する習慣的反抗力も亦中々に強い。そこで英國の社會的刷新問題は依然として何か新しい勢力、或は刺激を求めつつある。

此時東亞の洋中で日本の勃興は、その同盟國たる英國の人心に大きな感動を興へざるを得ない。五十年前の鎖國、四十年前までの封建國、今日でも異教國、その日本が教育や兵制を變革したのみならず、立憲政治をまで立てて、而して十年來に見る如き大勃興をなした。社會萬般の事物は、非常の變動をなして、あつても國體の大本は動かさず、又た道徳の特徴——寂靜の中に熱があり、沈着に果斷が伴つた——は益々發揮せられる。英國人から見、即ち同盟國といふ同情友情と現在の英國にとつての必要との上から見て、此の如き日本の社會は特に注意すべく研究すべき問題となるは至當の勢である。今迄の好奇心から出た日本研究は、今度は自家の參考の爲めの研究となるは自然である。徵兵制度の問題や、日本教育制度の研究などは皆この結果で、日本に

對する研究の態度は英國思想界の一つの勢力とならうとしてある。但し茲て一言同胞の注意を促す。この一事を以て直に英國の日本崇拜とか日本模倣とか見る様の事のないのを願ふ。英國人は決してしかく直に模倣したり心酔する人民ではない。又英國人は決して今に至つて始めて目が覺めたのでなく、ドイツの教育制度調査などは非常によく出来てゐるのであり、兵制の事も數年前から研究中にある。然し今迄色々研究して考慮してもまだ斷然猛進しやうといふ域に進んで居なかつたのが、今日本の勃興はその社會的刷新の結果であるとして見た爲め、茲に一つ大きな刺激を得た。刺激を得たが、英國人の常として中々直に飛び立たない、衝動的に動かずに研究し熟慮して進まんとして、その研究熟慮の的を我が日本に向けんとし始めた。この研究と熟慮は必ず何かの結果を事實に現はすに相違ない。日本から與へた刺激は良友の刺激として、それとドイツの寧ろ敵對的刺激とが必ず英國を動かすに相違ない。陸軍士官が多く日本研究に来てその中に

は既に孫子を譯した人がある如き、又ロンドンの大學が日本の教育に關する講義を開く如き、又思想界に有力なる雑誌の主筆が明かに日本を範にする事を英國の社會の勸告した如き、此の事は後に再び兎に角その徴候は十分に現はれてゐる。

そこで、此くの如く日英二國の社會の現状を比較して來ると、恰かも二者は互に相補ひ相習ふべき位置にあるといつてよい。日本社會の缺點は人の責任の觀念の乏しい事、人格の尊重の足りない事がその最大であつて、立憲政治や自治制の發達の爲めに此點は特に我々の猛省し改新すべき處である。然るに恰も英國の社會は此點で世界最上の位を占めてゐる。人格の尊重、人權の安全、而して此に伴ふ責任の觀念、此等が英國の立憲政治の血液で、その社會の元氣も此にある。我々は此點ではどこまでも英國を師匠として進まなければならぬ。而してこの國風が日本の國體と相戻らないのはいふまでもなく、實に國體の精華に光彩を添へ、この結果を實にするに避くべからざる性能である。

翻て英國の側から見ると、制度の整然、規律の明細、之を一貫する、自制的、徳、而して之に加へて、濶達、進取の氣象、此等は即ち英國が特に日本に習ふべき點ではなからうか。英國の完成し充實した社會は今や新鮮の空氣を流通する必要に迫られつつある。其時に同盟國の日本が新銳の氣を貯へて其社會を刷新し再構しつつ、あらゆる新分子を容るるに躊躇せずに進んであるといふ事は、英國にとつて實に大なる刺激、又大なる快事ではなければならぬ。

然れば、日本の文明は社會の方面から見ても新紀元に際してあるが、それが又政治上の同盟國と相補ひ相助けて進むべき社會的新機運であることは日本にとつての至幸ではないか。我々は十分この幸運を利用して進取するを要する。然らざれば天佑天命に背くものである。而して此の如く兩方から相助け相益し進む結果は必ず世界文明に一新勢力を作る事を覺悟しなければ、我々の天職は世界的に果され得ないのであらう。

三 宗教の方面

凡そ文明は社會生活から生ずる人間努力の發表で、此努力はその理想、信仰、思想の總體が活動として現はれるもの。それ故に文明はその發表の結果では或は法制、政治となり、或は利用厚生、の道として現はれるが、その根底に入れば、人心の最も深い信念、情緒、人生の最も高く高い理想が其の最深又最大の原動力となつて居る。例へば支那の現實主義の文明は修身齊家治國平天下の修煉の發表で、此の修煉は遠くは堯典にも現はれてある敬天の思想、易に代表せられてある天人交通の信仰で出来上つたので、その基く所は、やはり人心の形而上的趨向に存する。ローマ人は無数の神靈を拜したが、その主宰の大神があり、皇帝はその最高の司祭あるとの信仰がその帝政統一の基本となつておつた。其他此の類の實例は今一一例擧するまでもなからう。一國一世の文明を觀察し、又その將來を指導する上で、その實際の方面に着目する必

要は云ふまでもないが、それと同時にその根底を人心の奥底に探らなければ、その真相に達することは出来ない。

今、日本の立場から世界の文明を観察して、世界文明の趨向又需要の上から日本文明に對する希望を陳ぶる爲めにも、やはりこの見方からして、世界人心の趨向、東西兩洋の宗教信仰を察して、その間に處するの理想を發見するが第一の要であらう。

世界の文明は今や方に一大轉化の時機に遭遇して、日本はその國內の發達の上からも、亦世界に處する日本としても、この變化の激烈な潮流に捲かれつゝある。而してこの文明の變轉は實に特に精神的方面から始まり、又精神的方向に進みつゝある。蓋し十九世紀の世界は、一方ではその物質的發達と他方では國家主義の確立とでその最大の活動を成し來つた。物質文明の發達は商工業の發達となり、利用と厚生の完成、從て現實主義、實利主義の増進を促した。國家主義の確立はこの商工業の發達と相合して、茲に國際競争の激烈を加へ、或は帝國主義

或は資本合同の大勢を作り出だしてある。そこで今日の經世家は特に文明の現實の方面、國家の實利の側にのみ着目し、帝國主義、商工競争の動搖に目眩して、只管國權擴張、商權伸張の策を講じ、此等の政策の外に一國民の能事はなく、人間世界の文明は現實の實利の外に求め得られないかの如くに考へてある。一國の物質文明、國力充實は固より今日の必要である。今日の國際競争の間に處して俄に理想的の人道を實行し、無差別の世界主義を踐まうとしても、それは不可能といつてよろしい。さすれば、經世家の眼がこの現實の點に集中するのは至當の勢である。然しながら我々は今日のみ生きてゐるのでない、一國の文明は眼前の必要實利のみで動いては、盲動に終らざるを得ない。加之今や世界の文明も人心の趨向も急激に一轉の機に向かつて、十九世紀の實利文明はその破綻を示し、今後は別種の方面に轉やうとする大勢を示してある。二十世紀の文明は今や將にその新しい曙光を放たんとしつゝある此際、我々は現在の必要以上更に新紀元に踏み入り、活

動を開始しなければならぬ。戦争で世界の先に立つた日本はこの新文明の開發に對して人後に落ちてならうか。今は十九世紀に歐米の實利主義文明を崇拜した舊夢を繰り返すべき時でなく、二十世紀に於ける世界的文明の先登として進むべき時である。

十九世紀文明の破綻は、約めて言へば、物質主義、現實主義の破産である。物質主義は人と人とをして互に狼たらしめ、國と國と階級と階級とをして互に虎たらしめ、人は今や虎狼の世界に住み飽きて、否虎狼吞噬の苦惱に堪え兼ねて人間の世界、人情の暖い中に生活することを要求してあるてはないか。國家が干弋の重擔に苦み、社會主義が架空の社會組織の爲めに無望の死闘をなしつつあるも、皆舊文明破産の一徴候ではないか。思想界が一種の觀念主義例へば今のプラグマチスム或は新カント學派の如きに向ひ、文藝がロマンチックの夢の甘味に酔はうとするのも、何れも現實以上更に何物かを求めんとしてある人心動搖の發表である。廿世紀の文明は今までの現實主義から理想主義に轉じ

やうとしてその出口を求め、その徑路を搜して煩悶し戦闘してある。

此時に當つて文明の基礎である人心の信仰に對して我々日本人は如何なる位置を占めてあるか、又た如何にその進路を決すべきであるか。

云ふまでもなく、世界の文明と信仰とは古からして東洋と西洋との二大潮流を作つて、この派別は今日一層明かに相分かれ、而かも同時に又相接觸し來つた。古代に東西兩洋が如何なる交通をなし、相互に感化を及ぼしたかは歴史に譲り、兎に角、二者は二千數百年の前から已に明かに各その特色を開發して來た。その特色を概して言へば、西洋のは活動で、東洋のは安心立命。之を言ひ換ゆれば、一つは愛情包容の生活で、他は離脱高踏の理想。この二者は一見して相矛盾する様であるが、その根底に入て見れば、各完全な人道の二面を代表してゐるので、離脱の精神も之を作り上げる愛がなければ、單に寂靜無爲の退嬰に終り、包容の生活も高踏の氣節が之に伴はなければ、我執利己に陥る。而して事實、東西兩洋の文明は今や各その兩極の弊を生じて兩方の頽勢を

四 西洋文明の理想

示してある。此の二者をして相戒め相浄め相完からしむるのが當來の新機運て而して又實に日本の天職ではなからうか。

活動の寵兒、人界のだゞつ兒、プロメタイスが天上の火を竊ひて、人界に持ち下だし、人間に利用の生活を與へて以來、希臘人の理想は常に人間生活の完成にあつた。その間には天上を夢み神の仲間入りを希ふ傾向もあつたが、その天界といふのは畢竟人生の幸福を圓滿にしたもの、その神々は人間の自在力を得たものに過ぎず。彼等は人體の美の中に人間の完全を見、神靈や死靈との交通でこの生命に利しやうとした。ローマ人も希臘人と同血族の民として、その現實活動の理想を政治法制に現はし、その神々も祖先の靈も皆な政治と社會との保護者たる外なかつた。然るに此等の人民に高遠の光明を齎らしたものは即ちキリスト教である。キリストは直接に己れの父として仰ぐ唯一最高

の神を萬人の父として、その愛の中に人類同胞の實を擧げ、又之を總ての權能と威嚴と仁徳ある君として、その支配の下に、天に光榮ある如く地に愛の平和を實にしやうとして、その福音は希臘以來の完全調和の理想を清淨にして高遠而かも切實にして、普遍なる感化力に化した。その天父の福音は人をして、天父の爲めには一切現世の寶のみならず、生命をも捨てしめ、この世の榮華は天上の君主の光榮の前には塵埃に等しい事を悟らしめるにあつた。然しながらキリスト教の特徴長處はその熱烈な愛の感情に存し、その信仰は即ち父の愛の中に、光明と希望との充滿を得るにある。固よりキリストの教にも又キリスト教の文明にも、その反面の忍受、諦觀、靜觀の消極的方面もあるが、その特色は愛の中の活動、希望の進取で、その理想は極めて積極的である。教理或は理論は暫く措いて、實際の活動から見れば、キリスト教は光明、愛情、進取の宗教で、西洋の文明は社會組織でも、文藝でも、又思想感情でも、皆この氣象を傳へて白日大道に立つて濶歩する如き態度を有してをる。

固より西洋文明は徹頭徹尾盡くキリスト教から生まれたといふのではなく、或は歴史の成行き、或は民族の性質が積極的性質を帯びてを爲めの結果がその中に存する事は云ふまでもない。即ち快濶な積極態度は前に述べた如く、希臘人以來西洋文明の遺傳で、之に加へて北方ゲルマンの活動主義——時には我慢傲情の風を帯びた活動主義が歐洲文明にその特色を興へてをる事も争ふべからざる事實。ルーテルの宗教改革といふのも、その一面から見れば、中世南方の信仰の陰鬱な退隱的氣風に對するドイツ人の反抗であり、又近頃ドイツ邊に個人主義が現はれて、キリスト教を退嬰の宗教と貶して、之に反對するドイツ主義或は近世主義を主張するのも、亦同様の潮流と見える。然しなから、此等の氣風がキリスト教の感化で益す發達し、又統一を得た事は拒み得ない。希臘人の多神的現實宗教はキリスト教で一の天父の愛に統一せられ、ローマの法制は神意の批准に依て淨められ、ゲルマン人の粗野な活動主義は愛情の宗教で、精煉せられた。西洋文明の結晶の中

心核子はキリスト教の愛と信との理想で代表せられてをる。この一事は近頃反キリスト教的氣風の現はれたに關せず、事實争ふことは出來ない。

光明、愛情、生々活動、是れがキリスト教とその文明との長處で、又活力である。然しながらこの長處は之を濫用すると單純な我利的活動となり、排斥的性質を帯びた利己、自滿となり易い。現實主義も物質主義も亦此中から生ずる傾向を持つてをる。靜穩の反對に活動ががさつな restlessness となり、忍受の反對に進取が眼前の我執に變ずる恐れがあるのは西洋文明の弊と思はれる。特にキリスト教と共に歐洲に入つて其人心に浸潤したユダヤ教の熱烈な信仰は、その唯一神熱信と共に寛容を缺き、その折排伏的態度は排他主義の趣を具へてをる。エルサレムの殿堂に地上の百王が跪拜する事を夢想し、ユダヤの民が他國と戦ふ時には、その神ヤフエはケルビムの羽音を響かして萬軍の主自ら敵軍を破ると信じたユダヤ教の思想が、キリストの愛の宗教と共に歐

洲の人心を感化して、キリストの教と反対の風潮を養つてをる事は特に注意を要する。歐洲強國の君王は曾て東洋に兵を送るに當つて、彼等に向て假令へ善であり美であらうとも、キリスト教文明でない者は之を破つて了へといふ餞別の言を與へた。又その同じ君王はその軍隊の爲めに祈つた後の説教に、ユダヤ史書の言を借りて、イスラエルの民がその主に祈れる間は彼等の兵は勝てり」といつた事がある。此の如きは、父の中に一つとなれの信仰から出たのでなく、神は自分の神であるといふ排他的ユダヤ宗教の氣風が歐洲の自稱キリスト教徒の中に存してをる事實を證明してをる。近くは日本がロシアと戦ふ時に、ロシア人のみならずその隣人までも、東洋の黄色鬼を滅すのは神に對する義務であると宣言したのも、歐洲思想の一面、ユダヤ的我執の一發表てはないか。而して此の如きユダヤ的我執は近世文明の主我利己と相結托して白人の自慢心に投じ、キリストの「汝の敵を愛せよ」の訓言に耳を塞ぐ人は、その良心の魔睡劑として、常にその典證をユダヤの聖

書に求める。今日の歐洲は事實上にユダヤ人を排斥しながら、思想上ではその下風に立つ人が多い。キリストが一二の豫言者——特に精神的に神に對する愛を教へた豫言者の外は知らざる者の如くあつた事も使徒パウロがユダヤの宗教は過ぎ去つた宗教である事を辯論し證明しやうとした事も彼等の盲せる心眼には見えならしい。ユダヤ宗教の影響の事は此に止めて、兎に角歐洲のキリスト教文明が近世に至て特に樂天進取の害用、神恩の濫用に傾いてをる事は拒むべからざる事實であらう。ドイツの史家は毎に論じて、近世の歐洲文明は宗教改革の結果又賜であると云ひ、白人種獨尊論者は多く近世の文明は即ちゲルマン民族の文明であると主張するが、此は餘程事實に近い。少くとも今述べた排他我利の方面では十九世紀の文明はゲルマン民族の我執その結果の宗教改革に養はれて、それがキリスト教の惡副産を作り出だした。十九世紀の文明がその特長を有してをつて、科學思想の開發、國民的統一の増進、社會秩序の齊整となつて現はれて

をる事は明かて、日本の新文明もこの方面では大に歐洲文明の恩澤に浴して居る。然しながら科學思想の裏面には、總て高い理想深い人情を排斥する現實主義が横行し、國民統一て愛國心の美德が一層明白に現はれたと共に、國際の競争が商工業の競争、資本家の利益と互に私を助けて、粹惡殘忍の氣風を作らうとしてをる。之に加へて十字軍以來數百年の間他の高等な文明や宗教に接せず居つた、近世歐洲のキリスト教は餘程自尊自慢の氣風を長じて、他人種の心情に入つて同情し、他宗教の信仰を汲み分けて見る事は一般人民には餘程困難になつて來た。黃禍であるとか、異教國であるとかいふ様な恐ろしい名が日本人の上に加へられるのもその結果である。

要するに、近世歐洲の文明はキリスト教の假面を被つてキリストや神の名を濫用して、内には現實主義を増長し、外には排他の風を發表して來つた。科學の機械的思想で人々の感情要求を壓抑し、自分の財産或は階級或は國家の小利の前には何物をも顧みない様になつて、その

結果競争に競争を重ね、人々は所謂文明の重荷を荷ひ兼ね、その苦痛を訴へ始めたのが、即ち十九世紀末の一大事實。十八世紀末に文彩虚飾の形式文明に對して、ルソーが「天然に復れ」と叫んだと同じ様に十九世紀末の豫言者は皆「自ら省みよ、汝自らを求めよ」と喝破してをるのは、この事實の反面の發現。一方では君主神權的の國家主義が勢力を振ひ、他方では何者をも平均し平凡化しやうとする社會主義が横行してをる間に立つて、天才——偉大な個人——の尊嚴を標榜したニーチェの如き激烈な思想が天下に歡迎せられるのは抑も何故ぞ。實利と形式とが天然の潤達な氣象、率直な田舎生活を侵害して、所謂十九世紀文明がノルエーの海村山間にも及ぶのを見て、人間感情の自由の爲めに萬丈の光焰を吐いたイブセンの出たのは抑も何の爲め。その他工業文明の眞中に立つて天然の美を崇拜したラスキン。壓抑苦惱の中に呻吟する同胞に對して「惡を以て惡に敵する勿れ」と教へつゝあるトルストイ。人の念頭は實利に横領せられ、社會は形式に支配せられて

をる間に、此の如く時代違い、或は迂愚とも見える此等の思想家が人心を吸収し、近世文明全盛の觀ある真中に、中世のロマンテクやカトリク主義が復興し來つた、この時代の渦巻きの中には、實に深奥な意味がなければならぬ。容易ならぬ消息が、潜むて居るに違ひない。

約めて云へば、歐洲の文明は古來樂天進取を特徴として、その理想の中心はキリストの萬人同愛の宗教にある。キリストは「活きんが爲めに死んだ救主、我が爲めに生命を棄てる者は眞の生命を得る」と教へた師主である。然るにその信者特に一般人民の世間執着の眼に映じては、キリストは我々の代辯者で、この代償者のある以上は我々は復再び生命を棄て、かゝる必要はない。而して他方で天父に對する愛又天父の我々人類に對する恩は十分に之を享け之を樂むのが人類の義務の様に見らるゝ。紡がず織らざる鳥も天父の恵で生きてある事實に天地人生の大消息を見て、愛情と同情渴仰に充ちたキリストの教も此等の人心に入つては、只管眼前の天恵に浴する現實主義となる傾きを

呈してをる。此等の卑俗化は前に述べた歴史上の事情と因縁相合して茲に西洋特に十九世紀の實利主義に轉じた結果、十六世紀の宗教改革は中世の忍受的退隱的キリスト教に對するゲルマン民族の活動主義の反抗であつたが、十九世紀末から今日にかけてこの現代文明に對する反抗が起つて、今や理想主義——キリスト教の眞福音で又人情自らの要求である理想主義の勃興が新時代の旗幟となりつゝある。この文明戦鬪の勇士の背後には「神の外によき者はなし」といふキリストの教へも聲援を與へて居れば、人情の衷心から湧き出たアウグステンの Confession も、愛情の靈火たるダンテの Vision も、信仰服従の大法鼓たるケンピスの Imitation も加はつて、それがドイツ中古の武士道と共に又大に東洋宗教の沈痛な諦觀悟徹をも加味して後援をなして居る。然らば東洋の宗教及文明の今後西洋に對する感化は如何なる點にあるか、又我々日本人のこの間に立つて果すべき天職は何處にあるか。世界の宗教及文明の前途は決して單純でない、然し又同時に甚だ多望

五 東洋文明の理想

である。

そこで眼を轉じて東洋の文明を觀察しやう。西洋で人間の活動がプロメタイヌの天神裏切りに始まつてをる如く、東洋では一般に賢明の王が世を支配して、人民が之に服従した事が人間歴史の始めになつてをる。印度のマヌは最初の人間で又同時に王者立法者であり、支那でも三王五帝が社會の始めをなしてをる。この傳説は即ち東洋古來の理想を代表するもので、服従は東洋道德の最大美德である。天を敬する、神意に服従する、乃至社會の秩序制裁、家長の權威に自己を投じてその命に従ふのが、東洋古來の道德である。支那の道德が如何に忠孝を以て一貫したか、印度の社會が如何にその階級制度を神法として之を固守し來つたか、今更述べる必要はなからう。バビロン、アッスリアの暴君すら、その天神の前には自ら奴僕と稱し、波斯教の如き活動主義の宗

教でも尙宿命の觀念に支配せられて之に服従する。此の如き服従主義の理想は事實の上では弊害をも生じたが、之を理想としてその粹を抜き、その心髓の高遠な意義を發揮して來れば、その中から諦觀、超脱の沈痛な信仰、嚴肅な節義となつて現はれる。東洋氣風のこの理想の方面を最も精神的に醇化發表したのは、即ち印度の宗教で、佛教は實にその粹、その代表者である。佛教がその消極主義の缺點あるにも係らず、又諸國に入つてその迷信と合したに係らず、その感化を東洋全體に及ぼした所以は即ちこの一般に東洋的な理想を代表し提撕したからである。東海の表に孤立した我々の日本も決してこの數には漏れ得ない事は、儒佛輸入以來の歴史が之を證明してをる。

佛教は印度思想の正統とは別派をなしてをるが、而かもその大本の理想では決してその埒外に出て居ない。印度思想の中心重點は一言に約めて云へば、服従の結果として離脱である。此の離脱の理想を擴充すると即ち無常流轉の小我を棄てて、常住普遍の大法に入没する事と

なる。天然人事何事も流轉の姿である。我々が「我」と思ひ「我が者」として愛着する一切は皆眞に我でなく我がものでない。我が眼が物を見るところと思つてをるが、眼は我でなく、眼をして見せしむる者は他にあらう、又なくてはならぬ。小い量見て我れと意識してをる者の外に眞の我は尙ほ一層弘い活動をなしてをる。水をして流れしむる者は水その者でなく、火をして燃えしむる者は火でなく、耳をして聴かしむる者、心をして思はしむる者、皆不可見超絶の本體、我の中心根底である。此く諦觀し證悟して、一切の我執を滅し、煩惱を斷じ、それから生ずる惡徳を絶つてこの流轉生死の紛々を離脱する。離脱してこの小なる假の我を大なる眞の我、寂靜不動の實在の中に没する、涅槃没入が即ち婆羅門教のみならず、佛教の究竟理想である。

この理想は一見しては頗る消極的の様であるが、その中には偉大深奥な人生の大消息が横はつてをる。その證據には、この理想の感化は實に人をして自己の永遠の理想の爲めには總ての愛着を斷じ、自分の

生命を犠牲に供するを辭しない諦觀の中の奮闘をなさしめた現證がある。支那人が何程この理想に感化せられたかは、一の疑問であるが、少くともこの諦觀離脱は支那道德の忠、孝、に、高、遠、の、根、底、を、與、ふ、べ、き、も、の、て、天、意、を、敬、し、て、之、に、服、從、す、る、の、道、德、思、想、も、離、脱、を、基、本、と、し、て、始、め、て、現、實、々、利、主、義、の、天、意、利、用、を、脱、し、得、べ、き、で、あ、ら、う。宋儒が物を觀じ理を究め、天命の中に我を没して性を修めた諦觀は即ち此れてはなにか。忠信孝悌の徳に進み、仁義禮智を修練するにも先づ性理を盡し、天命に従ふ必要を唱へたのも亦此ではないか。儒教のポシチキスムもその根底に入つて人心の奥を叩き、天意天理の源を極めやうとすれば、自らこの諦觀に入つて先づ我執を離脱して、離脱の中に天命性理を實現する必要に迫られざるを得ない。而してこの性理の學が直接間接に東洋特に印度の離脱理想に養はれ發揮せられた事は、一々證明するの要はなからう。印度思想の粹、離脱觀心の風は一般に通俗に支那の人心を化し得なかつたにしても、宋儒性理の學が特に儒教の正統學

派となつて、盡性、誠意、の道徳、靜觀、修養、の氣風が支那のみならず日本の徳育にも非常の効果を呈した事は注意せざるを得ない事實である。

觀心高踏の印度理想がその結果を現はしたのは、蓋し支那よりも日本て著しいと思はれる。人心華にのみ馳せて浮世の榮華に望月の缺くる事ないのを望むだ間にも、宿世の變へ難きを嘆じ空蟬の世のはかなさを悲むだのは何故であつたか。入る日をも返す勢ある權家の没落に心驚かされて、靜に祇園精舎の無常の鐘の音に耳を澄まし、沙羅雙樹の花の色に寂滅爲樂を觀じて、六道の苦艱を脱した人心は抑も何の縁。源平以前の此等日本佛教の感化は、浮世の歡樂に執着する人心の失望であるとしても、源平盛衰の後、人心が切に人生を觀じ始め、外面の動搖からして心は我に返りて我を捨て、茲に善惡の二報を捨て果て、大恩救主の廻向願力に頼まうとした信仰の覺醒に至つては、佛教の感化力の深く大なる事を證して餘りある。而してこの信仰の覺醒——即ち小我離脱の大福音は單に人の心を寂靜服從の無爲界に導いたの

みてない。この無爲の安立は、又實に大なる活カとして社會に現はれ、文人、藝術の人に觀美の甘泉を與へたのみならず、國民の徳風に超脱勇往の氣風を與へ、戰國の武士をして戰陣の間にも靜に念佛三昧に入らしめたてはないか。加之、禪定達觀の佛教は利害を無視し生死を超越して死して悔いなき氣風を馴致し來つた。若し古今の武士道にその形式的の方面を去て、その心髓、人心感動の奥に入つて觀察して、見たなれば、直接間接、有意無意共に此の如き離脱の理想が響き亘つてをるのを發見し得る。身を君父に捧げて命を鴻毛に比し、笑て死に就き、喜て水火に入る、その勇猛の奥底には靜觀超脱の基本が横はつてをる事、誰か拒み得るか。而して此の如き道徳の一要素として誰か印度理想の勢力なしと云ひ得るか。武士道の粹である沈毅達觀の勢力は決して單に祖先崇拜のみで、又原始儒教の忠孝のみで説明せられるべきものでなからう。服従すべき者には絶對の服従を捧げる、君父の爲めには命を捨てる、意氣に感じては百年の利害を抛つ、この美德は東洋の所

産て今尙日本に保存せられてをる。此等の道德をして有終の美あら
しめ、統一貫徹の力あらしめ、永遠に人心を動かす、深く人情を支配する
力たらしむるの、はその根底に一切の我執利害を滅し、煩惱迷惑を脱す
る觀心離脱の體達を要する。

諦觀超絶は東洋思想の心髓で、道德では至誠清廉の徳、文學美術では
洒脱超俗の趣を呈した。人間が自らを犠牲にする美德も此に養はれ、
利害以上に立つて義に殉ずるの氣風も皆此を源泉にしてをる。この
特質は蓋し西洋の人情にも深い響きを與へ得べき美風で、近世歐洲文
明の物質實利の真中に中世的ロマンチクの復興が歓迎せられる如き
は實にその證明であらう。然し、この離脱の風は一方に偏しては、又そ
の弱點短所を表はし來る。服従の徳が自信ある人格修養の基礎を缺
いては、奴隸根性を馴致し、諦觀の證悟に勇猛の氣力を伴はないは、厭
世退隱の氣風に陥る。屈從と退嬰は多くの東洋國民現在の氣風であ
る事は争ふべからざる事實で、その源は又その文明の基本氣風の根底

に存し、印度支那を始め東洋諸國は數百年乃至千年以來この短所を増
進しつゝある。今こそは旭日の勢ある我々の日本國も六十年前まで
はこの氣風の中に昏睡しつゝあつたと云つてよからう。西洋の文明
がその宗教の博愛的性質、人道主義の福音に養はれたに關せず、その博
愛を轉じて愛着我執に化し、ユダヤ性の遺傳で排他自利の惡徳を増長
したやうに、東洋の宗教はその超脱を俗化して卑屈にし、至誠を腐敗し
て退守に陥るに至つた。佛教の中に現はれた氣の滅入りそなな厭世
自屈、朱子學の末流の卑屈因循、日本の文藝が陥つた洒脱の流弊である
萎縮輕薄、皆東洋文明の萎靡的徵候である。最近日本の國運が勃興す
るにつれて、人心は茲に覺醒し、千年以來の國民的自覺が益す明白に又
た強く意識せられ始めたのは即ちこの流弊に對する大反抗で、又た人
情の他の一面の師子吼である。今迄儒者等が排斥した佛教の厭世思
想が攻撃の的になるのみならず、退嬰的で形式的な儒教に對する宣戰
が明治の初年以來常に布告せられつゝあるのも此れが爲め。一時は

西洋の物質文明に心酔した人心が何物をも東洋風の者を舊弊陋見として捨て去らうとした事ばかりでなく、日本の東洋に於ける特別なる天職——少くとも西洋文明の長處を同化して東亞の民を醒まさうといふ自覺が盛になつて來たのも此が爲め。獨り日本ばかりでなく、印度では印度教のキリスト教同化、瑜伽觀法の進取的布教、波斯教の文明的或はハイカラ的活動、回教の信仰の復活の如き、又は支那や暹羅の覺醒皆千年來の陋習に反抗して起つてをる。假令日露戦争はなくとも、この反抗覺醒は勃々として起つて來やうとしてをつたのが、今度の戦争の結果一層氣焰勢力を加へ來つたのは決して偶然でない。その形勢は恰も數百年來等流三昧に入つてをつた大佛像が破顔微笑し始めたのみならず、腕を扼して起たんとするに喩へ得らるゝであらう。

六 兩者相互の感化力

此く觀察して來れば、現今の文明は單に東西兩洋の文明が接觸して

相感化しやうとする點で顯著なばかりでない。愛情と活動とを根にするキリスト教文明が十九世紀に我執競争の極點に近づいて、茲に悚然として恐れ始めたと同時に、觀心超脱を退嬰卑屈に陥れて昏睡を貪りつゝ、あつた東洋文明は反對に活動進取、即ち教佛の語て云へば、勇猛精進の必要を感じ始めた。この間には實に容易ならざる又多望な時勢の激潮が流れてをると見なければならぬ。云はゞ人情の奥底に潜むてをる、兩極愛着と離脱とが東西兩洋の文明を作り出だして、その末流が又各反對の方向に——我執と退嬰とに陥つて、その極、二十世紀の劈頭に雙方ともその一面の缺乏を感じ始めた。この現代の潮勢を容易ならざるものと云はずして何と名け得べきか。

此の如き兩極の覺醒、陰陽の氣運は今後世界の文明の大勢力である。歐洲近世の文明には潤達な氣象は充ちてをるが、嚴肅な severe の氣風は古に比して大に衰へてをる。キリスト教の愛の福音は執着に變じ、ゲルマン民族の自由の氣風は放埒に傾いて、茲に競争奮闘といふ美名を

被つた利害の衝突階級國家の嫉妬が增長し、國にも人にも義の爲めには利害を抛つ自己犠牲の徳は消滅しつゝある。中世キリスト教が靜觀 meditation の中から得來た敬虔の信仰が人心を緊め括つて來た相愛團結の基本は缺け、封建制の中に發達したゴト族の武士道で義の爲めに敢死する武毅 *valor* の美德は既に過去の夢の如くなつてをる。此に於て十九世紀文明の弊に飽き果て又苦みつゝある人心は、キリスト教の人道主義と中世の義理尊重とを回顧し始めた事は先に述べた通りであるが、この回顧の外に彼等は、大なる刺激を外部から受けるに至つた。即ち東洋氣風の粹、高踏超脱の氣風を代表した日本の武士道が今回の戦争で大に發揮せられ、此が爲めに數年來歐米の人心に感動を與へつゝある佛教や印度宗教の觀法解脱の精神は、一層の感化力を強くするに至らうと思はれる。一小事の様であり、又日本ではそれ程に注意を惹かないてをるが、戦争の終局講和の衝に當つた小村男爵の *stern* 意を惹かないてをるが、英米人士の注意を惹いた如き、その感化の將來 *bevalie* な人格が特に英米人士の注意を惹いた如き、その感化の將來

に及ぼす勢力は決して小少でない。今度の講和條件は日本の國內では非常の不滿を買つてをり、又その成行經過は日本外交の失敗であるとしても、その代表の人物とその結果とは、西洋の人心に、單に外交以上更に大なる者が國際關係を支配する力のある事を感じしめた事は、特に同胞の注意を促さざるを得ない。英米の人士は今や日露の講和を單に利害の計算として觀察せず、平和といふ大理想の上から見來つて日本が有形の利を失つた代りに無形の地歩を占めた事實を理想化して之に非常に重きを置き始めた。此は十九世紀文明に反抗する人心の發表で、此の精神的覺醒は又同時に日本武士道國の爲めにする自己犠牲の精神が決して偶然に生じたものでない事に想ひ到つて、この根本が高遠な宗教信念に基いてをる、その感化力の何者なるかを求めんとしてをる。

最近の一事例を舉げて見れば、英國の思想界で有力の自由主義鼓吹者である *Hilbert Journal* の主筆 *ジャクス* 君がその十月號に「キリスト教

國は果して最高の道徳を實行してをるか(Is the Moral Supremacy of Christendom in Danger?)といふ一文を公にし、盛に現在歐米の社會道徳、國際道徳の弱點を暴露して、この弱點の反對は日本人が之を實行してをる事を論じた。約めて言へば、現在キリスト教國の道徳はキリストの眞旨に悖り、その理想である人類相愛の旨義を蔑視し、特に義の爲めには利害を超絶する理想の立場から人生を達觀する風を缺いて現實の功利を追ふて走つてをる。それにも係らず、キリスト教國の民はやはり昔の儘に自分の宗教と道徳とが人類最高の標準に達してをると自信し、自滿して、その實その信仰に忠實ならず、その道徳を實行して居ない。此の如き形勢は實に容易ならざる道徳と信仰との危機であらう。此のまゝで進んだなら歐米の文明は腐爛と瓦解との將來あるのみ。然るに茲に歐米以外に一大新勢力が現はれた。それは云ふまでもなく日本の勃興で、日本の勃興は單に物質文明や機械利用の結果でない。その下に潜んでをる國民の修養、人民の徳性に偉大なものがあつて、發

してこの勃興となつたに違いない。由來歐米では佛教を單に厭世教と見、佛教の如くこの世を浮世と觀ずる宗教は單に嬰弱な厭世に陥て道徳力行の氣力を殺ぐものとのみ考へてをつた。然るに此の佛教は日本人の血に這入つて全く豫期に反し結果を呈してをる。佛教は我執を絶つ事の一切道徳の根本である事を教へ、日本人は之れに *frugality, fealty, filial piety* の美果を結ばしめ、義の爲め理想の爲めに死をも辭しない沈毅勇敢の士風を發表した。戦争の間に發表したあらゆる美徳は皆日本人が自己犠牲の精神に富んでをる事、歐米人の豫想にだも上らない者のあるのを示し、又その講和に處する態度は、その國民の本能的性質が判斷と果斷との高等な程度に達してをるを示したてではないか。その他教育の上では國民的統一、美術文藝の上で脱俗高踏の美、皆是れ日本人の美徳が歐米人の現在に最も缺如してをる點で勝れてをるを證明する。キリストの使徒パウロが「耐え忍びて善を行ひ、光榮と尊貴と不朽とを求むる者は永久の生命を得ん」といつた言は正しく日本人

の美を指した者の様である。日本人はキリスト教徒でない、然し神には偏頗なし。『神法なき異邦人も若し本性の儘に従つて神法を守らば神法なきも己れ自らにして神法たるなり。』歐米のキリスト教徒は徒に自ら高しとしないうて、大に日本人の道徳に鑑みて、その刺激の新鮮な空気を流通してその文明の腐爛を一掃すべきでないか。

此の如き思ひ切つた警告が有力な學者の筆に上つた事が已に大切な事實であるのみならず、又たこの警告に對する輿論の趨向も實に大事の消息を傳へてをる。この評論に對する批評の中には或は之れを thought-provoking と驚き、或は之を shocking と憤る者のないではないが、公平の觀察者、志ある達識者は皆此を以て時勢に緊切の言としてこの論者を以て、近世イスラエルの豫言者とすら言つてをる。それ等の人々はこの論者の日本賞讃については尙考究すべき者が多いと斷言しても、尙この警告その者は歐米現今の道徳に對する痛切の見解批評として、之を迎へてをる。

一方にはキリスト教精神の復活、中世主義の醇化、近世思想、近世道徳の頹勢を救はうとすると共に、他方では、東洋思想、佛教國の道徳、日本の士氣を理想的の刺激劑としやうとする風はこの一事にも現はれ、又他の方面にも、追々現はれつゝある。近頃ドイツやオーストリアで佛教の景慕者の増した事。米國で印度宗教の講演や布教が歓迎せられて、宗教界の一勢力とならうとしてをる事。若くは又名はキリスト教といつてもその實質は非常に東洋的佛教的なトルストイの勢力の加はりつゝある事。此等は何れも歐洲の信仰がキリスト教の復古と現代の刷新とに東洋思想の刺激を要求してある證明である。此等の事柄の詳細は今一々述べないが、兎に角、佛教と武士道との精神的國寶を抱いてをる日本人の義務が世界的に膨脹して來た事に對して、我々は茲に非常の覺悟を定めなければならぬと信ずる。

翻つて東洋特に日本の状態を見るに、今までの退嬰因循の氣象を脱して日本には餘り多く残つて居ないにしても、濶達の進取、包容の同化

に進む必要の刻々に多くなるは勿論。此と共にその信仰理想に一貫透徹の根底を發揮して世界の公道を歩み、宇宙の大道を踏むて世界と共に人道の進歩、將來の文明に活動するのは我々にとつて當眼の必要又當然の義務である。この天職事業に對して日本の社會が特別の長處を有してをる事は前にも述べたが、我々は尙一層この社會團結の精神を擴張し、愈よその理想を清淨高遠にすべきは云ふまでもなからう。一例を舉げて云へば、日本人の信仰に一特色をなしてをる祖先崇拜の如き、その起源は別として、いつまでも單に肉體血族の祖先の死靈を崇拜して祝福を祈るといふ様な狹隘な見解で終るべきでない。我々には肉體の祖先もあるが、又精神の祖先もある。血族の祖先の靈が實在して我々に密接の力を與へるのみならず、總て精神信仰の上で心靈の縁、信仰の繋ぎのある心靈は又我々に感化を及ぼし力を與へてをる。我々の祖先崇拜が狹隘な排他の自利的崇拜でない以上は即ち精神的に曠達な志氣を有し、人情の粹に入るべきものである以上は、その範圍も

亦血族の範圍に止まるべきでなく、その動機も亦一國一人のみの利益を祈るでなく、弘く人道の爲めの崇拜となるべきである。三界萬靈盡く我が精神の中に入り、來り、一切の聖者皆我が祖先となつてこそ、祖先崇拜の精神は普遍永遠の意義を生じ、不朽不悖の適用を得るであらう。此の如き廣濶の精神は日本建國の理想、宇内六合を我皇の仁慈の中に攝すべき大抱負の中にも存し、佛教の大慈悲の中にも含まれ、又幾分かは實行せられて來た。然し現在の状態で云へば、この理想は未だ十分明白に現はれず、又世には形式主義、保守排他の精神のこの光明を蔽ふ者を存してをる。この陰翳を排するのは、元來の國寶を明々地に持ち出だし、在來の美德を發揮するにあるは勿論であるが、此と同時に又他に好刺激劑、好滋養があれば大にその力を利用し、その生命を包容して、世界と共に進徳の境に上る必要がある。此の如きは即ち深厚な徳本、宏遠な開國的宏謨の大方針であつて、大切なるこの事業を單に一國の問題として見ては、根本の精神に悖るものといはなければならぬ。

蓋し超俗は單に利害超絶て終るべきでなく、利害以上更に一段の理想に進むべき準備である。我執を離脱して自分一己の愛着に打ち勝つた者は、更に自己の中に同胞人類を慈愛の中に攝容するの勇氣と飛躍とを要し、義の爲めに死する者は又實に正義の極致、萬人同根の精神の爲めにその小身命を棄てるべきである。安積良齋が「王陽明の語に、破山中賊易、破心中賊難」と誠に心中私欲の敵を破るは、泰平の戰場にて天君地父への大忠孝なるべし（武士道叢書三）と教へたのはこの離脱達觀の嚴肅な教である。「一身の氣は即ち天地の氣なり、此氣の本體は至大至剛なるものにして金石を貫き宇内に充塞するなり（同上）といふのは即ち普遍の精神が忠孝の大本なるを明かにしたものではないか。至大至剛の本體とは何であるか。キリストが「汝等の父の完きが如く完くせよ」と教へ、ポロロが「汝等身に於ても靈に於ても神の光榮を顯はすべし」と奨めた信と愛とはこの本體を我々の躬行で切實に實現する原動力ではなからうか。我々は此を以て西洋文明の精神を借用する

てはない。人心の奥、心靈の粹に至りては、東西古今その軌を一にし、その徳を均しうするその大源泉に入つて、而して世界と共に又人道の爲めにこの究竟理想を實現するのである。道に古今の別なく、愛に東西の隔てがない。以上は東西古今を論じて毛嫌ひをするのは既に道てなく理に背いてをる。我々は今や世界の舞臺に立つて世界文明の一役者たるのみならず、又その王者師主、嚮導の天職を自覺し實行すべき位置に立つてをるではないか。然らば則ち此時に當つての大飛躍は即ち東西吞吐の大氣宇に待たなければならぬ。此際の大活動は實に西洋文明の精神的心髓を包容攝受して此を以て將來の世界文明に貢獻するにある。

西洋文明の物質的方面が日本に入つて以來、それに伴つてその思想感情が文藝と共に人心を浸潤し始め、その理想信仰が社會に効果を現しつゝある事實に就ては今之を詳述する道はない。佛教の中に談理の反動として信念の復興が現はれて來た、その刺激は何處にあるか。

社會の道德に公德の尊重のみならず、特に夫婦の信愛、商工の信用が増したのは何に因るか。數へて來れば、西洋思想の感化は意外に深く深いらしい。只茲に一つ根本的に大切な一事を云へば、人格の觀念である。支那日本の道德には名分の觀念は中々に成熟し、節義の徳は餘程發達してをる。而して節義名分は即ち個人がその人格の尊嚴を尊重するに歸する。然し退嬰保守の風に染つた東洋道德の末流には、對手の人格を尊重する念、即ち他人の中にも自分と同格の人格が存するのを認めて此と共に並び立ち進ては彼と我と相許し相攝する氣風は甚しく缺けてをる。武士は相身互は實に人格尊重の理想を代表してをるが、相身互の間に同じ精靈の呼吸を感じて、信の交りの中に融合する進取包容の愛は社會生活の實際に乏しい。一つの信、一つの望の中に「靈に充てる者に充たされて人格の尊重とその結果の融合の行はれる事は實に我々の最も多く努力を要する點である。而して此の如き人格の觀念は西洋文明の一特徴で、その流弊は別として、その源は實に萬

人の人格を統合し、總括した一大靈格、天父の信仰から出てをる。この一點だけでも我々の將來の文明には尙ほ大にキリスト教信仰の根本精神に待つ所あるべきを示してをる。

人格の觀念は事の一端であるが、その根本の消息は深く、その結果の及ぶ所は頗る廣い。忠孝の服従もこの觀念で養はれて始めて奴隸根性を脱した眞の忠孝、天地君父への大忠孝となり得る。人の祿を食む者は人の事に死すとが養育の恩に對して父母に事へるとかいふ如き小忠小孝も忠孝ではあらう。然し此の如き現實主義の忠孝服従は奴隸的服従となつて、君命に従ふ事は知るが、君の爲めに諫死するの勇はこの中に生じ難く、親を養ふ事はしやうが、厚養奉事が關の山となり易い。苟も人生が偶然の生でなく、天地が瓦石の塊でない以上は、我々は人生に一路の道があり、天地萬法に一如の源泉があるを信じなければならぬ。この一乗の大道を主宰する大主義、この一如の靈動を活かす大神靈は、我々の永遠の君父である。之を稱して天命といひ、天地覆載

の徳といつてもよし、天の御中に永へに立たす主といひ、生々々我々を活かす産靈といつてもよし。何れにしても永世一貫の大君主に奉事する大忠義三世萬人の父の慈愛に投じて己れを捧ぐる大孝心が一切忠孝の盡させぬ妙用の源である。天壤と共に窮りなき皇祚に事ふるのもこの一義。天地化育の徳を代表して直接に自分を教化し育成してくれる父母に誠を盡すもこの一心。君に忠なるは即ち萬靈の主宰に事ふる所以、親に孝なるは直ちに天地の徳を戴く所以。天の御中に立たす主を信じてこそ、忠義に永遠の意義は生じ、萬物化育の神靈に歸依してこそ初めて孝心に不動不盡の誠を表はし得る。地上の國の君主は永遠の國の王の現はれ、現身の父母は天上の親の化身。此の如き君父に對する忠孝の外に忠孝の源泉はなく、此の如き君父に對する信頼を外にして眞の服従は存し得ない。士の身を修め、君に事へ父母に孝行し、兄弟夫婦朋友に相交て快く相和する如くに致さんことを知るは、その道を尋ねて其の用を知るに在るべき也。(山鹿素行、武士道。叢書上卷八〇頁)

武士道……(は)あ(の)づから道にかなへることもあれど、私心偏見を免れざることも多し……聖人の道を明らかにして義の至當を求むるこそ眞の士道とはいふべけれ。(齊藤拙堂同二頁)此の如く近古日本の儒家も適切の教訓を與へてをるが、その道といひ義といふも、究竟に至れば萬靈一如の大道に至らざるを得ない。忠孝の大義は此に存し、此の道は天地の主宰神一つ、信一つの信に依て我々の眞の道となり得る。諦觀の高風で現世の小利害小節義を撫無し、離脱の美德で現身を超越する信念に養はれた東洋文明の代表者我々日本人は茲に百尺竿頭更に一步を進めてこの大忠孝に着目し、此に依て忠孝の道徳を永遠にし不盡に活用しなければならぬ。而して此の大忠孝は西洋文明の大精神として、國と力と榮を窮りなく有ち給ふ父に歸依するキリストの福音に最も明かに現はれてをる。我々が西洋文明の理想を同化し得る所以は折衷縫合でなく、この精神の根柢で相包容し相互に照明するのである。此に至れば我々の人生は假りの生、螻蛄の浮世でなく、我々の國家

は偶然の國土、肉體だけの宿る國てなく、我等は復、寄寓者にあらず、聖徒と同じ邦、又神の家に屬する者なり」と明言し斷言し喝破し又歡喜し得る。此に於いて我等の日本國は偶然の位置て東西兩洋の中央に位してをるのでなく、偶然の因縁て萬世一系の皇室を戴いてをるのでなく、天壤無窮の皇運を扶翼するのは即ち天地の化育に參する所以となる。天御中主は名のみでなく、平和人道の名は空言でない、又我々は之を虛名空言で終らしむべきではない。

東西兩洋に於ける陰陽の氣運、兩極の覺醒は、概觀し來つて新時代の文明の特徵及び需要を示してをる事此の如し。社會の狀態に就いて日英兩國の相互の影響が起るべきと同じく人生理想の上、即ち宗教信仰の上で東西兩洋の接觸と融合とは、實に新なる世界的文明の曙光といふべきで、彼れが佛教の感化力に學ぶ所があれば、我は又キリスト教の精神から得る所は多い。而してこの相互の感化は單に捨短取長の方便的折衷、局部的總合でなく、人心根本の理想が兩面に現はれ、その需

要が兩端から起つて、茲に一大新氣運を作らうとしてをるのである。此を稱して「文明の新紀元」と云はずし何の名があるか。

十九世紀の競争文明、近世の我執盲動はその惰力を有してをつても、我々は之を超えて將來の進運を指し、新文明の曙光を望んで進むべきである。抑も我が國民の信仰は八百萬神の上に立ち、中に現はる、天御中主の大靈に同化して、その中から不盡の源泉を汲むべきでないか。高産靈、神産靈の生々の徳は、永く我等の中に活きて、曠達の化導、不退の化育を行はしむるではないか。皇祖の徳が宇内を蔽ひて出來たこの舊邦は、その命常に新て、儒の天道を同化し、佛の萬法を攝取し來つた。さすれば、今日特に新なる國運に際會してをる我等は、心靈の根底、信仰の甘泉の中に八紘を兼ね、東西を併せて人道の大勇士、大導師となるべきではないか。

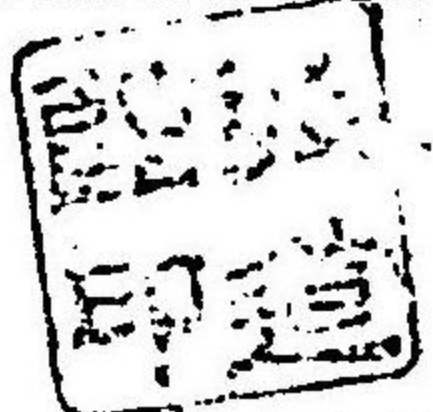
國運と信仰完

明治卅九年三月十九日印刷
明治卅九年三月廿三日發行

國運と信仰與付

正價金壹圓

不許複製



著 者 姉 崎 正 治
發 行 者 辻 本 卯 藏
印 刷 者 青 木 弘
印 刷 所

東京市京橋區南大工町一番地
東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地
株式會社 秀英舍第一工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

發 兌 元
關西特約 大賣捌所

東京市京橋區南大工町一番地
大阪市東區南本町四丁目

弘 道 館
積 文 社

●近刊豫告

男爵金子堅太郎先生講述

日本教育之将来

菊判形 全一册 (三月下旬發行)

發兌 東京京橋區南大工町一番地 弘道館

(三)

近刊豫告

文學士 北澤定吉先生著 (三月下旬發行)

偉人耶穌

洋裝菊判形 全一册

人としての耶穌は、如何なる儀表を與ふるか。この興味深き問題を解きて、新しき意義を耶穌其人に發見せるは本書なり。曰く我神を見たり、曰く我眞理を直觀せりと。宗教に於てこがる、時代の叫はこれなり。知らず本書は何物を耶穌に得て時人の衷情に訴へんとはする。著者は大學院にありて哲學を専攻し、知を重んずると共に、同情を神祕説に寄する人、其議論の公明正大にして、其筆に温かき感情の溢るゝは、本書の特色なり。苟も論理宗教の問題に向つて焦慮するの士は、本書を一讀せざるべからず。

發行所 東京市京橋區南大工町一番地 弘道館

(三)

●新刊廣告 (發賣)

法學士 笹川潔先生著

大觀小觀

○菊判形皮表紙金文字入美本全一冊

○正價金四拾錢 郵税金六錢

發兌 東京京橋區南大工町一番地 辻本弘道館

30
259